351
974

0049112000

0049112-000

特209－834

国語

岩波編輯部・編

岩波書店

巻2

昭和11

AHJ

437

特209
834

國

國語

學習指導の研究

岩波編輯部 編

岩波書店刊行

昭和一二年一月一日 帝國大學圖書

緒言

一　「國語」編纂の趣意

わが國の現在が、國内的にも國際的にも非常な困難に際會してゐるのは事實であります。併しながら、國の將來を危くしようとするが如き思想の跳梁は漸次その勢を屏め、經濟的逼迫は海外貿易の振興によつて稍緩和の徴を見せ、全世界の問題であつた滿洲國は既に獨立三周年を迎へました。困難の中に在りながら、今や困難打開の曙光は見え初めたといふべきでありませう。とはいへ、これは未だ眞に曙光に過ぎません。進んでこれを輝かしい黎明たらしめ旭光たらしめることは、現下に於ける國民最大の責務であり、國民教育喫緊の要事でなくてはなりません。

一體、國史の上に見ましても、又世界史の上に考へましても、國運發展の原動力は國難の裡に孕まれてゐるといつても敢へて過言ではないと思はれます。國民の衷に深く埋藏されてゐる力は、國難に際會して始めてその全貌を示し來るのが常であります。この意味に於て、わが國現在の難局は、國民が衷なる力に目醒め、力强い發展を畫すべき機會でなくてはなりません。われ〳〵は徒に逡巡すべきではなく、又妄りに興奮すべきでもなく、沈著これに耐へ、鋭意これが打開に努め、そこに自覺せられ、集注せら

れる力と熱情とを以て、進んで當來日本建設の爲に健闘すべきであります。國民教育の現實的基礎は、實にこゝに把握せられなくてはなりません。われ〳〵はかゝる秋に於てのみ、眞に全人の教育が緊要であり又可能である事實に目醒めて奮起すべきであります。「國語」は、國語教育を通じて、かくの如き現實日本の自覺に立つた國民教育の重任を果さんが爲に編纂せられたものであります。

申すまでもなく、中學校に於ける國語教育の方針は法規によつて示されて居ります。近年改正せられた新教授要目によりますと、國語講讀の教材については、「總ベテ文章ノ模範タルモノ」を一般的の規定となし、更に特殊的規定に於ける指導精神としては、(一)「健全ナル思想、純美ナル國民性ヲ涵養スルニ足ルモノ」(二)「心情ヲ高雅ナラシムルモノ」(三)「常識ヲ養成スルニ足ルモノ」の三項を立て、素材としては、これに應じて、(一)「國體ノ精華、民俗ノ美風、賢哲ノ言行等ヲ敍シ」たる國民的教材、(二)「文藝ノ趣味ニ富ミ」たる文藝的教材、(三)「日常生活ニ裨益」ある文化的教材の三方面を要求してゐると見ることが出來るでありませう。隨つて國語講讀の材料たる教科書に於ては、敍上の如き現實的基礎に立脚した祖國日本の精神を如何にこの法的規定を通して具現するかに編纂の苦心があり、創作的性質が成立しなくてはなりません。

「國語」がいかにこれ等の諸條件を具現し發展させようとしたか、それは「國語」そのものについて御閲覽を請ひたいと存じます。が、今その編纂の目標たる主なる條項を擧げますと左の如くであります。

- 表現に生命あり結晶あるもの
  - 一　國民的教材
    - 1　國體の精華
    - 2　民俗の美風
    - 3　賢哲の言行
    - ⇒國民的陶冶
  - 二　文藝的教材
    - 4　素樸・雄健
    - 5　優美・高雅
    - 6　崇高・深玄
    - 7　可笑・明朗
    - ⇒美的情操涵養
  - 三　文化的教材
    - 8　科學的
    - 9　哲學的
    - 10　藝術的
    - 11　宗教的
    - 12　社會的
    - 13　經濟的
    - 14　國際的
    - ⇒人間的教養

イ　表現に生命あり結晶あるもの

「健全ナル思想、純美ナル國民性」を養ふといつても、國語科は修身科でもなく、歴史科でもない、

あくまで國語科であらねばなりません。卽ち國語の教材は、さういふ思想なり性質なりが、たゞに國語によつて表現せられてゐるといふに止らず、それが、眞に國語になり切つてゐなくてはなりません。この根本條件を忽にした教科書は、修身の例話集であり、歷史の補充材料ではあり得ても、國語教材ではあり得ないことはいふまでもありません。一體に普通教育に於ける國語講讀は、國語的表現のあらゆるものに及ぶことは出來ません。またその必要もないと信じます。國語的表現の勝れたもの、有力なものを選んで、その勝れた點、有力な點を十分に把握させることがその任であります。併し單なる文法的正確や洗練せられた字句の羅列が眞の「文章ノ模範タルモノ」でないことも亦、いふまでもありません。殊に當來文章の範たるべきものは、單なる形式的正確や樣式的完成ではなく、內容そのものの力が卽ち表現の力であり、表現そのものの美が直ちに內なるものの美である如き、生きた文章でなくてはなりません。この意味に於て、法規上「文章ノ模範タルモノ」を根本規定としてゐる所以を十分生かした教科書たらしめることを期しました。

ロ　國民的教材

この教材を、指導精神に卽していへば、日本精神の涵養であり、國民性の陶冶であります。しかもそれは、素材として敍せられ、概念として語られたものであるよりも、或は民俗として行はれ、或は言行として具體化せられた國民性が國語となつて表現せられたものでなければなりません。かくて始めて修身科ともちがひ、歷史科とも異なつた國民的教材が國語科教材として選び出されるのであります。

併しその國民的なる意味は、ある時代の、又ある一部の人々の有つ特殊な概念ではなくて、悠久三千年の歷史を通じて現れ、國民生活のあらゆる事象を基礎づけてゐる、しかも普く世界に光被すべき底の眞理の顯現としてのそれでなくてはなりません。と同時に、それはまた、比較的物資に惠まれることが乏しく、一に人間力・意志力によつて國の發展を畫さなくてはならない現實日本に立脚し、しかも從來世界のあらゆる先進文化を攝取し來つて、今や獨自の日本文化を世界文化の上に建立すべき歷史的使命を帶びて立つてゐる國民としてのそれでなくてはならないのであります。「國語」は特にかくの如き立場に於ての國民的教材の採擇に力を致しました。

ハ　文化的教材

「常識ヲ養成スルニ足ル」ことを指導の目標とする教材は、素材としては文化的教材といふことが出來ませう。「日常生活ニ裨益」あるものたる爲には、科學的なもの、哲學的なもの、宗教的なもの、藝術的なもの、政治的なもの、經濟的なもの、國際的なもの等のそれ〴〵國語的表現が擧げられるでありませう。

わけても、日本文化建設の要望が日に高まりつゝあるこの際、その核心たるべき國語の本質を自覺し、求心的にその統一點を確立すると共に、遠心的にこれを中心とした文化的發展の諸相を辿らしめること

は、單に全人的教養として人間性を擴充し、深化し、充實させる上に肝要であるのみならず、又日本文化建設の爲にも必須な準備であつて、この一面を缺いては、決して眞に有力な日本文化は建設せられないでありませう。

「國語」が、文藝に限らず、普く文化の諸形態を素材とした國語的表現を網羅し、且これを體系的・發展的に概觀させることを主要任務といたしましたのは、この常識養成の意義を深めて、第二の國民をして眞に日本文化建設の使徒たらしめようとする念願に出づるものに外なりません。

二　文藝的教材

國民教育に於て、「高雅なる心情」を養ふことを直接の指導要旨とするものが、「文藝の趣味に富むもの」であることはいふまでもありません。併し、これはいはば狹義に於ける文藝的教材であります。廣義にいへば、素材としては國民的教材であつても、また文化的教材であつても、その表現に於て文藝的價値を有するものは文藝的教材であることは、いふを要しない所であります。隨つて狹義の場合は、文藝としての文藝たる教材ともいへばいはれませう。廣義の場合は、國語的表現として生命あり結晶あるもののすべてを含むものであるといつて差支ないと思ひます。一般に國語教育が文藝教育として考へられ、國語教育の材料が一國の文藝でなければならぬと考へられる所以はこゝにあるでありませう。この意味に於ては、むしろ文藝性は國語講讀教材の一般的規定であつて、それを素材的に抽象すれば、指導目標上國民的なるものと、文化的なるものとに類別されるものと見ることも可能であると思ひます。

「國語」はこの意味に於て、各教材を彙類採擇し、その文藝的性質に於ては、感覺的快適、末梢的銳敏に墮する如きものを避け、優美にして高雅なるもの、可笑味あつて明朗なるもの等、完成期的性質のものと共に、素樸にして雄健な原始的性質のもの、及び主として中世に於て開拓せられた、意志の世界の表現たる、崇高にして深玄なるものを採り、以て國民の教養に資し、更に國民の若々しい意志力の伸展と鍛錬を期さうといたしました。

ホ　排　列

教材の排列はその選擇と相俟つて、編纂精神を具現すべき重要な條件であることは申すまでもありませんが、「國語」は全學年配當に當つては、第一學年から第三學年に至る三箇年に於ては、既に選擇されてゐる教材を生徒心意の發達の程度と季節との關係に適應して排列し、第四學年に於ては日本文化の全面を概觀せしむべく、第五學年に於ては國文學の史的展開の跡を辿らしむべく、それ〴〵排列を試みました。これは、下級生はまだ國語的表現の時代的・樣式的種々相に接することが少く、また心意發達の程度もこれが理解を十分ならしめるに至つてゐない爲に、專ら國語的表現の種々相に觸れさせることを主眼としたに外なりません。上級生になれば、既に國語的表現の種々相に觸れて、これをそれ〴〵に定位し得べき讀書力に達して居る筈でありますから、今はそれに體系を與へる爲に、或は文化形態によつ

て彙類し、或は史的展開によつて系統づけることが可能であり、必要であることは申すまでもありません。

次に各學年に於ける各篇の排列に於ては、その篇その篇の意義によつて次序するのはいふまでもありませんが、更にそれが前篇との關聯に於て、また後篇との關聯に於て釀出せられる意義・情調を定位し、發展させることに留意しなくてはなりません。編纂が單なる寄せ集めでなくて、創造的な何ものかであり得るか否かは、かゝつてこの點に存します。隨つて又、それが、教授の進行を單に目的的ならしめるに止らず、更にこれを自然的ならしめ得るか否かの分岐點になるのであります。「國語」が、特にこの點に留意した排列法を採つた外にも、學習指導書に於てこの點を明らかにすることに努めてゐるのは、この所以に外ならないのであります。

「國語」の特色

以上明らかにいたしました如く、文部省令による新教授要目を體系的に理解し、その根本精神を實現し發展させたことは、「國語」の全體的な特色であると信じます。

特に「文章ノ模範タルモノ」が最も一般的な規定であることを發見し、しかもそれを單なる形式的正確乃至整頓とせず、內外を貫ぬいて表現に生命あり、結晶あるものとした所に、國語教科書としての本質を確立し得てゐると信じます。

更に「國語」が、當來の國語教育は、抽象的な形式主義・內容主義の對立・折衷を去つて、眞に具體的・全體的な立場に立つものでなければならぬといふ信念に基づいて、言語學以前の、また文學以前の具體的・現實的な言語活動にまでその領域を掘り下げようとしたことは、國語教育の本領を確立し、新領域の開拓に資する所以であると信じます。又國語教育に於ける眞の國民精神の涵養は、國語愛の自覺に俟つものであり、眞の國語愛は國語の個性を自覺することに外ならぬとの確信から、特に「ことば」の意義に目醒め、國語の個性を明らかならしめるべき教材の採擇に意を用ゐたことも、國語教育の基礎確立の上に必要な努力であると信じます。

畢竟するに、「國語」の使命は、現實日本の自覺に立つて當來日本を建設すべき國民の鍛成を念とし、純正なる國語教育の全野に於てこれを力强く分擔しようとするにあることは申すまでもありません。

以上は「國語」編纂の一般的方針でありますが、更にこの方針を立て、この方針を實現する立場が、實踐を通して發展し來つた學的體系であることは「國語」の根本的特質を成すものであります。思ふに眞實な國語教科書は、單なる國語學・國文學の該博な知識、もしくは學理としての學理によつて編まれるものでもなく、又單なる教育的經驗によつて成るものでもなく、學理を實踐し、實踐から學理を發展させようとする熱意と努力からのみ編成されるものであると信じます。かくの如き信念から、現實日本に目醒めた當來の國民教育の爲に、又眞實な國語教育建設の爲に、大方の御淸鑑を冀ふ次第であります。

二　學習指導研究の組織

本書は「國語」の編纂精神を、各卷につき、各課について具體的に闡明し、且編纂者の立場から學習指導の一試案を描いて見ようとしたものであります。

本書は、各教材について、

第一　解題
第二　教材としての研究
第三　備考

の三部から成る組織を有つて居ります。三部のうちでは第二の教材としての研究が主體であることはいふまでもありませんが、教材研究にとつて何よりも肝要なのはその方法的體系であると考へられますので、主として文學研究の方法論に基づいて、

一　讀み
二　解釋
三　批評

の三段階を立て、まづ、「讀み」を「讀み」としての完成に導く爲に「註解」を施し、その「讀み」の完成から「解釋」を發展させ、「解釋」を「解釋」として完結させることから「批評」を發展させるといふ如く、發展的にこれを位置づけさせることを指導方法の大綱といたしました。

學習に於ける方法體系としての「讀み」は、これを作用としていへば直觀であり、意義としていへば鑑賞であります。隨つて「解釋」は、作用としていへば直觀の反省、意義としていへば理解であり、「批評」は、作用としては價値判斷、意義としては定位であるといへませう。

いふまでもなく、「讀み」を「讀み」たらしめる爲には、未知の語句・事項に關して、それ〴〵一般的な意味を明らかにしてゆかねばなりません。卽ち「讀み」の補助的方法として未知の語句・事項の一般的意味の解說が要せられます。「註解」を「讀み」の段階に揭げましたのはその爲であります。

「解釋」は中等教育の國語講讀科に於ては、教室作業の主要部を形成するものであつて、これには更に主題・構想・敍述の三機構を立てることが出來ると思ひます。主題はその文の表現に卽して把握せられる、自ら表現せんとするあるものであり、構想はそのあるものが如何なる機構をとつて表現せられてゐるか、卽ちその表現の機構であり、敍述は更にそれが、一語・一句・一句讀は勿論、更に一音・一字の上にまで如何に示現してゐるか、卽ちその表現の結實であります。換言すれば、主題は一文の全體性をその核心に於て發生的に把握したものであり、構想はその主題展開の機構を跡づけることであり、敍述は主題展開の究竟としての感覺的結晶を定位することであるといへませう。

「批評」は、一般的にいつて、中等教育に於ける國語の學習としては、十分な意味に於ては當面の仕事ではないと思ひます。「批評」を「批評」として獨立して行ふことは、もつと上級教育の課程であると思ひます。併しこれを獨立して行はないまでも、その基礎を養ひ、その根柢を鍛へることは極めて肝要なことでなければなりません。又生徒にとつても必然な要求でなくてはなりません。のみならず、教材の性質によつては、是非ともこの段階にまで及ばなくては眞の指導が存立し難いものもあります。そしてその「批評」を成立させる爲には、方法としての「讀み」を確立し、「解釋」を有力にすることが最も大切でありますが、それと共に「批評」は何等かの客觀的基準による價値判斷であること、換言すれば、單なる讀者の個人的・主觀的な嗜好乃至好惡ではなくて、もつと普遍的・客觀的な原理――それが主體的なものであるにしても、又は客體的なものであるにしても――による價値判斷であることが自覺せられなくてはならぬと思ひます。

尙批評意識そのものは、「讀み」及び「解釋」の完成を俟つて始めて發現するものではなく、その萌芽は既に「解釋」と共に、否「讀み」の最初に於てさへ意識の面に擡頭し來るものであることはいふまでもありません。が、方法課程として十分な意義を有せしめ、學習作用の發展を健全に指導する爲には、出來得る限り、かゝる意識の發現を抑止しつゝ鑑賞作用・理解作用を十分に發展させ、その上に「批評」を「批評」として位置づけなくてはならぬと信じます。卽ち「讀み」としての直觀と、「解釋」としての理解と、「批評」としての價値判斷とは夫々特立した作用ではなく、有機的作用關聯としての一體系をなすものでありますが、學習の方法としては、その一々を發展的・段階的に確立させてゆくことが極めて肝要な用意であると思はれます。

本書は敍上の如き方法的體系による各教材の研究を中心とし、外に、第一　解題、第三　備考を添へ、學習指導に關する參考的研究の完備を期しました。

第一の「解題」に於ては、まづ本文の出所を明らかにし、次に學年の程度と該篇との關係を顧慮しつつ作者の傳記的記述を試み、更に教材として該篇を採擇した趣旨を明らかにして、それの編纂體系上の位置を示すことに努めました。

第三の「備考」に於ては、學習指導の問題と、教材研究の爲の參考資料について、編纂者の立場から明らかにして置くべき事項を記載し、又は引證して置かうといたしました。

今、敍上の組織を明瞭にする爲に、これを表示いたしますと、

一　解題
　一　本文
　二　作者
　三　採擇の趣旨

二　教材としての研究
一　註解
二　解釋
1　主題
2　構想
3　敍述
三　批評
三　備考
一　指導の問題
二　參考資料

の如くであります。

一體、學習指導書に關しては、識者の間に可否兩樣の意見が存するやうであります。これを否とする立場は、學習指導書がある爲に、教授者その人に於ける自主的研究の要が失はれ、隨つて獨自的研究が成立しなくなるといふ見解に立つものであり、可とする立場は、指導書はあくまで指導書で、教授者その人の自主的研究に代るものではない、むしろ自主的研究を豫想したものであり、またそれの完成に資

するものであるといふ見解に立脚してゐるやうに見受けられます。本書は、この後の意味に於て、あくまで教授者の自主的研究の參考たらしめんが爲に編述したものであります。しかも參考であるといふことの爲に、往々斷片的な知識の雜然たる寄せ集めに終り易い弊を警め、あくまで體系的組織を有たせ、編者の立場を明確にすることを期しましたのは、さうすることによつてのみ、眞に參考としての一試案たり得ることを信じたからであります。換言すれば、かくすることによつてのみ、始めて箇々の知識がその由つて來る立場から眞に理解せられ、的確な批判の對象たり得ることを信じたからであります。

編者

凡例

一、「註解」は、その全部が生徒に學習させようとする內容ではないが、その學習を有力に指導する上に缺くことの出來ない資料的知識を集成したものである。

一、「解釋」は、讀みに卽して得られる直觀の的確さと、それを基礎として發展する自覺の確さとを期した理解內容を體系的に表示しようとしたものである。

一、「註解」に於ては、一般の國語辭書・漢字典によれば明瞭になる如き語句を簡にし、特殊な辭典・參考書に據らなくてはならぬやうな語句・事項の解說を比較的精しくした。

一、「註解」に於ける動物の分類その他に關する事項は、主として岩波動物學辭典・日本動物圖鑑に、植物の分類その他に關する事項は、主として日本植物總覽・日本植物圖鑑に據つた。

一、文中に於て、教科書の本文を頁及び行によつて指示する場合には、括弧中に頁と行數のみを記した。例へば、（一〇ノ五）は教科書第一〇頁第五行を意味する。「初」はその課の第一行を示す。尙、文題及び空行は行數に算入しない方針をとつた。

一、文中に於て、教科書各卷の課を示すには、ゴシック體の日本數字を用ゐた。例へば、「卷三の七」は、その第七課を意味する。

一、文中に用ゐてゐる「本文」なる語は教科書の本文を、又「本書」なる語は『國語學習指導の研究』を意味する。

國語

學習指導の研究

卷二

卷二の口繪について

高原（平福百穂筆）

東洋畫の古格を究め、西洋畫の新法を攝取し、東洋藝術の神髓を開示して、大正・昭和の繪畫史上に不朽の足跡を殘した平福百穂晩年の傑作で、昭和六年の制作にかゝる。茫漠たる芒原に落葉松林を配したその構圖の新しさは、畫であるよりも自然そのものの大きさを備へ、そこに寄托せられてゐる感覺の鋭さ纖かさは、畫面を蔽ふ秋の光のうちに渾融して、悠久の時を感じさせる。本文、わけても四「小春の岡」・五「落葉」・一三「武藏野日記」等の自然描寫と相俟つて、自然觀照の眼を開かせ、不知不識の間に國土愛を培ふところが少くないであらう。（一七二頁參照）

目次

一　日本……山村暮鳥……一
二　明治神宮……溝口白羊……二
三　自然に對する五分時　大海の出日　相模灘の落日……德冨蘆花……四一
四　小春の岡……長塚節……五九
五　落葉……島崎藤村……七七
六　渡り鳥……松本亦太郎……八九
七　快晴……河井酔茗……一一七
八　潮待つ間……幸田露伴……一二四
九　父の物語　白石朋ヲ薦ム……新井白石……一三三
一〇　親心……柳澤淇園……一四〇
一一　カルサンと米……一五〇
一二　トロッコ……島木赤彦……一六五
一三　武藏野日記……芥川龍之介……一八二
一四　時雨……國木田獨歩……一九六
　　前田夕暮
　　若山牧水……二一一
　　北原白秋

目次

一五 吹雪……村井弦齋……三六
一六 勿來の關……岡本綺堂……二四四
一七 雨雄の會見……小笠原長生……二七二
一八 人間エディスン……澤田謙……二九四
一九 蜃氣樓……橘南谿……三三
二〇 庭の黒土……相馬御風……三三七
二一 犬ころ……長谷川二葉亭……三四九
二二 國史に還れ……德富蘇峰……三六八
寶祚無窮……三七八

一日本

山村暮鳥

一解題

一本文

少年倶樂部（大正十三年九月號）に掲載された詩で、「日本にあたふ」と題したものである。

二作者

山村暮鳥。詩人。本名は木暮八九十、後、土田八九十。初め木暮流星・木暮馬村とも號した。明治十七年一月群馬縣群馬郡堤ケ岡村に生まれた。父母が郷里を出奔した爲、親戚の家に育ち、幼時から辛酸を嘗めた。高等小學校を半途退學し、十二歳の春、親戚の酷使を脱れようとして當時千葉縣印旛郡佐倉町居住の父母を訪れたが、却つて小僧・職人・書記等の苦しい生活が始つた。十六歳の時歸郷して、小學校の代用教員となり、夜は初め松山寺といふ寺に漢學を學び、後には前橋市まで七里の道を往復して牧師チャベル氏の夜學に英語を學んだ。當時高崎市在住の宣教師ウォオル女史の感化を受けて基督教に入り、女史に從つて約一年青森市に暮し、後、上京して築地の聖三一神學校に入學した。その頃文學に傾倒し、三十六年雜誌「白百合」の創刊とともにその社友となり、短歌を創作し、相馬御風の感化を受けた。日露戰爭に戰時補充兵として召集され、滿洲の野に在ること十一箇月餘、その間も絶えず歌稿を「白百合」に寄せたが、除隊・歸校後、蒲原有明に近づき、長詩の創作に轉じた。卒業後、牧師として最初秋田市に赴任し、横手・湯澤・仙臺・土浦・東京・水戸・

太田・平と屢〻居を換へ、その間、四十三年自由詩社に入り口語自由詩運動に加つて盛に詩を發表し、大正二年詩集「三人の處女」、四年「聖三稜玻璃」を上梓し、後ドストイェフスキーの研究と飜譯に傾倒した。大正七年再び水戸市に住み、詩集「風は草木にささやいた」を出版して、從來の自由詩社風の頽廢的な象徴主義から人道主義的詩風への轉換を示し、詩誌「苦惱者」を創刊した。同年喀血したが、強い意志と信念とを以てよくその受難の連鎖中に在つて獨自の詩風を完成し、壯者を凌ぐ多くの仕事を殘した。その間にも常陸・安房の海岸、福島縣石城郡平町外菊葦山と居を移し、大正十三年十二月、茨城縣那珂郡磯濱町大洗の寓居に於て歿した。享年四十一。著書には前記の三詩集を始め「梢の集にて」「雲」「月夜の牡丹」「暮鳥詩集」等の詩集の外に、童謡集「よしきり」その他童話・飜譯等がある。

三　採擇の趣旨

卷一では、國土愛・國家愛の象徴として二「櫻」・三「曙の富士」・二五「國旗」等を掲げて來た。卷二では、一「日本」・二三「國史に還れ」等に於て、直接國土愛・國家愛等を喚起し、覺醒させようとしてゐる。

文藝的教材であり、同時に國民的教材である。

二　教材としての研究

一　註解

【日本】　ニッポン　大日本帝國。

「日本」はニホンとも讀むが、字音からすればニッポンが正しく、ニホンはそれを國語流に和らげたもの。日本といふ國號の由來については古來種々の說があるが、「やまと」に「日本」の二字をあてはめたのが初めで、神代紀上に「日本、此云耶麻騰」と見え、それを音讀するに至つて今日の國號となつたものであらう。我が國を「やまと」といふのは、畿內五國の一である「大和」の地方名から起つたもので、神武天皇が大和地方を平定して此處に皇基を定め給ひ、それ以後皇威が次第に遠く及んで遂に我が大日本帝國をなすに至つた爲に、一般の呼名になつたといはれ、又「日本」の二字をあてることは我が國が世界の最東端に當り、所謂日出處の位置を占める爲であらう。

【葦】　アシ　蘆とも書く。音が「惡し」に通ずるのを嫌つて「よし」ともいふ。禾本科、よし屬の多年生草本。水邊に自生し、地下莖は長く横走する。莖は直生・剛强で竹に似た節を具へ、高さは一・五米內外。葉は披針形・鋭尖頭で、全形はすすきに似、秋日、莖頂に大きい穗を出して圓錐花序をなす無數の灰白色の小花を著ける。異名―はまをぎ・たにはぐさ。

古事記上「國稚く、浮脂の如くにして、水母なす漂へる時に、葦牙の如萌え騰る物に因りて成りませる神の云々」、萬葉集一四「葦の葉に夕霧立ちて鴨が音の寒き夕し汝をば偲ばむ」等に見られる如く古代人には殊更親しみ深い草であつた。葦に關係した語も「葦火」「葦の假寢」「葦の假屋」「葦原」等非常に多く、殊に歌の上に多く見られるが、何れも原始的な素樸なものとして用ゐられてゐる。

【葉つば】　「葉」に同じ。

素樸なあどけない語感の故か、作者はこの言葉を好んでその詩の中に用ゐてゐる。

【朝露がぽたりとおちてこぼれてひとしづく】　「朝露がひとしづくおちてこぼれて」の倒置。

〔朝露〕　アサツユ　朝方置いてある露。朝の露。こゝでは、新鮮・清淨で、小さく美しいものの象徴として用ゐられてゐる。但し、從來國文學の上では多くはかないものの例とせられてゐる。

〔ぽたり〕　小さく柔かなものの、やゝ重く落ちる時に發する音。

〔おちてこぼれて〕 同じ意味の動詞を重ねて語調をととのへると共に、その意を強めてゐる。

【かはいらしい】 「かはゆらしい」の轉。(一)いとほしい。愛らしい。かはいゝ。(二)小さくて美しい。こゝは(二)。

「かはゆらしい」は、「かはゆい」(原義は「おもはゆい」)の語幹に形容接尾語「らしい」のついたもの。

【その強さは鋼鐵のやうな精神である】 日本の強さは鋼鐵のやうな精神にある、の意。

〔鋼鐵〕 カウテツ 「はがね」(刃鐵・鋼)に同じ。學問的には正確な定義を下し難いが、要するに鐵と炭素(〇・〇四―一・七%)との合金に與へられた名稱で、普通はその外に少量のマンガン・珪酸・硫黄・燐等の不純物を含有する。極めて硬く且彈力性に富むので、刃物の刃、時計のゼンマイ、彈き金等に用ゐられ、又甲鐵艦・鐵軌その他鐵類中で最も應用が廣い。

【ぴちぴち】 魚などの生き〳〵とはね廻るさま。はち切れるほど充溢した力で潑剌とはねをどるさま。

【勇敢】 ユウカン 勇氣があつて物事をおし切つてすること。勇にして敢爲の氣のあること。又、その性質。新書「持節不恐謂之勇、信理遂忤謂之敢」

【古い日本】 ながい歴史をもつた日本。古い成立を有する日本。

【霧深い中】 キリフカイナカ

我が國民がながい間の鎖國の結果、世界の大勢を知らず、隨つて自國の世界に於ける位置・立場を自覺せずにゐた狀態を、我が國が四面海に圍まれてゐるところから霧に託していつてゐる。

【山鳥の尾のながながしい夢】 非常にながい夢。

〔山鳥の尾の〕 山鳥の尾はながいものであるところから「ながし」の序詞に用ゐられる。萬葉集十一「あしひきの山鳥の尾の垂り尾の長き永夜(舊訓ながながし夜)を一人かも宿む」

〔山鳥の〕 ヤマドリの 「を」「ひとりね」にかゝる枕詞。

〔山鳥〕 鶉雉とも書く。鶉雞目、雉科、やまどり屬の鳥。雉に似て雄の背面赤銅色を呈し、顏は赤く裸出するが後頭の耳樣突起を缺く。尾は長く茶褐色に竹節狀の横帶がある。雌は暗色で尾も短い。本州中部以北に分布する。

【希望にかがやいてゐる】 前途に對する希望の爲に光明にみたされ、明るく生き〳〵してゐる。希望の光にかゞやいてゐる。

〔希望〕 キバウ ある事を實現し又は獲得しようとねがひのぞむこと。冀望。願望。志望。

【力にみちみちてゐる】 力がはち切れるばかりに充實してゐる。

〔みちみちる〕 非常に一杯になる。溢れるほど充滿する。

同じ動詞を二つ重ねてその意を強めてゐる。

【眞劍】 シンケン (一)竹刀又は木刀に對して、實刀、の意。(二)まことの刀劍で鬪ふこと。(三)轉じて、戯れでなく眞實なこと。虚でないこと。まじめ。本當。本氣。こゝは(三)。

【平坦】 ヘイタン 土地の平なこと。こゝでは、無事・平穩なこと。

〔坦〕 たひらか。ゆるやか。ひろい。

【なんときいてゐるか】 どんな氣持で聞いてゐるか。

【孤獨】 コドク (一)幼くて父のない者と老いて子のない者と。禮記、王制篇「少而無父者謂之孤、老而無子者謂之獨」(二)ひとりだち。孤立。ひとりぼつち。易林「孤獨特處、莫依爲輔」こゝは(二)。

【からり】 (一)堅い物が觸れ合ふ音。(二)物の乾燥してゐるさま。(三)全く一變するさま。(四)あかるくなつたさま。ひろやかになつたさま。ほがらかになつたさま。ここは(四)。

【黎明の天】 レイメイのテン あけがたの空。夜明けの空。

〔黎〕 ころほい。一說に、天の色の黑い義。史記、高祖紀「黎明圍宛城三匝」

【通り雲】　トホリグモ　通り過ぎてゆく雲。
「通り雨」から思ひついていつたのであらう。
【さつと】（卷一、三九七頁「颯と」の項を見よ）
【かかる】　こゝでは、かうむる、かぶさる、おほひつく、の意。
【顏に泥をぬられた】　恥辱を與へられた。面目を失はせられた。
〔泥〕　ドロ　水に雜つて柔かくなつた土。こゝでは、汚いものの意から轉じて、汚辱、の意。
【めざめた國】　自國の立場を新に自覺した國。
【若い國】　新に眼をさました未來性に富んだ國。新な元氣と希望にみちみちてゐる國。
【すこやか】　(一)すく〳〵と強いこと。(二)特に、身體に障りなく丈夫なこと。こゝは(一)。
【驕る】　オゴる　(一)自分の才學・權威等を誇る。人を侮つて自ら尊大な振舞をする。自慢して得意になる。(二)我が儘な振舞をする。(三)氣力が張つて制御に從はない。(馬などにいふ。)　こゝは(一)。
【眞實】　シンジツ　こゝでは、本來のまゝに、裏なるもののまゝに生きること。
【ばかにされるな】　こゝでは、外國の侮りをうけるな、の意。

二　解釋

1　主題

かはいらしくて美しい日本、潑剌として輝かしい日本。

2　構想

(1)　かはいらしい日本、強い日本（初―二ノ九）。
(2)　世界を相手に乘り出した輝かしい日本（二ノ一〇―五ノ八）。
(3)　めざめた日本、健かであれ、眞實であれ（五ノ九―終）。

3　敍述

〔葦の葉つばの朝露がぽたりとおちてこぼれてひとしづく〕――日本の國土の成立を歌つた新鮮な譬喩である。併し又、一脈、古事記の開闢說を思はせるやうな所のある譬喩でもある。
〔大海のうへに浮いてゐるかはいらしい日本、うつくしい日本〕――美しい國史・國體・國土の日本を思ふ時、世界に類のない、例へば蓬萊の島といふやうな美しい國といふ觀念が浮かぶ。
〔小さな國だ、小さいけれど、その强さは鋼鐵のやうな精神である〕――形からいへば、可憐なほど小さい國ではあるが、精神からいへば、鋼鐵のやうな强さであるといふ。賴むべきはこの不敵な精神にあるのだ。
〔びちびちしてゐる魚のやうな國〕――「大海のうへに浮いてゐる」といふことから、小さくて强いといふ點から、自ら生まれ出た譬喩であるが、流石に急所を捕へて潑剌たるさまを具現し得てゐる。
〔その霧深い中にとぢこもつて山鳥の尾のながながしい夢を見てゐたのも、いまはもうむかしのことだ〕――朝露に緣のある霧を持つて來た。古い日本が長い鎖國の夢を見てゐたのは、誠に霧の中にとぢこもつてゐたといつてもよい。「山鳥の尾の」といふ序詞を古歌から引用したのもこの際當を得た方法であらう。
〔日本、日本、お前のことをおもふとこの胸が一ぱいになる〕――傳統の强みを持つ日本であるといふことはわかつてゐても、霧の中から出で、長い眠から醒めて取りめぐる世界の中にある日本を思ふと何となき不安と焦燥、自恃と希望とに胸が一杯になる思ひがするのだ。
〔お前はよるひるたえずお前のまはりにうちよせてゐるその浪の音をなんときいてゐるか〕――感慨のこもつた言葉である。そこには怖れもある、憤りもある、喜もある、惱みもある、寂しさもある筈だ。

〔おお孤獨な遠い一つの星のやうな日本〕――小さい、併し氣高い存在であり、寂しい、併し輝かしい存在であることを示してゐる。

〔めざめた國、日本、若い國、日本〕――世界に於ける自己に目ざめた日本は、若々しい國である。歴史は古いが、更に未來性の豊な國である。そこに謙虚と眞實とが期待せられるのである。

〔日本よ、眞實であれ、ばかにされるな〕――驕りは破滅の本だ。眞實であれ。併し他國に馬鹿にされるな。日本の國家的性格は眞實にして剛毅なることである。どこまでもこの比類なき性格を徹底させなければならぬ。

三　批評

作者は童子の如き無邪氣さを以て「日本」を歌つてゐる。高い清らかな理想と強い張りきつた熱情とを純眞な調と平明な語で表現してゐる。日本人が日本を歌つた詩歌の中で、新鮮で感動に充ちた表現である點に於て、特色のあるものの一つといふことが出來よう。

三　備考

一　指導の問題

（一）讀むにつれて、次第に語の一つ、句の一つが心に閃いて來るであらう。さういふ語句や章句を辿つてこの詩の世界に入つてゆくのが順路であらう。全體が何を歌ひ、如何なる展開を示してゐるかを考へるよりも、一語々々、一句々々、一章々々をゆつくりと味はひ進めるのが適切な學習の方法である。この詩では、わけてもさういふ一語一句に全體が具現してゐるのだから。全體的機構の上に主題的なものを表現する方面に對してはむしろ無頓著といふに近い詩と思はれる。

そこが散文詩たる所以の一つでもあらうが。

唯、この詩の中で、「古い日本」といふ句と、「若い國、日本」といふ句とがあつて、よく讀みぬかない生徒には、矛盾のやうに解せられるかも知れないことを手がかりとして考へると、「古い日本」とあるあたりで、即ち三頁の四行あたりまでは、過去の日本、傳統の日本をいつてゐる。然るに、次の行の「目をあげて」以下は、將來の日本、世界の日本を歌はうとしてゐる。傳統からいへば「古い日本」である。併し將來を望めば、「若い國、日本」に違ひない。かう考へると、この詩は自然にまづ日本の過去を、傳統を、歌ふことから、更に日本の將來を、理想を、歌ふことに展開してゐるともいへないことはない。若し全形をさう見る生徒があつたら、それは認めてよい理解であらう。併しそれは素材的な見方に過ぎないから、更に構想そのものを見得るまでに至らせることが眞の指導であることはいふまでもない。

（二）日本に生まれ、日本に生きてゐれば、その日本を身のまはりや心の内に感じてはゐても、それとはつきり意識的に把へることが却つて困難である。唯、衷なるものに強く動かされ深く目覺めてゐる詩人こそは、この把へどころのないものを把へ、且それを再現することの出來る代表的な存在である。こゝに、文學を通じ、情意に訴へてゆり起す國民性・民族性の自覺の深い意義があり、文學の國民教育に於ける價値が存立する。

二　參考資料

作者の詩についての土田杏村氏の批評を「暮鳥詩集」の序から引く。

君の詩はたゞ人の心を打つのである。其の打つ所以は敢へて君の詩の技巧が其れをさせるのではない。君はむしろ其の技巧を棄てようと欲して居たのだ。君の詩が人の心を打つのは君の詩の魂が人の魂を打つのである。いや君の詩の魂が人の魂を打つのは、君の人そのものが他の人の人そのものを打つのである。斯樣に云つても私は君の詩の技巧を巧みなものでないと斷言してゐるのではない。君の

初期の詩は殊に驚歎すべき技巧を持ち、それは世界の詩壇に對して獨歩の地位を主張するものであつた。然るに君はその技巧を第二次的のものとしてかなぐり捨てた。要は人の詩が技巧を以て作家を率ゐることをにくみ、君の人を以て技巧を率ゐることを欲したものであらう。君の最晩年の詩集になると、君は更に新しい技巧、技巧を超えた技巧を創造して、君の人と其の表現と、誠に互に何の過剰なく、悠々自適する境地に遊んでゐた。君こそは眞に天成の詩人であつたのだ。天分をたのむものは勤勉せず、其の資格に溺れることは詩人によく見られるところであるが、君は飽くまでも精進する努力の人であつた。其れ故に君の詩は高い思想を含んでゐたのである。併し君は又他面に徹底的の平凡人であつた。君は創られたるもののすべてに平等の光を眺めたのだ。文壇的に何等かの黨派をつくり、詩の宗匠として生きるやうなことは君の嫌惡するところであつた。君は恐らく自らに詩人または文藝家といふ定まつた職業名を附することをさへ嫌惡してゐたであらう。君の詩の光彩は今後年代を隔てるに隨ひ、一層あきらかなものになると私は信じて居る。芭蕉や良寛の如くに後代敬慕される詩人が明治大正年代に求められるとすれば、其は確かに君であると私は今豫言して置いてよい。

二　明治神宮

溝口白羊

一　解題

一　本文

「明治神宮紀」のうち、「神域大觀」中の一節、「森嚴美と幽邃美とを兼ね併せたる明治神宮」と題する文を採錄した。「明治神宮紀」は、內容を「神域大觀」「社殿と林泉」「外苑の一斑」及び「明治神宮と明治天皇」の四綱目に分けて詳述したもので、當時の內閣總理大臣原敬・內務大臣床次竹二郎・明治神宮造營局長塚本清治等の序文がある。（明治神宮紀一冊、大正九年十一月、日本評論社出版部發行）

二　作者

溝口白羊。詩人・文學者。本名は駒造。明治十四年六月大阪市に生まれた。三十八年早稲田大學法律科卒業。十七歳の頃から詩を作り、「文庫」「新小說」「中央公論」「早稲田文學」等の諸雜誌に發表した。詩人としては文庫派に終始した人で、三十九年詩集「ささぶえ」を上梓し、後殆ど詩筆を絕つた。著書には「ささぶえ」「明治神宮紀」の外に、文集「赤い火の舟」及び「新譯萬葉集」「譯註徒然草」「增鏡新講」「平家物語解義」「源氏物語講義」「熱血詩談」「神道學概論」「日本古典の再吟味」等がある。

三　採擇の趣旨

明治神宮參拜記であるが、その御造營を回顧し、更に御造營完成の原動力としての、明治天皇の御聖德と昭憲皇太后の御懿德を偲び、この二柱の御神に對する國民の至情を思ふことによつて、その神域の莊嚴・幽雅はやがて國體の精華の發揚に外ならぬものとして感銘せられてゐる。國體の精華を會得させるべき國民的教材である。

二　教材としての研究

一　註解

【明治神宮】　メイヂジングウ　東京市澁谷區代々木外輪町に鎭座。明治天皇・昭憲皇太后を奉祀する。官幣大社。大正四年起工して九年に竣成し、同年十一月一日盛大な御鎭座の大祭を擧げさせられた。例祭は十一月三日。皇室の尊崇篤く、常に一般國民の參拜が絕えない。境內（內苑）總面積二十一萬九千四百四十二坪餘、樹林・泉池の景趣頗る幽邃である。外に、御祭神を永久に記念し奉るべき目的で、內苑の東方舊靑山練兵場を中心とする十五萬五千坪の地域に、主として國民奉讚の赤誠の資によつて造設せられた外苑がある。外苑には憲法記念館・聖德記念繪畫館・競技場・野球場・相撲場等の諸建造物があり、その殘地は新しい公園設備を施した近代的庭園を成してゐる。

〔神宮〕（一）神の宮殿。かみのみや。しんきゆう。（二）「大神宮」（伊勢大神宮卽ち皇大神宮と豐受大神宮）の略。特に「伊勢大神宮」の略稱。（三）官幣大社の中で、特に尊崇する神社の稱。

【快美な色彩の反射】　クワイビなシキサイのハンシャ　見て氣持のいゝ美しい色どりの照り返し。

【和らいだ感觸】　ヤハらいだカンショク　なごやかな感じ。やはらかな感じ。

〔感觸〕（一）外界の刺激に觸れて起る感じ。（二）手さはり。氣持。

【代々木の森】　ヨヨギのモリ　神宮御造營前の南豐島御料地の森をさす。

代々木一帶の地は古く代々木野と呼ばれ、一望際涯もない廣漠たる武藏野の一部であつたと傳へられるが、現明治神宮地域は寬永の頃から彥根藩井伊家の屋敷となつてゐたのを、明治七年帝室に御買上になつて南豐島御料地と呼ばれ、二十二年世傳御料に編入された。域內には、耕地の間に黑松・赤松等の大樹を始め楢・榎・椋・欅等が多く、一つの林苑をなしてゐた。

【檜】　ヒノキ　扁柏とも書く。松杉科、ひのき屬の常綠喬木。幹は高さ三〇—四〇米、徑一—一・五米に達し、樹皮は赤褐色で外面灰色を帶び、葉は鱗片狀で莖に密著して交互對生する。雌雄一家で、四月下旬枝端に卵形の雄花及び球形の雌花をつけ、十月頃球形の小毬果を結ぶ。材は白色・緻密で光澤强く香氣に富み、高級な建築に用ゐられる外、橋梁・舟船・器具・機械・車輛・彫刻等に廣く利用され、又樹皮を以て屋根を葺き、或は繩・笠・附木その他を作る等、用途が極めて多い。本州・四國・九州・臺灣の山地に產し、種々の亞種又は變種がある。建築材としては木曾產のひのきが最良とせられ、光澤・香氣に優れてゐる外、日光に曝して狂ひが少く、且耐濕性が强いので、上等の普請や土臺用に用ゐられる。又、臺灣の阿里山には樹齡千年を超えるものが多く、他に見られないやうな老大の良材が得られる。

【金屬的の響】　キンゾクテキのヒビキ　金屬を打つた時、又は金屬が觸れ合つた時に發するやうな鋭い響をいふ。

【調子】　テウシ　（一）音樂上で、音律の高低。しらべ。（二）音聲學上で、音の高低。（三）字句のいひまはし。口調。（四）ほどあひ。ぐあひ。（五）はずみ。いきほひ。（六）こころもち。きもち。こゝは（一）。

【獻木】　ケンボク　神社・佛閣に獻上寄進する木材、又は樹木。

明治神宮內苑境內の樹木十二萬本中、十萬五千本は悉

く國民の獻木で、明治時代の我が國全版圖の樹種を網羅してゐる。

【牛車】　ギウシャ・ウシグルマ　牛に挽かせる大きい荷車。

【汗みどろ】　アセみどろ　汗にまみれたさま。汗びつしより。汗みづく。

〔みどろ〕（接尾）　まみれること。まぶれること。

【曳々聲】　エイエイゴエ　力を込める時の掛け聲。ちからごゑ。えいごゑ。えいさごゑ。えいやごゑ。

【莊嚴】　サウゴン　たふとくおごそかなこと。うるはしくおごそかなこと。神々しいこと。

【衝動】　ショウドウ　こゝでは、精神的激動、の意。心理學的には、先天的若しくは後天的に獲得した身體的若しくは精神的傾向が意識的・强迫的に吾人の動作を促すことで、最も原始的な意志作用である。

【工程】　コウテイ　（一）仕事の出來上りの程度。仕事のはかどり。（二）仕事。工事。こゝは（一）。

【進捗】　シンチョク　仕事のはかどること。はかがゆくこと。進行。進展。

【基礎工事】　キソコウジ　總べての建築物を支持すべき最下の構造（基礎工といふ）を工作すること。

「基礎工」は、その土地の地質の如何、卽ち地盤の支持力の强弱によつて種々の構造が考慮せられる。普通の土砂でも十分に撞き固めて排水を良くすれば相當の支持力が得られるが、大建造物の基礎工には、その構造上から岩石基礎工（天然地盤が岩石のときこれを直ちに基礎とするもの）・混凝土基礎工（混凝土を以て基礎を作るもの）・杭打基礎工（木材又は鐵材その他の杭を打ち込んで基礎を作るもの）等がある。

【小屋組】　コヤグミ　屋壁の上にあつて屋根葺料を受ける爲に組立てた構造體。

【殿舍】　デンシャ　やかた。どてん。

【竣工を告げた】　シュンコウをツげた　工事が終了した。出來上つた。落成した。

〔竣工〕「竣功」とも書く。仕事の出來上ること。工事の落成すること。

【赤土】　アカツチ　赤色を呈する土の一般的呼稱。我が國では所謂關東ローム層（關東平野の臺地表面に存在する比較的厚い赤褐色の砂質泥層）のやうな火山灰起原の赤色土が屢〻赤土と稱せられてゐる。

【切石】　キリイシ　（一）用途に隨つて、種々の形に切つた石。（二）規則正しい形に切つた石。（三）割れてかどだつた石。（四）いしだたみ。しきいし。こゝは（一）。

【小砂利】　コジャリ　（卷一、二四九頁「砂利」の項を見よ）

【參道】　サンダウ　神社に參詣する道。

明治神宮の參道は南・北・西の三面にある。南方赤坂區青山方面から澁谷區原宿の南緣を通つて神宮橋に至るものを表參道といひ、幅員三六米餘。延長一、二〇〇米、境內に入つて幅員一四米餘・延長七八八米餘の南參道となる。北方澁谷區千駄ケ谷からの北參道は外苑との聯絡道路に連なり、幅員約一一米・延長五八米餘、又西方代々木練兵場に面する同區代々木山谷町方面からの西參道は幅員七米餘・延長五四五米餘である。各參道の入口にはそれ〴〵木造の大鳥居がある、所謂一の鳥居である。

【展開】　テンカイ　こゝでは、ひろがつてゐること。

【御料地】　ゴレウチ　皇室の御所有に屬する林野及び土地をいふ。こゝでは、代々木の舊南豐島御料地をさす。（二五頁「木曾御料林」及び一三頁「代々木の森」の項參照）

【神域】　シンヰキ　神社の境內。

【森嚴】　シンゲン　きびしくおごそかなこと。身が引きしまるやうにおごそかなこと。莊嚴。

【幽邃】　イウスヰ　（卷一、一七四頁を見よ）

【鬱蒼】　ウッサウ　（卷一、二一〇頁を見よ）

【密林】　ミツリン　（卷一、二〇七頁を見よ）

【所謂】　イハユル　世間にいふ。いつもいふ。

【流造】　ナガレヅクリ　神社建築の一樣式。側面を破風造とし、屋根の前面の流れ（棟から軒先までの勾配）は後面のそれよりも遙に長くて、向拜（社殿の正面の出張り、卽ち禮拜するところ）をも併せ覆ふやうにしたもの。流破風造。

社殿の屋根が豐に反つて前方に流れた形のもので、最

も自然でしかも變化があり莊嚴な感じを與へるので、現在の神社建築中この樣式を採用するものが頗る多い。少くとも平安朝時代の初期には完成した樣式であらうといはれ、上・下兩賀茂神社の本殿はその代表的のものと見られてゐる。

「破風造」は「博風造」とも書き、棟を山形に造つて左右の端に破風（屋根の切妻に屋根の流に沿つて取りつけた合掌形の裝飾板）を設けた樣式。

【素木】　シラキ　「白木」に同じ。あら皮を去り白く削つた木地のまゝで、塗り飾らない材木。これを材として用ゐた建築を素木造（しらきづくり）といふ。

【神殿】　シンデン　神を祀る殿舍。

【神々しい】　カウガウしい　「かみ〴〵しい」の音便。たふとい。ものさびてたふとい。たふとくておごそかである。

【いまし給ふ】　おいでになる。あらせられる。

〔います〕　在す　（一）居たまふ。おいでなさる。おはします。ます。（二）行きたまふ。（三）來たまふ。

【靜寂】　セイジャク　（卷一・一七六頁を見よ）

【幽雅】　イウガ　奥深くみやびやかなこと。氣品のすぐれたこと。

【領土】　リャウド　（一）所有の土地。領地。（二）一國の國法的主權を行使し得る地域。一國の統治權の及ぶ範圍。國際法上では沿岸海も領土の一部とする。こゝは（二）で、支配してゐる所、の意。

【神苑】　シンエン　神社の境内にある庭園。

【感激】　カンゲキ　深く感じて奮ひ立つこと。

【建設】　ケンセツ　新につくり設けること。うちたてること。

【造營局】　ザウエイキョク　「明治神宮造營局」の略。明治神宮創設につきその造營に關する事務を掌る爲に設置せられた機關。（參考資料參照）

〔造營〕　家を造り營むこと。（多くは大家・高樓・社堂などにいふ。）

【延人員】　ノベジンヰン　一つの仕事に從事した總人數を一日一人の割合に換算した人數。

【尺〆】　シャクジメ　「尺締」とも書く。木材の取引又は使用上の體積の單位。一尺角（方一尺）、長さ二間材の體積、卽ち一二立方尺を尺〆一本といふ。木材產地によつて尺〆一本の體積に多少相違があり、何れも一尺角の材を以て計るが、長さは十四尺・十五尺等とする所もある。

【さういふ數字を高く超越して】　延人員や尺〆に換算した用材の總計など、さういふ數字に現れた外面的なものよりずつと有力に。

〔超越〕　テウエツ　（一）まさること。すぐれること。（二）世俗を離れること。（三）とびこえること。超躍。

【千載不動】　センザイフドウ　しつかりとして千年もゆるがないこと。永久に動かないこと。

【明治天皇】　メイヂテンワウ　第百二十二代の天皇。御諱睦仁。孝明天皇の第二皇子。嘉永五年九月二十二日（陽曆十一月三日）未半刻御降誕、祐宮と御命名、萬延元年七月十日立太子、九月二十八日親王宣下、睦仁と宣らせられた。慶應三年正月九日踐祚、十月十四日將軍德川慶喜の大政奉還を御嘉納あらせられ、萬機を親裁したまふこと四十有六年、新興日本をして世界の大强國たる今日あらしめられたのは、ひとへに天皇の御稜威である。明治四十五年七月三十日崩御あらせられ、九月十三日東京青山に御大喪儀、伏見桃山に葬り奉つた。寶算六十一。不世出の英主として國民は擧つてその御偉德を敬慕し、十一月三日を明治節として永久に御聖德を仰ぎ奉る。

【御聖德】　ゴセイトク　天皇の御德。

〔聖〕　（卷一、三七八頁を見よ）

【昭憲皇太后】　セウケンクワウタイゴウ　明治天皇の皇后。御父は左大臣一條忠香、御母は新畑大膳種成の女民子。嘉永三年四月十七日（陽曆五月二十八日）京都一條烏丸東入一條桃華殿に御誕生、勝子と御命名、慶應三年五月十八日女御に御内定、同年六月二十八日女御宣下を蒙り、明治元年十二月美子（はる）と御改名、同月二十八日入内、卽日皇后に冊立あらせられた。明治天皇の大業を内助したまひ、貞德殊に勝れさせたまうた。又御坤德の洪大で

あつたことは內外共に仰慕し奉るところで、その御仁慈は普く萬民に及び、產業の奬勵、社會事業の發達、女子教育の振興に御心を注がせられ、雅樂の復興もその御奬勵に俟つ所が多かつた。又歌文にも秀でさせられ、「金剛石」「水は器」「磨かずば玉も鏡も何かせむ」等の御歌の如き千古の御教訓をたれたまうた。明治四十五年七月三十日明治天皇崩御あらせられて皇太后とならせられ、大正三年四月十一日崩御、同二十四日東京代々木に御大喪儀、京都市伏見區桃山古城山に葬り奉つた。寶算六十五。御陵は明治天皇の伏見桃山陵の東隣に位し、伏見桃山東陵と申す。

〔皇太后〕　先帝の皇后。敬稱は陛下、御身位は太皇太后につぐ。崩御の時御諡を冠して皇太后と奉稱する。

【御懿德】　ゴイトク　うるはしい御德。醇美な御德。御美德。

〔懿〕　(一)うるはしい。專一で美しい。(二)あつい。醇美。(三)溫柔聖善をいふ。多く女德の稱とする。

【二柱】　フタハシラ　二神。

〔柱〕(接尾)　神・佛又は高貴の人を數へるに用ゐる敬語。

【大神】　オホカミ　神の敬稱。おほみかみ。

【心情】　シンジャウ　おもひ。こゝろ。

【刺激】　シゲキ　「刺戟」とも書く。(一)つきおこすこと。はげますこと。(二)心理學的には、感覺器に感覺を發生させ、又はその變化を誘起させる作用。こゝは(一)。

【原動力】　ゲンドウリョク　(一)廣義には宇宙間に存するすべての天然エネルギー、狹義にはそれらの天然エネルギー中、原動機に作用させて動力を發生させ得るもの。(二)轉じて、事物の活動を起すもととなる力。根源の力。こゝは(二)。

【動機】　ドウキ　こゝでは、最も直接に行動を喚起する根本的原因、の意。

【青年團】　セイネンダン　全國的に組織せられてゐる青年(大體、十四五歲以上三十歲以下)の自治修養團體で、人格の修養、體育の奬勵、學藝の向上、產業の開發、及び各種の社會奉仕を目的とする。

もと共同の氏神を有する町村青年の集團から發達して次第に組織をもつた共同團體となり、明治末年頃までは青年會の名稱が用ゐられたが、その後一般に青年團と改稱、漸次府縣的に統一ある社會團體として發展・普及した結果、大正十三年に至つて大日本聯合青年團が創立せられ、翌年その事務所兼倶樂部として明治神宮外苑に日本青年館が建設せられて、全國的統一を見た。現在、町村單位の各青年團はまづ府縣聯合青年團に總括され、更に大日本聯合青年團に統一されてゐる。　昭和六年度の調査によれば、全國の加盟青年團總數は一、六、五三五に及び、團員總數は二、六七八、五五〇人に達してゐる。

【奉仕】　ホウシ　(一)つかへまつること。(二)他の爲に、自己を捨ててつくすこと。(三)待遇すること。こゝは(一)。

【宮居】　ミヤヰ　神の宮の在る所。又は、皇居。

二　明治神宮

【崇敬】　スウケイ　あがめうやまふこと。たつとびうやまふこと。尊敬。

【神靈】　シンレイ　神のみたま。

【鎭まらせ給ふ】　鎭座し給ふ。神靈がその地におとゞまりになる。

【直路】　チョクロ　まつすぐな道路。こゝでは、眞直に道を行つて、眞直に、の意。

【神宮橋畔】　ジングウケウハン　神宮橋のきは。

〔神宮橋〕　ジングウバシ　表參道と南參道枡形との間の省線山手線の上に架けた陸橋。表參道と共に東京市が特設したもので、長さ二〇米、幅約二九米の鐵筋混凝土連續桁橋、左右の勾欄に芝生の小堤を築き、松の樹が列植してある。

〔畔〕　(一)あぜ。くろ。(二)水のほとり。きし。(三)すべて物の邊側。そば。きは。かたはら。たもと。

【第一鳥居】　ダイイチトリヰ　最初の鳥居。一の鳥居。この鳥居は境內の鳥居八基中の一で、臺灣阿里山の大

檜で造つたもので、臺灣總督府の奉獻に係る。高さ一〇・八米、柱間約八米。

「一の鳥居」は、神社の一番外にある鳥居。

〔鳥居〕　神社の門。丸木二本を柱として左右に立て、横に丸木（笠木といふ）をわたし、その下に柱を聯結する貫を入れたもの。初めは神社の横にも後にも立てたが、後、正面にのみ門の如く立てるに至つた。（但し、明治神宮には南・北・西各參道入口の鳥居、大鳥居、南・東・西の各玉垣鳥居の外、本殿の背後に北玉垣鳥居がある。）直線式の上代固有の神明鳥居と佛教渡來後の曲線式の島木鳥居とに大別され、伊勢鳥居・靖國鳥居・鹿島鳥居等は前者に屬し、春日鳥居・八幡鳥居・明神鳥居等は後者に屬する。材料には木材が最も多いが、石材・銅・混凝土などでもつくる。語源に關しては、古代天岩戸隱の時に鷄が居たのによるといふ說、幣の一種として神に供へた鳥を社の門の貫に栖ませたのによるといふ說、山幸彦が海神宮の井の上の樹に鳥のやうに上つて居たのに起るとする說等がある。

【刹那】　セツナ　梵語 Kṣaṇa で、「念」と譯す。佛教にいふ時の最小單位。瞬間。

巴利佛教では十度彈指（つまはじき）する間をいひ、北方佛教には諸說があつて、俱舍論には壯者が一度彈指する間に六十五の刹那があるといひ、仁王經には、一念に九十の刹那があり、一の刹那に九十の生滅があると說く。

【直感】　チョクカン　直接に心に感じること。說明や證明を經ないで、物ごとの眞相を心で感じること。

【肅然】　シュクゼン　（一）つゝしみかしこまるさま。つゝしんでおどそかなさま。（二）靜かなさま。こゝは（一）。

【襟を掻合はせた】　身を正した。

端然と態度を正した樣子をいふ。

【神橋】　シンケウ　神殿にかけわたす橋。又、神社の境内にあつて、神輿の渡御する橋。こゝでは神宮南參道中部に在る「御橋」をさす。

「御橋」は、長さ一〇米、幅約一四・五米。擬寶珠を附した勾欄は岡山萬成產の御影石、橋臺は日光大谷產の

自然石、水中の景石は筑波國有林で採つたもの、又溪流を飾る數十株の楓樹は淺野侯爵家の奉獻に係るものである。

【岡山萬成產の石】　ヲカヤママンナリサンのイシ　岡山市の西北隅に位する萬成山から產する御影石（みかげいし）（萬成石）をいふ。岡山縣は全國に冠たる御影石の產地であるが、その中、萬成石は、住吉產の本御影に似た桃色御影で、裝飾用石材として多量に使用されてゐる。

「御影石」は、花崗岩（加里長石（正長石・微斜長石）・石英及び有色鐵物を主成分とする鹽基質の岩石）の俗稱で、石材としてはその中に含まれる長石の形・大小・色等によつて、斑紋質御影・小御影・白御影・桃色御影・セビア御影等の別がある。概して質が堅牢で美觀を有するので、建築用として又土木用・裝飾用・捨石用として重んぜられるが、加工に費用を要するのと耐火力の弱いのとが缺點である。

【勾欄】　コウラン　宮殿・堂社・橋などの欄干。てすり。

【凭つて】　ヨつて　體をもたせかけて。よりかゝつて。

【景致】　ケイチ　おもむき。けしき。風致。風趣。景趣。

【筑波山】　ツクバサン　（六三頁を見よ）

【國有林】　コクイウリン　國の所有に屬する森林。狹義には國有林野法（又はこれに準ずる法規）の適用を受ける國有財產をいひ、廣義には各省用地の森林もこれに含まれる。

國有林野法の適用を受ける森林には、國有財產法上の營林財產に當るものと、雜種財產中に含まれるものとあり、いづれも農林省林野局の管轄に屬するが、前者が直接公の用に供せられるものとして處分を禁ぜられてゐるのに反し、後者は雜種財產としての性質上、一定の制限の下に讓渡・賣拂等の處分を許されてゐる。

尙、植民地及び北海道には國有林野法は施行されないが、これ等の地方にある國有の森林は、それ〳〵これに準ずる特別な法規（例へば北海道國有林野及產物處分法）によつて取締を受けてゐる。

【楓】　カヘデ　械・鷄冠木とも書く。楓科、かへで屬の落葉喬木。枝條は無毛・平滑。葉は膜質で長柄を有し、全

形は圓狀・心脚で七乃至一一箇の裂片に分れ、各裂片は鋭尖頭で緣邊に鋸齒を有する。四五月頃、暗紅色の小花を繖形花序或は圓錐花序に開き、花後雙翅果を生ずる。秋の紅葉を愛でて觀賞用とされ、林も亦種々に利用される。異名―もみぢ・かへるでのき・いはとべに。

楓科には約百三十種あつて、我が國の山野に自生するもの約五十種、その外栽植變種も極めて多いが、廣義にはこれ等を總稱して楓又は紅葉（もみぢ）といひ、その大部分は秋期の紅葉又は黃葉を以て著名である。

【紅於の影】　コウヲのカゲ　こゝでは、美しく眞赤に紅葉した楓の影、の意。

〔紅於〕　コウヲ　楓の異名。杜牧の詩中の「停車坐愛楓林晚。霜葉紅於二月花」から出た語。

【織り成して】　オリナして　織つてつくつて。

【人工味】　ジンコウミ　人間の手で作つた細工の味はひ。人爲的な趣。

【織細】　センサイ　こまかいこと。微細。

【技巧】　ギカウ　(一)たくみなわざ。技術のたくみなこと。たくみ。細工。(二)文藝・美術の表現・制作上の手腕、又は手段。こゝは(一)。

【自然的の大觀】　シゼンテキのタイクワン　自然のまゝで人工の加らない大きなながめ。

〔大觀〕　(一)廣く見とほすこと。全局を通觀すること。達觀。(二)大きな景色。偉大なながめ。偉觀。

【庭園趣味】　テイエンシュミ　庭園の面白味。庭園の趣。

〔庭園〕　庭と園との總稱。建築と相俟つて人間生活の實用・保安・衞生・休養・娛樂等の完成を目的とする屋外施設。

〔庭〕　建築に從屬した屋外の廣場。

〔園〕　周圍に墻垣をめぐらした土地の一區劃で、內に觀賞植物を栽培したもの。

【樹齡】　ジュレイ　樹木の年齡。

檜のやうな裸子植物、及び雙子葉植物の木本に於ては、多くの場合、その幹の導管部（一般に材と稱する部分）に現れてゐる年輪（導管部が一年間に增大した部分を示す境界線）によつて樹齡を測定することが出來る。

【臺灣產檜】　タイワンサンヒノキ　臺灣阿里山產の檜。（一三頁「檜」の項參照）

尙、臺灣の山地には、普通のひのき（扁柏）の外に、その類種で心材が淡紅色を呈するべにひ（たいわんひのき）を特產し、阿里山にはこの兩種が齊しく繁茂してゐる。

【大鳥居】　オホトリヰ　南北兩參道の合する所に在る鳥居の名。所謂二の鳥居である。臺灣阿里山產の大檜で造つたもので、高さ一二米、柱間約九米、その笠木の表裏に六箇の菊花御紋章が燦然と輝いてゐる。境內最大の鳥居であるばかりでなく、實に日本に於ける木造鳥居中有數の大鳥居である。

この鳥居の用材中島木になつてゐる、樹齡一千七百四十年といはれる檜材は、その末口直徑一・六六米、長さ約一八米、重量七、四〇〇貫の巨大な古木であつたといふ。

【明神鳥居】　ミャウジントリヰ　鳥居の形式の一。柱は傾斜し、笠木・島木共に反り、柱下に礎石（龜腹）を設け、額束（がくつか）及び楔（くさび）を具へてゐるもの。社殿の流造と共に平安朝神社建築の標準となるもので、上・下兩賀茂神社の鳥居はその典型的なものである。鳥居として現在最も普遍的な形である。（一九頁「第一鳥居」の項參照）

【幅員】　フクヰン　橫の長さ。はゞ。ひろさ。

【眼界】　ガンカイ　目の及ぶかぎり。

【亭々】　テイテイ　樹木・山などの眞直に丈高く聳えたつさま。

【背景】　ハイケイ　background（英）の譯語。バックともいふ。(一)繪畫で、一箇の肖像又は一群の人物の周圍の餘地、或は靜物の背後の部分。(二)舞臺の後壁に畫がいた景色。轉じて、舞臺に於ける一場面の飾り附又は道具立。(三)背後の光景又は周圍の狀態。(四)うしろだて。後援者。こゝは(三)。

【土佐繪】　トサヱ　土佐派の繪畫。大和繪の一派であつて、優美・典雅な情趣に富むのを特色とする。

大和繪は、唐畫の手法を日本風俗畫に應用して固有の純日本樣式を生んだもので、平安朝時代に於てその名手と稱せられる藤原基光が土佐守に任ぜられてから、その畫風を以て土佐派と稱するに至つたと傳へられる。隆能筆と傳へられる源氏物語繪卷と光長筆と傳へられる伴大納言繪卷とはその派の代表的名作と稱すべきもので、前者には賦彩の豐富と線描の纖細とを見るべく、後者は前者の靜的なるに對して自由奔放な動的の趣を呈してゐるが、この兩者が源流をなして、更に隆信・信實・隆兼等の名手が輩出し、鎌倉時代の繪卷物流行の因をなした。降つて室町時代中期に光信が現れ、支那畫の手法を採入れた新樣式を生んで中興の祖と稱せられ、德川時代初期には光起が出でて復興した。その後幕末に至り、田中訥言・浮田一蕙・冷泉爲恭等があつて大いに畫風の復古に努め、以て今日に及んでゐる。

【檜皮葺】　ヒハダブキ（ヒワダブキと發音）（一）立木から剝ぎ取つた檜の皮の鬼皮・甘皮・寢皮等を除いたものを、適宜の長さに切り揃へ、これを重ね合はせて屋根を葺くこと。又、その屋根。（二）檜皮で屋根を葺くことを業とするもの。檜皮師。檜大工。こゝは（一）。

檜皮葺は、日本固有の美術的な屋根の葺き方で、古來神社や宮殿に用ゐられ、勾配や軒先を自由な形に造り得る便がある爲に生ずる變化とこれを助ける優雅な色調とによつて重んぜられてゐる。但し非常に高價で且非耐火的であるから、一般の家屋には用ゐられない。

【社殿】　シャデン　神社の神體を安置した殿。みや。やしろ。廟宇。

明治神宮の御社殿は、延長約六三六米の玉垣內の地積約六千五百坪の地域に、御本殿を始め祝詞舍・中門・拜殿・內院廻廊・外院廻廊・複廊・神饌殿・直會殿・便殿・宿衞社・神庫・祭器庫、竝びに東・西・南の三神門等約六百五十坪の建物が配置されてゐる。

【樓門】　ロウモン　上に樓のある門。やぐらのある門。二階造の門。こゝでは「南神門」をさす。

「南神門」は、南玉垣鳥居內の所謂正門である。建坪十二坪半の八脚樓門造。拜殿の正南にあつて、その兩側は外院廻廊に連なつてゐる。

【拜殿】　ハイデン　禮拜を行ふ爲に設けた神社の前殿。

廻廊で區切られた中央にある。建坪五十九坪。一般參拜者はその石階上に到つて拜する。その兩側は複廊に連なつてゐる。

【本殿】　ホンデン　神社で神靈を奉安する社殿。

明治神宮の御本殿は透塀で圍まれた一郭の中央に拜する。建坪二十九坪半。

【木曾御料林】　キソゴレウリン　木曾谷（巻一、一九四頁「木曾路」參照）に在る御料林。特に木曾川の支流玉瀧川を中心とし、面積約一、二〇〇方粁、見積材積一二、〇〇〇萬石（伐採高年約九〇萬石）。津輕・阿里山の森林と共に日本三大美林の一と謳はれる木曾森林の大部分を占める。樹種は針葉樹を主とし、名高い木曾の五木（檜・椹・櫪・羅漢柏・高野槇）の外、樅・椹・唐檜・姫子松・赤松等が知られ、闊葉樹には楢・山毛欅・桂・朴等があるが、最も重要なのはその質全國一といはれる檜であつて、樹齡二百五十年前後の大木が鬱蒼として連なり、全國御料林中で最も著明のものである。伊勢神宮御造營用の御神木はこゝから伐出せられる。（一三頁「檜」の項參照）

この大森林はもと尾州藩の經營で、特殊の保護を加へられてゐたが、明治二十二年御料林に指定、帝室林野局木曾支局の管理下に置かれ、現在では森林鐵道が設けられてゐる。

〔御料林〕　帝室の御所有に屬する森林。他の御料地（その他の土地）と併せて、帝室林野局が皇室財產令によつて管理經營するところで、これが爲に內地・北海道を通じて四支局（木曾・名古屋・東京・札幌）が置かれ、五十餘の出張所が設けられてゐる。

【芳しい】 カンバしい 「馨しい」「香しい」とも書く。かほりのよい。にほひのよい。

【崇高】 スウカウ けだかくたふといこと。尊嚴なこと。

【中門】 チュウモン (一)貴人の屋敷の、表門と寢殿との間に在る門。卽ち寢殿造に於て、東西の對屋から泉殿或は釣殿に通じる長廊の內に開いた往來で、四脚門から中庭に通じる切通し。(二)社寺の、樓門と拜殿や本堂の間に設けた門。

明治神宮の中門は拜殿と本殿との間に在り、建坪十坪で透塀の中央正面に開かれてゐる。

【內內院】 ナイナイキン 明治神宮の、內院の中の中門內の一郭をさす。中門に連なる透塀を以て圍み、內に後本殿・神庫・祝詞舍がある。

〔內院〕 一郭の殿舍建ち竝ぶ中、その內側の一區をさしていふ稱。その外側を外院(げゐん)、若しくは中院・外院などと呼ぶに對するもの。

因みに、明治神宮に於ては、御社殿正面南鳥居の內の南神門內の一郭を外院、拜殿內の一郭を內院といふ。

【神聖】 シンセイ 清淨でけがれのないこと。たいそうたふといこと。尊嚴でおかし難いこと。靈妙で威嚴のあること。

【何事のの歌】 この中にどんなことがおありになるかはわからないが、靜かに拜んでゐると、たゞなんとなくもつたいない感じがひし〳〵と身にしみて來て、自然に涙がこぼれることである。

西行法師が伊勢皇太神宮の御祭日に詠んだ歌で、內閣文庫本の西行法師歌集、藤岡博士の異本山家集等に收められてゐる。

【默禱】 モクタウ 無言のまゝ心の中で祈禱すること。

【光波】 クワウハ こゝでは、單に「光」といふほどの意。(卷一、二二七頁「日光」の項參照)

【陰鬱】 インウツ 陰氣で鬱陶しいこと。氣がむすぼれて晴々しくないこと。

【解放】 カイハウ (一)ときはなすこと。(二)ゆるしはなすこと。禁遏・束縛を解いて自由を許すこと。こゝは(一)。

【露呈】 ロテイ 「呈露」に同じ。あらはししめすこと。むきだし。

【淺露】 センロ 淺くあらはなこと。

【滲透】 シントウ しみとほること。

【威力】 イリョク 他を威服する力。人を畏敬させる力。

【奉祀】 ホウシ 神を祀ること。あがめまつること。

【舊弊】 キウヘイ (一)昔からのわるいならはし。舊來の弊害。(二)在來の風習・思想に拘泥すること。又、その性質。こゝは(一)。

【觸接】 ショクセツ 「接觸」に同じ。ちかづきふれること。さはること。

【新文明】 シンブンメイ 新しい文明。こゝでは、西洋文明をさす。

〔文明〕 人智が進步して百般の事物が整備した狀態。人類が自然を利用して招來した外部生活の發達した狀態。近年は「文化」に對して特に物質的發達をさす。

【活動的】 クワツドウテキ いき〳〵と動くさま。活潑に事をするさま。活動性に富んでゐるさま。

【進取的】 シンシュテキ 進んで事を行ふさま。進取の氣象のあるさま。(保守的の對。)

【闊達】 クワツタツ 度量ひろく、物事に澁滯しないこと。氣象の大樣で迫らないこと。豁達。

【氣象】 キシャウ (一)生まれついた心だて。もちまへの心。きだて。氣質。氣性。(二)寒・暑・晴・曇・雨・風等の大氣中に生ずる物理的變化の現象。こゝは(一)。

【ぴつたり】 「ぴたり」に同じ。(一)遽に止るさま。(二)物の密著するさま。又は、よく適合するさま。調子・氣分等のよく揃ふさま。こゝは(二)。

【呼吸を合はせて】 調子を合はせて。こゝでは、ぴつたり一致して、調和して、の意。

【均齊】 キンセイ (一)二つ以上の物事のひとしいこと。平衡。(二)symmetry(英)の譯語。繪畫・建築・裝飾・

圖案等に於て、左右に同じ形の對立してゐること。こゝは（二）。

【兩翼】　リャウヨク　兩方のつばさ。左右のつばさ。こゝでは、廻廊を鳥の翼に譬へたもの。

【廻廊】　クワイラウ　神社・佛閣などの周圍に、長く折りめぐらして作つた廊下。明治神宮の廻廊は、內院・外院の外壁をなす內院廻廊及び外院廻廊、竝びに拜殿の左右に連なつて內外院の境界をなす複廊とである。

【列柱】　レッチュウ　こゝでは、內院廻廊及び複廊の內側筋の圓形膨み付吹拔別柱をいふ。

【便殿】　ベンデン　休息の爲に設けた御殿。休息の御殿。〔便〕　こゝでは、やすんずる、くつろぎ休む、の意。

【西神門】　ニシシンモン　外院西廻廊の中央に在る門。建坪約五坪。

【視野】　シヤ　視力のとゞく範圍。學問的には、眼をある一點に注いで少しも動かさない

狀態（卽ち直視の狀態）に於て見得る範圍をいふ。その大きさは色によつて異なり、白色を見る時に最も大きく、黃・青・赤・綠の順でこれに次ぐ。

【芝生】　シバフ　一面に芝の生えてゐる地。芝原。

【嚴肅】　ゲンシュク　おごそかなこと。

【快活】　クワイクワツ　こゝろよくいきいきしたこと。はきはきとして元氣あること。

【優雅】　イウガ　やさしくみやびやかなこと。上品でみやびやかなこと。氣品のすぐれたこと。

【急轉】　キフテン　急に轉じかはること。俄に轉回すること。

【落葉樹】　ラクエフジュ　常綠樹に對する語で、秋期に於て全部の葉が短時日の間に枝より離脫する樹木。例へば楓・櫻・栗・楢・櫟・梅等はこれで、落葉後は越年する芽を枝に殘したまゝ休眠の姿で春を待ち、時到れば一時に萌芽して葉を著ける。尙、この種の樹木では落葉に先立つて紅葉現象の見られるものが多く、又落葉現象は溫帶地方に著しいもので、熱帶地方には落葉樹が少い。「常綠樹」は、一般に葉の壽命が落葉樹のそれよりも長くて數年を保ち、比較的長期間に互つて少しづつ落葉するもので、その落葉は多く新葉を生じた後にはじまるが故に、全體としては常に綠葉を著けてゐる。松・杉・檜・椎・樅等はこれに屬する。（卷一、二一〇頁「闕葉樹がいつしか針葉樹に變り」の項參照）

【寶物殿】　ハウモツデン　境內の北隅に在る。御祭神二柱に最も御由緒の深い御物を永遠に奉安する建造物。中倉・東倉・西倉・東廊・西廊・東橋廊・西橋廊・東渡殿・西渡殿・正門・車寄・北廊・事務所等から成る。寶物は東西兩倉に收藏し、中倉に陳列して一般の拜觀を許されてゐる。

寶物殿の主體である東・西・中の三倉は奈良の正倉院の形式をとり、東倉・西倉は各〻二十八坪、中倉は校倉大床造で、百三十一坪の鐵筋混凝土建である。

【中古時代】　チュウコジダイ　國史の時代區分の一。大化の新政（一三〇五）から平家の滅亡（一八四五）までをいふ。我が國が大陸文明を攝取・消化して文化的・政治的に大飛躍を遂げ、所謂奈良朝及び平安朝の燦然たる文華を開いた時代である。

【鐵筋コンクリート石張】

明治神宮の寶物殿は、鐵筋コンクリートを構造の主體とし、その壁體の鐵筋へ石（主として萬成產御影石）を堅固に張りつめたもので、屋上は凍霜によく耐へる會津產の釉懸耐寒瓦を以て葺かれてある。

〔鐵筋コンクリート〕　鐵材で補强した混凝土。卽ち、壓力に强い混凝土中に張力に强い鐵材（鋼）を插入して、兩者の强度を互に補はしめた構造材料をいひ、耐火・耐震に適するのみでなく、材料費・工事費が經濟的なので、現今では建築上主要な構造材料となつた。

〔コンクリート〕　concrete（英）　混凝土。セメントと砂や砂利のやうな骨材とを適當な割合で水を加へて混合したもの。これを型枠中に塡充すれば、次第に硬化

して堅牢な構造材料を得る。

【八幡製鐵所】ヤハタセイテツジョ　八幡市枝光にあつた官設製鐵所で、現日本製鐵株式會社八幡製鐵所の前身。明治三十年二月の設立にかゝり、我が國唯一の官設製鐵所であつたが、昭和八年半官的の日本製鐵株式會社が創設されるに及び、廢せられてその所管に移つた。

【鐵材】テツザイ　各種の用材としての鐵をいひ、その用途は多方面に亙るが、こゝでは建築用鐵材をいふ。建築に於ける鐵材の應用範圍は極めて廣汎で、大は家屋の構造材から小は各種の部分品に至るまで百般の用に供せられるが、最も多量に用ゐられるのは軟鋼であり、最も大なる用途は、鐵骨構造或は鐵筋混凝土構造の建築物の骨組としてである。

【橋梁】ケウリャウ　はし。かけはし。

〔梁〕はし。車馬の通ることの出來る水橋。

【池塘】チタウ　池のつゝみ。

〔塘〕つゝみ。土を築いて水を防ぐもの。

【枡形】マスガタ　(一)四角い枡のやうな形。(二)建築上で、柱などの上に設けた方形又は矩形の木。とがた。ます。(三)城の一の門と二の門との間の廣く平な方形又は矩形の地。

但し、明治神宮の枡形は、南・北・西各參道の入口に在る矩形の廣場をいひ、こゝでは、南參道枡形卽ち神宮橋と南鳥居との間の廣場をさす。面積約千百坪、下乘札及び制札がある。

【社務所】シャムショ　神社の事務を取扱ふ所。

明治神宮社務所は南參道右側の小高い所に在る。齋館を挾んで勅使殿と相接してゐる。齋館は祭典に當つて宮司以下神職一同の齋戒する所。勅使殿は例祭その他臨時の大祭に參向する勅使の休憩所。

【古雅】コガ　古風でみやびやかなこと。古代の風があつて雅致あること。しぶみがあること。さびがあること。

【一構へ】ヒトカマヘ　屋敷を構へた一區域。

【御由緒】ゴユヰショ

〔由緒〕(一)物事の由來した端緒。ゆゑよし。理由。

(二)傳へ來た事由。來歷。こゝは(二)

【舊御苑】キウギョエン　もと代々木御苑と稱したが、神宮御造營後舊御苑と呼ぶ。南參道御橋を渡つて左側の樹木鬱蒼たる一帶で、總坪數三萬二千三百坪、櫟・楢・栗などの樹下に熊笹が茂つてゐて、今猶武藏野の俤を殘してゐる。昭憲皇太后御在世の砌、屢〻行啓があつて苑内の野趣を御賞美あらせられたといふ。

代々木御苑は、昭憲皇太后の御健康の爲、明治天皇の思召で、苑内に紆曲した散歩道をつくつて御運動場にしつらへられたものであるといふ。

〔御苑〕帝室の御庭。禁苑。

【舊御殿】キウゴテン　社務所の北に在る。もと井伊家の下屋敷であつたのを、御料地となつてからその一部を修理した建物。天皇及び皇太后の行幸啓があつた際の玉座が今猶存する。

本文では舊御殿を舊御苑内の建物として記載してあるが、社務所發行の諸書には御苑外となつてゐる。

〔御殿〕(一)高貴の人の住家の尊稱。(二)清涼殿の一名。

【舊御茶屋】キウオチャヤ　「隔雲亭」ともいふ。舊御苑南池に臨んだ丘上に在る。

昭憲皇太后行啓の砌、こゝに御休息あらせられ、四圍の自然の風致を愛でさせられたといふ。

【技巧を弄しない】技術上のたくみをいたづらに用ゐない。出來るだけ人工を加へずに自然のまゝにしてあるさま。

〔弄する〕ロウする　もてあそぶ。自由にあつかふ。

【すつきり】(一)殘るくまなく。全く。悉く。(二)滯るところなく。さつぱり。あつさり。こゝは(二)。

【しをらしく】愛らしく。

〔しをらしい〕愛らしい。かはゆらしい。おだやかでつゝしみがある。

【萩】ハギ　荳科、はぎ屬の多年生草本。莖は叢生して高さ約二米に達する。葉は廣楕圓形又は倒卵形の三小葉か

ら成る複葉。秋日、葉腋又は梢上に多數房狀の紅紫色又は白色の蝶形花を開き、後、莢を結ぶ。變種が多い。秋の七草の隨一で、やまはぎ・しらはぎ等ともいはれ、その他古枝草・野守草等古歌に詠まれた異名は甚だ多い。

【熊笹】　クマザサ　禾木科、くまざさ屬の多年生植物。莖は稈莖で、直生或は斜上生、高さ一・二―一・五米。毎枝五枚乃至七枚の葉を出す。葉は長楕圓形・鋭尖頭で、長さ二〇―二四糎に達し、冬期緣邊のみが白く枯れて一種の美觀を呈する。花は長梗・卵形の圓錐花序をなして稈の下部から發生するが、これを見ることは頗る稀である。本州各地及び四國等の山地に自生し、又庭園に栽植して風致を愛賞する。葉は魚籠の下敷、鮨の笹卷等に用ゐられる。異名―やきばささ・へりとりぐさ。

【櫟】　クヌギ　殼斗科、かし屬の落葉喬木。高さ一五米内外。葉は有柄で互生し、卵狀或は長楕圓狀披針形で先端鋭く尖り、緣邊には尖鋭な齒牙を有する。雌雄一家で、五月頃、長い雄穗と、皿狀の總苞を具へた短い雌穗とを

著ける。花色は黃褐。花後、ほゞ球形の黑褐色堅果を結ぶ。殼斗は皿形で、鱗毛は伸びて毛狀をなす。我が國各地（本州中南部・九州・臺灣等）の山野に分布。材は最良の薪炭用として重んぜられ、樹皮は染料及び鞣皮用となる。異名―くにぎ・どんぐり・ふしまき・かたぎ。

【楢】　ナラ　殼斗科、かし屬の落葉喬木。高さ一〇―一五米。葉は有柄で互生し、倒卵狀長楕圓形又は倒卵形、鋭頭或は鋭尖頭で緣邊に粗鋸齒を有する。雌雄一家で、五六月頃、長い疎穗狀雄花と、盃狀の總苞を具へた短い雌穗とを著ける。花色は黃褐。花後、盃狀の殼斗を有する楕圓形の堅果を結ぶ。我が國各地（北海道・本州・九州・四國等）の山野に分布。材は器具及び薪炭の料に供せられる。異名―こなら・ほそ・ははそ・まき・のほそ。

【雜木林】　ザフキバヤシ　色々な木のまじつた林。

【近郊】　キンカウ　都市又は都邑の傍に在る村里又は原野。

〔郊〕　(一)都の外。市外。周の制に國都を距ること五十里以内を近郊、百里以内を遠郊といふ。(二)町つゞきの田舍。

【野趣】　ヤシュ　(一)田野の趣。田舍びた趣。人工味のない自然のまゝの趣。(二)素樸な趣味。こゝは(一)。

〔菖蒲田〕　シャウブダ　清正井の南に在る、昭憲皇太后御遺愛の花菖蒲の田。

もと井伊家領當時は水田であつたが、御料地となるに及んで、明治天皇の思召によつて各地から品質優良な花菖蒲を集めて培養したもので、その種類は座間の森・四方の海・太平樂・古稀の色等八十餘種に及ぶ。

〔菖蒲〕　(一)白菖とも書く。天南星科、しやうぶ屬の多年生草本。横走する根莖から劍形・長大で中肋脈の顯著な葉を叢生し、初夏その間に花莖を抽いて黃綠色の細小花が肉穗花序に密集する。本邦各地の水邊の濕地に自生し、莖葉共に芳香を有する。端午の節句に用ゐられるのは本種であり、古くはあやめと呼ばれた。異名―あやめぐさ・おにせきしやう。(二)はなしやうぶ（花菖蒲）の略。本州中北部の山野に自生するのしやうぶの栽植變種で、鳶尾科、あやめ屬の多年生草本。葉は劍形で中肋脈顯著。初夏葉間に花莖を抽き、大形の美花を頂生する。花被は六片あり、外側の三片（萼片）は下垂し内側の三片（花瓣）は上向する。昔時から觀賞用として濕地に培養せられ、園藝品種が極めて多く、花色も種々、花形も多樣である。

【今上陛下】　キンジャウヘイカ　「今上」とも申す。當代の天皇陛下。こゝでは、大正天皇を申し奉る。

大正天皇は、第百二十三代の天皇にましまし、御諱は嘉仁、明治天皇の第一皇子、明治十二年八月三十一日御降誕、明宮と御命名、二十年八月儲君に御治定、二十二年十一月三日立太子、四十五年七月三十日踐祚、大正四年十一月十日に、明治四十二年公布の皇室令第一號登極令に基づく最初の卽位大禮を京都に於て行はせられた。明治大帝の大御心を基として萬機を總攬したまひ、十一年、久しきに亘る御疾患によつて皇太子裕仁親王（今上天皇）を攝政とせられてひたすら御靜

養遊ばされたが、十五年十二月二十五日崩御あらせられた。寶算四十八。翌昭和二年二月七日御大喪儀、武藏陵墓地内多摩陵に葬り奉つた。

〔今上〕　當代の天皇陛下。今のうへ。當今。當帝。今上天皇。今上皇帝。

〔陛下〕　天皇・皇后・皇太后・太皇太后の敬稱。直接天子をさし奉らずに、階下の護衞兵に執奏を請ふ義。支那では秦の始皇帝以前には、諸侯にも用ゐられた。

【東宮】　トウグウ　「春宮」とも記し奉る。(一)皇太子のまします御殿。令集解「御子宮在御所東、故云東宮也。伴云、四時氣自東發、卽春准此故爲東宮春宮、其義无別也」(二)轉じて、皇太子を申し上げる。はるのみや。みこのみや。ひつぎのみこ。まうけのきみ。こゝは(二)。

【行啓】　ギヤウケイ　太皇太后・皇太后・皇后・東宮・東宮妃・皇太孫のおでまし。

【清正井】　キヨマサノヰド　舊御苑の西北隅に在つて、菖蒲田及び南池の水源をなしてゐる。往昔この地が加藤清正の下屋敷であつた當時、清正が自ら掘つたものであると言ひ傳へられてゐる。

【代々木の名の起原であるといふ大木の樅】　南參道の中途、社務所前から舊御苑への入口の左側に在る枯株の大樅で、「代々木」と呼ばれてゐる。周圍約一一米、我が國の樅としては稀有の大木であるといふ。昔からこの地に樅が生えては大木となり、枯れゝば又生えて、代々相傳へたので「代々木」の名を得、轉じて地名となつたと言ひ傳へられてゐる。

東都一覽武藏考に「千駄ヶ谷と代々木との間に井伊掃部頭の下屋敷あり。めぐり一里餘あり。園中に樅の大木ありて枝たれたり。これに攀れば芝浦、鐵砲洲まで、一目にして奇觀なりとす」とあり、安藤廣重の繪本江戸土產にもその圖が出てゐる。

〔樅〕　モミ　(卷一、二一二頁を見よ)

【涙ぐましい】　(一)涙ぐみ易い。涙を催しがちである。涙が出さうである。(二)かなしい。あはれである。こゝは(一)。

【靄】　モヤ　(卷一、二一五頁「靄」及び二四三頁「霧」の項參照)

【かつきり】　區別のはつきりしたさま。きつかり。

【ほんのり】　ほのかなさま。うつすら。かすか。ぼんやり。

【曲線】　キヨクセン　(一)まがつたすぢ。(二)數學上で、いづれの部分も直線でない線。卽ち、線の中で、直線又は線分の接續によつて成る線以外のもの(但し、高等數學では直線をも含めて考へる)。こゝは(一)。

【鑄付けられたやうに】　鑄物に型附をしたやうにしつかりと、の意。

【御威靈】　ゴヰレイ

〔威靈〕　威嚴のある神靈。おごそかで神々しい力。威德。威光。威稜。

【鎭座】　チンザ　神靈の鎭まりますこと。

【偶然でない】　おもひがけないことではない。故のないことがらではない。

〔偶然〕　グウゼン　(一)思ひもよらぬこと。意外。(二)豫想しなかつた事柄。原因の知れぬ事柄。

二　解釋

一　主題　明治神宮の貴さと神域の幽邃・莊嚴・優雅。

二　明治神宮

插圖「社殿正面」　御社殿前廣場左方の表手水舍附近から南玉垣鳥居及び南神門を望む圖。鳥居の左右に連なるは玉垣。

插圖「本殿」　內苑左複廊附近から中門內に御本殿を拜する圖。中門の左右に連なるは透塀。

插圖「芝生」　寶物殿前北池南畔から西方に大芝生の一部を望む圖。

插圖「寶物殿」　北池中島に架した鐵筋混凝土桁橋畔から寶物殿を望む圖。右から中倉・西廊・西倉。

插圖「菖蒲田」　舊御苑菖蒲田。四阿は昭憲皇太后御在世の砌、菖蒲を御覽ぜられた御場所。

2　構想

(1)　代々木の森に行はれた明治神宮の造營竣工の喜（初―九ノ七）。
(2)　明治神宮造營の大工事を完成させた原動力（九ノ八―一二ノ一一）。
(3)　幽邃な南參道と明るくて莊嚴な神殿（一三ノ一―一八ノ七）。
(4)　優雅な寶物殿一帶と野趣に富んだ舊御苑（一八ノ八―二二ノ五）。
(5)　暮色に包まれた神域の神々しさ（二二ノ六―終）。

3　敍述

〔快美な色彩の反射と和らいだ感觸とをもつた秋の日の光に包まれてゐる代々木の森〕――代々木の森に對する作者の平生の氣持が自づと現れてかくも清新な觀照をなし得てゐる。代々木の森は、もと〳〵から明治神宮が造營されるべき神々しい別天地であつた――作者はさういふ風に代々木の森を感じ懷かしんでゐたのである。

〔あの中に明治神宮が建つのだ。さう思ふと、私の心は莊嚴な或衝動を感ずると同時に、生みの親の墓に對するやうな、懷かしさに充たされた〕――代々木の森に明治天皇を祀り奉る神宮が建たうとしてゐる。それに對して筆舌に盡くせない感激を覺えるのだ。理窟を超越した感激が躍動してゐる。そして「生みの親」の墓に接するやうな懷かしさといひ、「たまらない程嬉しく思はれた」といふ。その率直な述懷に眞情が横溢してゐる。

〔神域、眞に神のいまし給ふに適した莊嚴と靜寂と幽雅との領土〕――竣工した神域に立つて作者の感激はいよ〳〵深いものがある。神のいます所となつて、あまりの神々しさに打たれたのだ。莊嚴と靜寂と幽雅との融合した所に、作者は神靈の存在を感じようとしてゐるのである。

〔何者の力が此の新しい「建設」の事業を完成させたのであらう〕――毎日々々見つゝ通つた造營のさまを思ひ出し、現實に神々しい神苑に立つ時、かくも莊嚴に完成した建設に驚くのあまり、この言を吐かざるを得ないのである。數字や統計に上つて來ない、かくれた力を思はざるを得ないのである。そしてそれが今猶神苑の到る處に充ち滿ちてゐるのを感ぜざるを得ないのである。

〔鳥居から約一町ばかり奥へ入つて神橋の所に來ると、何處からともなく、水の音が聞えて來る〕――いつの間にか讀者も作者と共に參道を靜かに奥の方へ歩いてゐるやうな氣持に引き入れられる。そしてさら〳〵といふ水の音が聞えて來るやうに感じる。直ぐ次に「數十株の楓が、今しも紅於の影を水面に落して、美しい秋の錦を織り成してゐる」とある敍述などと共に、あたりの景致を印象させる章句である。

〔私は默禱を終へて、始めて向ふを見上げた。何といふ明るい、快い感じを持つた社殿だらう〕――靜かな默禱を終へた眼に映つた社殿の印象が端的に表現せられてゐる。神社・佛閣の建築美はかういふ態度によつてのみ味はれ、理解せらるべきであらう。

〔私は其の一つ一つを拜觀して廻つて、涙ぐましい程の強い感激に打たれながら、夕暮近くなつて御門を出た〕――神苑内のどこへ行つても感激なくしては拜されない。「かたじけなさに」涙をこぼしながら、夕暮まで拜觀して廻つて、今や御門を出て來た作者、讀者も亦その作者と共に、暮色につゝまれてゆく神域をふり返つてゐるのである。

三　批評

明治神宮造營のことが成つた當時に於ける參拜記である。極めて自然の感情の流露があり、極めて新鮮な觀察が描かれてゐる點に於て、當時に於ける國民的感情を代表するものといつてよいであらう。

三　備考

一　指導の問題

讀みに於て、まづ作者の感激に同感する生徒と、作者の觀察に注意する生徒とがあるであらう。それは何も何れか一方に片附けて、劃一的に學習を進めるには及ばぬ。それ〴〵自由な徑路を辿らせて、やがてその全一の姿に到達させればよいであらう。表現そのものの價値よりも、素材そのものの意義の爲に採られた教材であることは爭へない事實である。明治神宮造營に於ける全國民の至情と、それの表現としての擧國的奉仕の狀況、及びその成果としての神域の一木一石であることを理解させることによつて、明治天皇の御聖德と、昭憲皇太后の御慈德は仰慕せられるであらう。隨つて觀察は感激に發展し、感激は觀察に裏付けられるやうに導くことによつて、全一的な學習が指導せられるであらう。

作者は造營中に於ける、石を切る音、木を削る音、又は木材を運ぶさま等を敍して後、竣工した神域を、參拜の順路を追うて敍してゐるのであるが、文の機構は、行動の順路よりも、觀察せられた對象を中心としてその發展を跡づけることによつて、主體的・有機的に闡明せられるであらう。この點に於て、構想把握の指導が要せられるかも知れない。

卷一の四「明治天皇御製」と相俟つて、又前課「日本」と相應じて、國體の精華を實感させ、會得させる指導が肝要であらう。

二　參考資料

明治神宮創立の由來を「明治神宮略記」から左に引用する。

長くも　明治天皇は實に不出世の大英主に在せり。その聖德大業は古今に卓絕し、東西に比類なく、明治の大御代は赫々たる我國史の上に更に一段の光輝を放てり。山よりも高き御恩澤、海よりも深き御仁愛は、日本國民の骨に泌み肝に銘じて、千載忘れんとして忘るゝ能はざる所なり。

明治四十五年七月、一度御不豫の報傳はるや、上下驚愕措く所を知らず。御回復を希ふが爲め或は身を捧げて天地に祈るあり、或は食を斷つて神明に誓ふあり、國民は一人として生ける心地もあらず。殊に宮城前廣場の如きは、炎天の下燒くが如き砂の上に額づきひれ伏す赤子の群、入りかはり立ちかはりて絕ゆることなく、草木も眠る眞夜中と雖も熱禱の聲のやむ間とてあらざりき。されどなほその甲斐もなくて、悲しくも月の三十日といふに遂に神ざりたまひぬ。六千萬の臣民、今は宛ら慈父を失へる赤子の如く、自失悲痛のあまり氣も狂はんばかりにて、天地は全く悲しみの暗雲に鎖され畢んぬ。

爾來、國民の天皇を追慕し奉る念は日一日に切にして、此の熱情は遂に白熱化し至誠の籠れる一部の運動となりて現れたり。卽ち崩御の後幾干もなくして、聖帝の神靈をいつき祀るべき神宮奉建の議各方面より起り、遂に國民の輿論となれり。初め帝國敎育會の請願に對して、貴族院は之を採擇すべきものと議決し、衆議院は明治天皇を奉祀せんが爲め明治神宮奉建の計畫を建て、速に帝國議會の協贊を求むべき旨、政府に建議するところあり。かくて、大正二年十一月に至り　明治天皇御鎭祭の儀を御治定あらせられ、翌月勅令を以て神社奉祀調査會官制を公布し、卽日施行せられ、明治天皇奉祀に關する一切の事項は同會をして調査せしむることゝなりぬ。第三十五帝國議會は滿場一致を以て神宮奉建の總豫算案を可決し、同四年四月勅令を以て明治神宮造營局官制を公布せられ、之と共に神社奉祀調査會は廢止せられたり。かくて、總裁に伏見宮貞愛親王殿下を戴き、內務大臣副總裁に當り、局長以下の任命を見、別に評議委員會を設けて御造營に關する重要事項を調査審議せしむることゝなれり。

これより先　明治天皇奉祀につき審議中、大正三年四月不幸にして又　昭憲皇太后の崩御に遇へり。皇太后坤德彌高く坐して日夜に萬民を慈ませ、明治の聖世を內より助け成し給へる廣く高き御勳は、國民の共に欽仰し、中外の均しく尊崇し奉るところなり。されば明治神宮は　明治天皇　昭憲皇太后二柱を併せ祀ること最も當を得たることゝし、調査會委員審議の末建議する所あり。其の儀、大正三年八月御內定あらせられ、翌四年五月一日內務省告示を以て公表あり。同時に官幣大社に列せらるゝ旨仰出されしにより、此日を

以て列格記念日とし昭和五年以降毎年舞樂の奉奏をなすことを例とせり。

夢寐にだも忘れ得ぬ、偉く碁はしき二柱の神靈を養きまつるべき神宮の御造營に、いさゝかなりとも力を捧げたきは國民誰も誰もの願なり。こゝを以て其の費金は個人の寄附によらず、一切國庫より支出し、國民全部の力を以て御造營申上ぐることゝはなれり。かくて大正四年十月七日先づ地鎮祭を行はせられ、翌年三月二十五日新始祭、同八年五月二十七日立柱祭、同七月十二日上棟祭と諸儀滞なく濟み、工事は著々として進捗し、大正九年秋には殿舍の建築全く成り、十月二十八日清祓式並に新殿祭、翌二十九日には御飾式を行はれたり。かくて十一月一日を以て極めて莊嚴且盛大なる御鎮座の大祭を執り行はれ、國を擧げて歡び狂ふ此のよき日に、我二柱の大神は日本國永遠の御守護として安らけく鎭りますことゝはなりぬ。

此の御造營たるや、もとより全國民至誠の結晶に外ならざれど、中にも特筆すべきは全國青年團員其の他の勞力奉仕のことなりとす。勞力の奉仕は大正五年春より始まり、爾來續々出願する各地青年團員を順次採用することゝせり。奉仕の團體全國各府縣に亙り、北は北海道より南は沖繩に及ぶ。此等青年は何れも燃ゆるばかりの至誠と不撓不屈の元氣とを以て事に當り、寒暑を冒し風雪を凌ぎ、あらゆる艱難辛苦と戰ひつゝ、只々廣大無邊なる御鴻恩の萬分の一に報いまつらんとして奉仕するが故に、能率の上ること著しく、他の職工人夫に至るまで悉くその感化をうけて、工事の進捗速なること殆んど類を見ず。されば一時世に喧しかりし勞働問題の如きも、代々木の神域には一歩も侵入し得ざりしのみか、寧ろ他の高き賃金に背きて御造營工事に携らんことを希ふ職工土工尠からずといふ面白き現象をさへ見るに至れり。

尙個人にありても、或は自己の壽命に代へて奉仕の技の成就を神に誓ふ工匠あり、或は全然無償にて數ケ月間の奉仕を冀ふ職工あり、其の他鬼神を泣かしむる美談は枚擧に遑もあらず。

嗚呼明治神宮はかゝる赤誠の凝つて成れるものなり。

三　自然に對する五分時

徳冨蘆花

一　解題

一　本文

「自然と人生」のうち「自然に對する五分時」から二篇を採錄した。「自然と人生」は、短篇小說「灰燼」を始め「自然に對する五分時」「寫生帖」「湘南雜筆」「風景畫家コロオ」等の五篇百餘章を收載したもの、四季の自然美を主として描寫した小品・隨筆が大半を占めてゐる。自然描寫の文學として當時驚異を以て迎へられ、現在に於ても廣く愛誦せられてゐる。（自然と人生　一冊、明治三十三年八月、民友社發行。岩波文庫自然と人生　一冊、昭和八年五月、岩波書店發行）

二　作者

德冨蘆花。小說家。本名は健次郎。明治元年十月熊本縣葦北郡水俣村に生まれた。十一年京都の同志社に入學したが、十三年退學。十八年熊本市で基督敎の洗禮を受け、愛媛縣今治に於て傳道に努めた。十九年同志社に再入學したが、翌年歸鄉し、熊本英學校に敎へること約一年半、二十二年上京して兄蘇峰德富猪一郎の經營に係る民友社に入り、飜譯・著述に從事した。三十一年十一月から翌年五月にわたつて國民新聞に連載し、三十三年單行した長篇小說「不如歸」によつて、文名一時に揚り、ついで「自然と人生」「思出の記」等を上梓して一躍讀書界の寵兒となり、文壇に獨自の地位を占めた。後性行上の相違から蘇峰と不和を生じ、三十五年遂に民友社を去り、翌年長篇小說「黑潮」を自費出版して少からぬ反響

を得、三十九年聖地イェルサレム巡禮の途に上り、更にロシアのヤースナヤ・ポリャーナにトルストイを訪ひ、半歳の後歸朝。四十年東京府北多摩郡千歳村粕谷に閑居を營み、晴耕雨讀、ひたすら思索に耽つた。大正三年父の死に會ひ、三年間隱棲の門を閉ぢて喪に服したが、八年夫人を伴なつて世界周遊の途に上り、翌年歸朝した。後、告白的な自傳小說「富士」の稿を起し、その制作に傾倒した。十五年末千葉縣夷隅郡勝浦町に於て腎臟を病み、翌昭和二年粕谷の自宅に歸つて病を養ふこと半歳、伊香保の地を慕つて、七月重態の身を運び、九月歿した。享年六十。臨終に及んで兄蘇峰と和解した。著作には前記の「不如歸」「自然と人生」「思出の記」「黑潮」等の外、「青山白雲」「青蘆集」「順禮紀行」「みみずのたはこと」「死の藪に」「新春」「日本から日本へ」等の隨筆・紀行、及び傳記「竹崎順子一」があり、「富士」は生前三卷を上梓し、第四卷は死後夫人の手によつて完成された。著作は總べて蘆花全集（全二十卷）に收められてゐる。

三　採擇の趣旨

自然を題材とした文に入るに先立つて、自然美の母ともいふべき太陽光の輝かしさ嚴かさを描いた文を掲げた。文藝的教材である。

二　教材としての研究

一　註解

【自然に對する五分時】　シゼンにタイするゴフンジ　五分時といふ、極めて短い時間に於て味ははれた、多趣多彩な自然美とその推移を描かうとした文題。

〔自然〕　(一)人爲の加らない狀態。天然。(二)人力で左右し得ない狀勢。(三)造化の道又は力。(四)天然の性質。本性。天性。(五)吾人の認識となつて外界に實在する一切の現象。自然的な觀方に於ける一切の客體の總體。(六)人類以外に存在する外界。卽ち自然物と自然力。(七)精神以外の客體の總體。

〔時〕　(一)とき。時刻。(二)時間の單位。(三)「時間」の略。

【出日】　シュツジツ　(一)出づる日。朝日。(二)日の出る所。こゝは(一)。

【枕を撼かす濤聲】　枕を搖り動かすやうに感じられるほど高い浪の音。

〔撼かす〕　ウゴかす　搖りうごかす。

〔濤聲〕　タウセイ　おほなみの音。なみのおと。

〔濤〕　おほなみ。海中に聲高く起るおほなみ。ゆるく大きくうねるなみ。

【夢を破られ】・ユメをヤブられ　夢を覺されて。目を覺されて。

【早曉】　サウゲウ　よあけがた。拂曉。早旦。

【銚子】　テウシ　現銚子市。利根川の河口の南岸に位し、銚子半島の大部分を占めて太平洋に臨んでゐる。德川時代以來、漁港・商港として發達し、現在でも我が國有數の大漁港であり、又醬油の釀造工業等を以て名がある。我が國最古の無線電信局の所在地。人口約五萬（昭和九年十月推算）。もと、銚子・本銚子・西銚子の三町に分れてゐたのを昭和八年二月合併し、更に南隣する豐浦村を加へて市制が布かれた。犬吠岬の在る海上郡高神村の地（銚子半島の東南部）は市域外となつてゐるが、古くから、それをも含めて銚子半島全體を銚子と呼びならはしてゐる。

銚子の海岸は古い地層の岩石が岬角となつて出入する間に、黑生浦・君ケ濱・酉明浦等の長濱を抱いて太平洋の波濤を迎へ、頗る風景美に富んでゐる。又半島の南は屏風ケ浦と稱する斷崖をなして海に臨み、奇勝として知られてゐる。

【水明樓】　スキメイロウ　旅館の名。

「青山白雲」中の「水國の秋」によれば、犬吠岬の南

方、酉明浦の邊に在つた旅館であるらしい。

〔樓〕（一）數層を重ねて高く造つた家。二階だて以上の建物。たかどの。重屋。（二）やぐら。ものみやぐら。城のやぐら。樓櫓。（三）旅館・料理屋等を業とする家。

【大東洋】ダイトウヤウ　こゝでは、大きな東の海、の意。

〔大東〕東のはて。極東。

【午前四時過にもやあらん】午前四時過頃でもあらうか。

〔も〕感動の助詞。

〔や〕疑問の助詞。

【燻りたる樺色】クスブりたるカバイロ　暗い樺色。くすんだ樺色。

〔燻る〕火煙にかゝつて色のくろくなること。

〔樺色〕「蒲色」とも書く。蒲の穂の色。赤みを帶びた黄色。かば。おちばいろ。

【孛藍色】プルシアン・ブルー　prussian-blue（英）濃い藍色。暗い藍色。

顏料としてのプルシアン・ブルーは紺青・ベルリン青・

ベレンス等ともいひ、青色顏料の一。フェロシアン化カリウム溶液に過量の第二鐵鹽溶液を加へる際に生ずる濃青色の沈澱。

【一痕の弦月】イッコンのゲンゲツ　一つのきづあとのやうな弦月。

〔痕〕（一）きづあと。（二）あと。あとかた。形跡。

〔弦月〕上弦又は下弦の月。ゆみはりづき。半月。彎月。

【黄金の弓】コガネのユミ　黄金で作つた弓。

まだ暗い空にかゝつてゐる弦月を譬へたのである。

【挂く】カく「掛く」に同じ。物を釘などでつり下げる。ひつかける。

【さやか】（一）さだか。はつきり。さや。明瞭。分明。（二）音聲のさえて聞えるさま。さはやか。こゝは（一）。

【東瀛を鎭する】トウエイをチンする　東方の大海をおさへしづめる。

〔瀛〕おほうみ。わたつみ。大海。

〔鎭す〕（一）重いもので上からおしつける。おさへる。（二）をさめる。しづめる。やすんずる。（三）おさへつける。おちつかせる。靜止させる。

【左手】ユンデ　「弓手」とも書く。（一）弓を持つ方の手。左の手。（二）左の方。（三）犬追物の時、犬を左に受けてその左を射ること。こゝは（二）。

【犬吠岬】イヌボウサキ　海上郡高神村に在る海岬。銚子半島の東岸の稍南方に於て、長方形をなして太平洋上に突出する岬で、餘脈は海中に伸びて暗礁をなす。海拔二五米。北は君ケ濱を隔てて海鹿島に、南は酉明浦を隔てて長崎鼻に對し、名高い燈臺の所在地である。又この岬の砂岩（銚子石）は建築用材として用ゐられ、石切場の設があるので、一名石切鼻とも呼ばれる。

【岬端】カフタン　みさきの突端。

〔岬〕（一）山のかたはら。（二）兩山の間。（三）國訓でミサキとよむ。山の海中に突出たもの。

【燈臺】トウダイ　航路標識の一種。主として夜間に於て

遠洋或は沿岸を航行する船舶に陸地の所在等を指示し、又は入港船舶に港口の位置等を知らしめる爲に、海上に突出する岬角等の上に設けられる燈塔。石・煉瓦・鐵・混凝土等（現在では多く鐵筋混凝土）で堅牢に建築せられ、外部は晝間の識別に便する爲に白・紅・黑等に塗裝する。最上部の燈籠室（側壁はガラス板）に照光器が裝置される。燈火材料は石油・アセチリン瓦斯・石炭瓦斯・揮發油等で、强力な白光を放つ爲に種々の火口が作られ、又現在では光力强大な電氣弧燈も用ゐられてゐる。

燈臺は、その燈質によつて不動燈（一定の明光を持續するもの）・閃光燈（一定の暗黑時を隔てて各種の短い明光を發するもの）・明暗燈（明光時が暗黑時と同長又はこれよりも長いもの）等に區別され、これ等の燈質は、光源そのものを明滅させるか、又は光源の周圍の裝置を回轉せしめることによつて生ぜしめられる。その外、著色ガラスによつて白光以外に紅・綠等の異色光を發せしめることもあり、要するに箇々の燈臺を直ちに判別し得るやうに工夫せられてある。尙、照明裝置としては特殊な折射ガラス

が用ゐられてゐるが、このレンズの焦點距離によつて燈臺の等級が一等から六等までに分たれる。

犬吠岬の燈臺は、白色圓形の煉瓦造で、高さ二七米（水面より五一米）、毎一五秒に一閃白光を發する一等燈臺で光源には電燈を用ゐ、光達距離は晴朗の夜に於て一九・五浬。霧笛信號裝置がある。明治七年十一月竣成。

【回轉燈】　クワイテントウ　回轉裝置を施した燈臺の照明燈。光源の外部の折射ガラス、又は特殊の裝置に成る透光板を一定週期を以て回轉せしめ、これによつて獨得の燈質を外部に表示するもの。

【連りに】　シキりに　「頻りに」とも書く。つゞけざまに。しげく。つゞけて。たび〳〵。しば〳〵。かさね〴〵。

【白光の環をゑがきぬ】　回轉につれて、一條の白閃光が四方を照らしめぐるさまをいつた。

〔環〕　クワン　（一）玉の輪。（二）輪の形をなすもの。

【曉風】　ゲウフウ　よあけの風。

【冷々として】　レイレイとして　ひや〳〵と。

〔冷々〕（一）清くすさまじいさま。ひやゝかなさま。清涼のさま。（二）音韻の清いさま。

【海原】　ウナバラ　ひろ〴〵とした海。おほうみ。滄海。

【掃ひ來り】　ハラひキタり　掃つて來て。撫でかすめて來て。

【夜の衣は東より次第に剝げて】　東の方から次第にほの〴〵と明るくなつてゆくさまをいつた。

〔夜の衣〕　ヨルのコロモ　萬物を掩ふ暗さを衣に譬へたのである。

【蒼白き曉の波を蹈みて】　青白い色の曉が、波の上を渡つて。

海上が遠い東の方から次第に明るくなつて來るさまを「曉」を主語にして擬人的にいつた。

【指點】　シテン　箇所を一々ゆびさして示すこと。指示。

【磯】　イソ　湖海のほとりの岩石のある所。湖海の波うちぎは。濱邊。

【眼】　メ

【白銀の弓】　シロガネのユミ　銀で作つた弓。

空があかるくなつて、光のうすれた弦月を譬へて、前の「黃金の弓」と對照的にいつたのである。

〔白銀〕（卷一、二一六頁を見よ）

【淼々】　ベウベウ　水面のはてしもなく廣いさま。淼茫。淼漫。

【腹は黑うして脊は蒼白く】（波の）下側面は黑くて上側面は青白く。

曉の光によつて生ずる波の明暗をいつた。

【夜の夢は猶海の上にさまよへど】　明けきらうとして明けきらず、夜の色がなほ海上に搖曳してゐるさまをいつた。

【東の空已に瞼を開きて】　東の空が既に明けはなれたさまを擬人化していつた。

〔瞼〕　マブタ　「目蓋」「眼瞼」とも書く。眼球の表面を覆つて開閉する皮。まなぶた。

【曙光】　ショクワウ　（一）あけぼののひかり。よあけのひかり。曉光。（二）暗黑の中にわづかに現れはじめる光明。善い物事の起りかゝるきざし。「平和の曙光」こゝは（一）。

【圈波】　ケンパ　しづかな水面に起る丸い波紋。

〔圈〕（一）檻。（二）さかづき又はぼんの類。（三）めぐる。（四）丸いもの。わ。圓形。

【われと薄れ行きて】　自分から色が薄くなつていつて。自然と薄くなつていつて。

〔われと〕（一）われみづから。わが心から。ひとりでに。おのづから。自然に。（二）みづから信じて。みづから重んじて。我こそはと。

【果は】　ハテは　果には。最後には。しまひには。をはりには。つひには。つまり。結局。結句。

【ありとも見えずなりぬ】　あるとは思はれぬやうになつた。非常にかすかになつてしまつた。

【渡り鳥】　ワタリドリ　（九〇頁を見よ）

【一列】　イチレツ　ひとならび。

【鳴きつれて】　鳴きつれだつて。多くの鳥がつれ立つて鳴いてゆくさまをいふ。

【掠めて過ぐれば】　かすつて飛び過ぎると。

〔掠む〕　カスむ　（一）盜む。（二）一部分を盜む。かすりとる。（三）目をくらます。どまかす。（四）ほのめかす。諷する。（五）わづかにさはる。かする。

【一種待つあるのさゞめき】　一種の期待にみちた、生氣のある、併しひそやかなさゞめき。

〔さゞめき〕　さゞめくこと。騷ぎたつこと。又、その音。

【聲なきの聲】　コエなきのコエ　物理的な音聲ではないが、周圍の情景などの爲に心理的には、あたかも耳に聽くが如く感じるひゞき。音のしない聲。無聲の聲。

【四方】　ヨモ

【見る〳〵】　見てゐるうちに。

【忽然】　コツゼン　にはかなさま。すみやかなさま。たちまち。はからず。突然。忽焉。忽爾。

【猩紅】　シャウコウ　極めて濃く鮮な紅色。鮮紅色。猩々緋。

【すはや】　「すは」に同じ。

〔すは〕　（感動）突然の出來事に驚いて發する聲。さあ。そら。

〔や〕　感動の助詞。

【息をもつかせず】　息もつかせないで。息をする暇さへもなく。

引きつゞいてすばやく現れるさまをいつた。

【海神が手もて擎ぐるまゝに】　海の神樣が手をもつて高くさしあげるにつれて。

朝日の昇るのを海中から海神が手でさしあげると見立てたのである。

〔海神〕　カイシン・カイジン（原文振假名）　海の神。わたつみの神。わたつみ。龍神。海若（かいにゃく）。

〔擎ぐ〕　ササグ　「さしあぐ」の約。兩手で高く擧げる。

【一搖して名殘なく水を離れつ】　ゆらりとゆらいですつかり水面を離れた。

〔つ〕　完了の助動詞。

【其の時遲く】　直ちに。間髪を容れずに。

【萬斛の金たら〳〵と昇る日より滴りて】

朝日が海を離れるとすぐその光線が海に輝き映るさまをいつた。

〔萬斛〕　バンコク　甚だ多くの分量。萬石。

〔斛〕　（一）量目の名、斗の十倍。（二）こくます。（三）ます。ますめ。（卷一、二九四頁「二百石の地」の項參照）

〔たら〳〵〕　（一）しづくなどの滴るさま。「汗たらたら」（二）好ましくないことを續けざまにするさまにいふ語。「小言たら〳〵」

【萬里一瞬】　バンリイッシュン　萬里もはるかな距離も目ばたき一つするうちに。

三　自然に對する五分時

〔一瞬〕　（一）ひとまたゝき。（二）一度またゝきする間。極めてわづかな間。一瞬間。瞬間。（三）ひと目に見わたすこと。一眸。

【忽焉】　コツエン　（一）にはかなさま。すみやかなさま。たちまちかはるさま。にはかに。たちまち。忽然。俄然。（二）うちすててとりあはぬさま。こゝは（一）。

〔焉〕　語調をとゝのへる無意味の助字。

【二丈ばかり黃金の雪を飛ばしぬ】

大濤が勢よく碎け、朝日を浴びて二丈ほど高く飛び散つたさまを「萬斛の金」を主語にしてその所爲のやうにいつた。

●

【相模灘】　サガミナダ　伊豆半島と房總半島との間、卽ち相模灣の沖合の海面をいふ。北は伊豆半島の基部に突出する眞鶴岬と三浦半島突端の城ケ島とを連ねる一線で相模灣に接し、東は三浦半島の劍崎と房總半島の洲ノ崎とを連ねる線で浦賀水道と境し、南は伊豆大島の線で劃ら

れた部分。

〔灘〕（一）タン・ダン　水淺く石が多くて舟行の危險な所。又水の迸り流れるさま。（二）ナダ（國訓）　陸から遠くて波の荒い海路。風波荒く航海の困難な海。

【落日】　ラクジツ　沈みかゝつた太陽。いりひ。ゆふひ。夕陽。落陽。落照。落暉。

【秋冬】　シウトウ　秋から冬に移る頃。

【凪ぎ】　ナギ　しづまつて。

〔凪ぐ〕　風がやんで波が平かになる。雨風がやむ。なぎる。「凪」は國字。

【伊豆】　イヅ　東海道十五國の一。現靜岡縣（伊豆・駿河）の一部の地で、二郡に分たれてゐる。

【落ちかゝりてより】　沈みかゝつてから。

【相豆の連山】　サウヅのレンザン　相模・伊豆の連なつた山々。こゝでは、伊豆半島の東側に連なる箱根（相模）・天城（伊豆）兩火山脈の諸峯をさす。

【白日】　ハクジツ　（一）てりかゞやく太陽。くもりなき日の光。太陽。日輪。日光。（二）まひる。ひるひなか。日中。白晝。（三）嫌疑がはれたこと等に譬へる語。「青天白日の身」　こゝは（一）。

【白光】　ハククワウ　（卷一、二二九頁「所謂白色」の項を見よ）

【爛々】　ランラン　光りかゞやくさま。鋭く光るさま。あきらかなさま。きら〳〵。つや〳〵。つやゝか。

【肌】　ハダ「膚」とも書く。（一）かは。うはかは。表皮。（二）はだへ。かはべ。しゝべ。皮膚。（三）きめ。膚理。こゝは、（一）ともとれるが、併し（二）で、山を擬人化したものであらう。

【金煙】　キンエン　金色のかすみ。

〔煙〕　（一）けむり。（二）かすみ、もやの類。（三）すゝ。

【濱】　ハマ　湖海に沿うた水際の平地。

【落日海に流れて】

落日の光線が海に細長く映つたさまをいつた。

【逗子】　ヅシ　現神奈川縣三浦郡逗子町。相模灣の東北隅に面し、帝都に近い別莊地・遊樂地として古くから知られてゐる。海水浴場として名高いその海岸（新宿ケ濱）は、北は大崎、南は鐙摺崎（鳴鶴崎）に劃られた弓形の小灣で、近く江ノ島を望み、遠く相豆の連山の上に高く富士の靈姿を仰ぎ、眺望の絶佳を稱へられてゐる。町の南端を流れる田越川を中心に、六代御前の墓をはじめ、鎌倉時代の遺跡が多い。

逗子の名は既に鎌倉時代に顯れ、もと田越村の一字であつたが、今は田越村全部の外に、葉山方面の別莊地をも含めて逗子町と稱せられてゐる。

【生簀の籠】　イケスのカゴ　籠生簀。竹製・球狀で大小種種ある。海岸地先で海面に浮かべて內に鰹釣餌の鰮を蓄へるものなどは、徑一五〇—一八〇糎、高さ二四〇—二七〇糎もあり、口部の周圍に木枠を附して使用する。養漁池等で鯉・鰻等を蓄へるものは、徑約八〇糎、高さ約四五糎で口部に重ね蓋を有する俗に遠州笊と稱するものを水面に浮かべて使用する。

〔生簀〕　「生洲」又は「活洲」とも書く。漁獲した魚を活かして置く場所又は器具。種類が多く、箱生簀・籠生簀・船生簀・網生簀・船內生簀等がある。

【赫焉】　カクエン　（一）赤いさま。（二）光明を發するさま。（三）あきらかに著しいさま。（四）いきほひの盛なさま。（五）怒を發するさま。こゝは（一）。

【大聖】　タイセイ　最も卓絶した聖人。德の最も高い聖人。「聖人」とは、智德の圓滿な完成を得た理想的な人格者。ひじり。支那では聖人を古代の堯・舜・禹・湯・文王・武王・周公・孔子等の稱とする。それに亞ぐのを賢人といひ、これを伊尹・太公（呂尙）・顏子・曾子・孟子等の稱とする。

【臨終】　リンジュウ「生命の終に臨む」の義。死にぎは。いまは。死期。最期。終焉。末期。臨死。往生。臨命終。

【侍する】　ジする

〔侍す〕　貴人の側に奉仕する。つき從ふ。奉事する。はんべる。はべる。さぶらふ。さむらふ。

【凡夫】　ボンプ・ボンブ　（一）なみ〳〵の男。たゞびと。

尋常の人。普通の人。凡人。(二)佛語。迷妄に終始して、未だ眞理を證驗するに至らないもの。悟の智慧が開けないで煩惱に支配されてゐるもの。衆生。(聖者の對。)

【靈光】　レイクワウ　不思議な光。靈妙不可思議な光。

【肉融け】　ニクトけ　肉體が融けて。肉體としての自己を忘失して。

〔肉〕　こゝでは、「靈」に對して、肉身、肉體、の意。

【靈】　(一)たましひ。(二)なきたま。幽靈。(三)神。鬼神。(四)不思議にたふといこと。(五)かうゞしくたふといこと。神聖。(六)威光。こゝは(一)。

【端然】　タンゼン　行儀作法の正しいさま。正しくとゝのつたさま。きちんと。

【永遠の濱】　エイエンのハマ　現實ならざる永遠の世界。

〔濱〕　こゝでは、世界、の意。海邊に因んでいつた。

【物あり】　モノあり

〔物〕　感情の對象になつてゐて、未だ知識化されてゐないもの。主體的な存在で、未だはつきりと客觀化されてゐないもの。

【融然】　ユウゼン　やはらぎとけるさま。氣分ののびやかなさま。

【喜と云はんは過ぎ、哀と云はんは未だ及ばず】　喜の中に哀があり、哀の中に喜があるやうな、喜とも哀ともいへない一種の感情狀態をかくいつたものであらう。漢の武帝の「歡樂極今哀情多」や、ワーズワースの "pleasant thoughts bring sad thoughts to the mind" の類。

【印度藍色】　インディゴ indigo(英)　帶銅赤色の青色。染料としてのインディゴは藍・青藍・藍靛・インド藍等ともいひ、青色染料の一。天然には木藍(印度產)・蓼藍(本邦內地產)・山藍(琉球產)・菘藍(支那產)等の葉部にインディカンなる配糖體として含有される。木綿等の植物性纖維及び絹・羊毛等の動物性纖維によく染著し、その用途は頗る廣い。

【舊に仍つて】　キウにヨつて　もとのまゝに隨つて。もとのまゝで。依然として。

【銜み初めぬ】　フクみソめぬ　くはへはじめた。半ばかくしはじめた。

〔銜む〕　口にくはへる。半ば外に出してくはへる。

【迫らず】　セマらず　急がずに。落ちついて。

【瘠せて】　ヤせて　細くなつて。

【蒼然として憂ふ】

暮色につゝまれたさまを擬人化していつた。

〔蒼然〕　サウゼン　(一)色のあを〳〵したさま。「萬木蒼然」(二)暮方のうすぐらいさま。「暮色蒼然」(三)色澤のふるびたさま。「古色蒼然」　こゝは(二)。

【餘光】　ヨクワウ　(一)あまりのひかり。一部分のひかり。ひかりの一端。あとに殘つたひかり。殘光。(二)おかげ。庇蔭。餘德。餘薰。餘慶。こゝは(一)。

【箭の如く】　ヤのゴトく　眞直に。

〔箭の如し〕　(一)急速なことの譬。(二)直くして曲らない譬。こゝは(二)。

【偉人】　イジン　すぐれて立派な人。偉大な性格を具へた人。大人物。

【遺孽】　ワスレガタミ・ヰゲツ　(一)父の死後生まれた妾腹の子。(二)後に殘つた賤しい血統の者。滅亡した者の子孫。餘孽。こゝは(二)。

〔孽〕　「孽」の正字。(一)庶子。(二)賤しい生まれの者。(三)わざはひ。

【明星】　ミャウジャウ　(一)「金星」の俗稱。拂曉又は暮方に見えるので、「曉の明星」又は「宵の明星」ともいふ。赤星。太白星。(二)萬人がその德を仰ぐ程の人を譬へていふ語。こゝは(一)。

插圖「犬吠岬の燈臺」　犬吠岬の北に連なる海濱(君ケ濱)から望む寫眞。

(A) **大海の出日**――太平洋に於ける日の出の壯觀。

(B) **相模灘の落日**――相模灘に於ける落日の莊嚴・平和。

2 **構想**

(A) **大海の出日**

(1) ほの暗い海上、一痕の弦月（初―二五ノ三）。

(2) 蒼白い曉の波、一列の鳥群（二五ノ四―二六ノ一一）。

(3) 海端に浮かび出た猩紅の一點、やがて眼下に飛ぶ黃金の雪（二七ノ一―終）。

(B) **相模灘の落日**

(1) 伊豆の山に落ちる日を望む平和感（初―二八ノ八）。

(2) 傾く日に照らされた山・海・濱・家・人と莊嚴・平和（二八ノ九―三〇ノ三）。

(3) 伊豆の山に落ちる日と餘光の美しさ（三〇ノ四―終）。

3 **敍述**

〔海上猶ほの暗く、波の音のみ高し〕――未明の海上がよく大觀せられてゐる。

〔こゝに一痕の弦月ありて、黃金の弓を挂く。光さやかにして、さながら東瀛を鎭するに似たり〕――未明の空がよくその焦點で把へられてゐる爲に、深く晴れた空と、そこにかゝつた弦月の海上を照らすさまがよく描出せられてゐる。

〔曉風冷々として靑黑き海原を掃ひ來り、……蒼白き曉の波を蹈みて此方へ〳〵と近寄る狀も指點すべく、云々〕――黎明を冷々たる曉風で敍し起したのも適切である。以下曉風のわたるにつれて起る變化が急所々々で描かれてゐる。

〔此の時、日の使とも覺しき渡り鳥の一列、鳴きつれて海原を掠めて過ぐれば、大瀛の波と云ふ波は盡く爪立ちて東の方を顧み、一種待つあるのさゞめき、――聲なきの聲、四方に滿つ〕――夜の寂寞の中に眠つてゐた波にもいよ〳〵目覺めの朝が來た、急に活動的に見え出して來た。さわめきが起つて來たやうに見えて來たのを「聲なきの聲」といふ言葉で現してゐる。この突發的な變化を折から連なり飛んで行つた渡り鳥の齎したものと見て、これを「日の使」といつてゐるのも實感的だ。

〔すはや、日出でぬ、と思ふ間もなし〕――精密な描寫の中にあつて、良く文章に生氣あらしめる一句である。

〔水を離るゝ其の時遲く、萬斛の金たら〳〵と昇る日より滴りて、萬里一瞬、此方を指して長蛇の如く大洋を走ると思へば、眼下の磯に忽焉として二丈ばかり黃金の雪を飛ばしぬ〕――息をもつがせぬ表現だ。力强い朝日子の昇天のさまを何人がこれ以上如實に描き得るであらうか。旭日昇天といふことよりも旭光天地に充つといふのがこの時の樣子であり實感であらう。それを實によく把へ、よく現し得てゐる。

〔秋冬風全く凪ぎ、天に一片の雲なき夕、立つて伊豆の山に落つる日を望むに、世に斯かる平和のまた多かる可しとも思はれず〕――平和を見、平和を感ずるのは、その人の心の平和なるが爲である。この平和な心境を以てこの平和な光景に對する。「世に斯かる平和のまた多かる可しとも思はれず」といふやうな詠歎が自然に發せられる所以である。

〔此の時濱に立つて望めば、落日海に流れて、吾が足下に到り、海上の舟は皆金光を放ち、……赫焉として燃えざるはなし〕――印象の鮮明な描寫である。殊にこの作者は色や光を鮮明に描くことにすぐれた力量を示してゐる。

〔莊嚴の極、平和の至、凡夫も靈光に包まれて、肉融け、靈獨り端然として永遠の濱に佇むを覺ゆ〕――主觀的な感想で

あるが、この天地の大觀を敍し來つて、そこに身を置く作者を思ふと、かくの如き感想が眞實性を以て讀者の心に迫つて來る。

〔物あり、融然として心に浸む。喜と云はんは過ぎ、哀と云はんは未だ及ばず〕――喜ともいへず、哀ともいへない一種の感情狀態が意識の上に存在する。しかもそれは物でもあれば心でもある。物と心との融け合つた一種の感銘に外ならぬのである。刹那に永遠があるといふのはかういふ刹那をいふのであらう。

〔伊豆の山已に落日を銜み初めぬ。……〕――いよ〳〵太陽は山に入り始めた。作者の眼は筆はいよ〳〵觀照の焦點となつて來た。山が落日を銜むといひ、別れ行く世を顧み勝にといふ、總べて巧みな擬人の手法である。

〔眼を上ぐれば、世界に日なし。光消えて、海も山も蒼然として憂ふ〕――太陽の沒するを見送り、率然として思はず顧望せざるを得ぬ。光の消えた世界といふものを今更の如く驚き見るのである。海も山も無韻の哀歌を奏するさまをいふのである。それも瞬時にして作者の眼は箭のやうな餘光に注がれる。偉人が太陽か、太陽が偉人か、ある嚴肅な宇宙の理法の前に頭を垂れてゐる敬虔な態度に打たれるものがある。

三　批評

太陽の出沒のさまを描寫することは、考へただけでもむづかしいことに思はれる。さういふ名篇・傑作は外にもあらうが、本篇の如き、誠に完璧を得たる感さへある。觀念に趨らず寫生に泥まず、鮮美にして深玄、平明にして餘韻あるものといへよう。

三　備考

一　指導の問題

生徒にとつては、始めて接する文語的現代文である。漢文調のまざつた雄健な調子に壓せられて、句や章の意味を明らかにすることを逸してはならない。特殊な文飾技法の爲に、誤解に陷るおそれがある。

作者は自然に對して特別の愛を持つ人であつた。殊に太陽の地球上に出る時と沒する時の光景にはいつも竝々ならぬ感懷を以て接したらしい。讀み味はふことによつて、この作者の胸底に參入せしめることが主眼でなければならぬ。

それにはどうしても、この作者特有の技法を讀み取らせることが必要である。作者の文の特色として、譬喩法が多い。そして自然的・實感的なものを譬喩の素材として著しい成功を收めてゐる。端的にその光景と實感とを披瀝すべく心掛けてゐる。**相模灘大海の出日**に於ては比較的に作者の感動は急迫してゐる。**の落日**に於ては、前文に比して回想的である。これを大聖の最期に比することによつて、沈痛・深遠な情懷を喚起してゐる。日の落ちた後、筆をつゞけて星を點出せしめたことは、いよ〳〵餘情を深め、回憶的な文にしてゐる。

二　參考資料

（一）作者が犬吠岬の水明樓に宿つたのは、十一月三・四・五の三日間であつて、「青山白雲」中の「水國の秋」はその前後の紀行である。今、「大海の出日」に書かれた光景を眺めた四日の記を左に引用する。

四日。波の音に雜る鷄聲に夢破れ、起きて縁側の戸少し開けば、海の面は猶ほの闇く、空には星爛々として下弦の月の光さやかなり。左手の方より時々白光のさし來るは、犬吠岬の燈臺の回轉するなり。已にして東の空少し朱黃色になりて、冷々としたる風の海面を撫づるまゝに、海は東より明けそめ、仰げば空の星は一つ〳〵消え、黃金の弓と見し月も今は白銀の光薄うなりつ。東の空は何時しか燃ゆるばかり朱紅色になり、見るが内に一分ばかり海を出づるものあり。眩ゆくして見る可からず。あゝ是れ日の海を出づるなり。眞に

瞬く間もなし。呀と云ふ間に、分より寸、眉よりして眼、鼻よりして口、今海を離るゝかと思へば一道の金ゆら〳〵と萬里の太平洋を馳りて、忽ち眼下の磯に到る頃は、吾居る室内赫と明くなりて、行燈の光白うなりぬ。顧みれば吾影黑く壁にうつりたり。銚子の日の出聞きしはしば〳〵、今初めて見るを得き。

小春日の海つきは殊に暖かにて、浴衣一枚にて磯を散歩するに略冷氣を覺えず。飯後濱傳ひに長崎浦に行く。五六十戸の漁戸皆おのおの圓き石を積み重ねて石垣を繞らし、低き屋根にも多く大石を載せたり。風の劇しきこと知る可し。石垣の絶え間より海青々と透きて、櫓榊魚籠なんど取り入れたる家の前に子供の遊ぶも、漁村の趣面白し。村中に小さき社あり、鳥居には鰯五六尾を下げたり。奉納の心にや。げにも鰯は總房の生命の親とも云ふべく、漁不漁は幾萬漁夫の存亡にも關するなれば、初漁の獲物を社に納めて祝ふも道理なり。村のはづれに、磯の岩間に湛へたる一泓の清水あり。村人は之を弘法水と呼びて、一村こゝに來り汲むなり。

長崎浦より五六町にして、五六百戸の漁村あり。外川浦と云ふ。蟹舍蠣屋、高低參差として、此あたりの繁昌地なり。海上に仙人窟の巖あり。地つゞきに犬若島あり。偶ま鰯の一群磯近く來りしとて、男女老幼爭うて擡網を持ちて海に入り、之を撈ふ。肥大尺に及ぶ。外川浦を過ぎて、海岸の山道十五六町行けば、名洗浦に出づ。漁家百に滿たぬ寒村なり。前には赫く禿げたる絶壁長く延びて海に出づ。此れ飯岡岬なり。此を回れば所謂九十九里濱なり。下浦水明樓に歸る。昨日銚子より宿の衣裳のまゝにて出でたれば、今日銚子の便に托して、勘定を濟まし、衣服等を取寄す。此地夏は繁昌すれども、今は淋し。夜は燈揭げて、古き雜誌など見つ。

（二）　綱島梁川の德冨蘆花評を「寸光錄」から左に引用する。

けふ、德冨蘆花氏の來訪に接した。君とは初對面である。予は、一見して未言相見醉の感があつた。實に稀に見る品藻の美くしい人だ、一言すれば、何となく予の好きな人だ。折から西田天香君も、京都より來合はせ、談はトルストイ翁に關する評論を中心として、それからそれへと枝が繁り、花が咲きて、約三時間の清興に、病の身にあるを忘れた。蘆花氏は、實に詩魂と敬虔魂との炎のゆらめき美くしい人とでも評すべき、懷かしく、慕はしい人である。けふは、實に感謝すべき一日であつた。

四　小春の岡

長塚節

一　解題

一　本文

「芋掘り」の初の部分と終の部分とを抄錄したものである。「芋掘り」は、明治四十一年三月に雜誌「ホトトギス」に發表された短篇小說で、平和な明るい自然を背景とした農村の素樸な人事を描いたもので、長塚節全集第二卷に收載されてゐる。尙、明治四十二年發行の茨城縣下妻中學校雜誌「爲櫻」に「寫生斷片」として寄稿した、本文と殆ど同じものが同全集第六卷に收められてゐる。（長塚節全集　全六卷、春陽堂發行）

二　作者

長塚節。歌人・小說家。明治十二年四月茨城縣結城郡岡田村國生に生まれ、大正四年二月九州帝國大學醫學部附屬病院に歿した。享年三十七。生來虛弱であつた爲、水戸中學中途退學、家に在つて農事を監督してゐたが、明治三十三年二十二歲で正岡子規の門に入り、和歌・俳句・寫生文を學んだ。子規の歿後、雜誌「馬酔木」の同人となり、作歌・歌論・寫生文等を發表し、又寫生文に立脚して小說を作つた。旅行を好み、農事の餘暇には各地を遍歷し、歌もそれによつて成つたものが多い。晚年には東洋古美術に感鳴するところがあり、歌の上にも「氣品」「冴え」といふやうな境地を說くやうになつた。歌風は、蒼古なる萬葉調を以て手堅い寫生をなし、線が細くて、澄み入つてゐるのがその特色である。殊に晚

年の傑作「鍼の如く」に於て、それを明らかにしてゐる。又、短歌以外の小說や寫生文も、纖細な描寫に終始して、彼一流の觀照を持してゐる。著作には「芋掘り」の外に、歌集「長塚節歌集」、歌論「萬葉集卷十四」「東歌餘談」「萬葉口舌」「寫生の歌に就いて」「枯桑漫筆」、短篇小說「開業醫」「おふさ」「敎師」「隣室の客」「太十と其犬」「炭燒の娘」、長篇小說「土」、寫生文「佐渡が島」「鉛筆日鈔」「彌彥山」「才丸行き」「須磨明石」等があり、それらは總べて長塚節全集に收められてゐる。

三　採擇の趣旨

小春の日に照らされた田園の自然と、そこに刻苦してゐる百姓の生活とを描いた文で、精緻な觀察と深刻な同情によつて成つた土の文學である。

この意味に於て、文藝的教材であると共に、又人間的教養に資すべき文化的教材でもある。

二　教材としての研究

一　註解

【小春】　コハル　陰曆十月の異稱。（この頃春のやうな暖な日和がある故にいふ。）せうしゆん。

【岡】　ヲカ　土地の小高い所。

【鬼怒川】　キヌガハ　利根川最大の支流で、那須火山に源を發して東流、男鹿・湯西の支流を北から受けて高原火山と日光山彙の間を南流し、中禪寺湖から流出する大谷川を併せて關東平野に出で、茨城縣相馬郡に入つて利根川に合流する。延長約一六〇粁。

古くは毛野川といひ、今、衣川・絹川とも書く。上流は水勢の急、溪谷の美を以て知られ、川俣・川治・鬼怒川等の溫泉、鬼怒川水力電氣の發電所があり、下流は平野の灌漑用としてのみならず、川船の上下頻繁で交通上にも裨益する所大である。

【街道】　カイダウ　（卷一、一九一頁「平和街道」の項を見よ）

【田圃】　タンボ　（卷一、二六〇頁を見よ）

【草家】　クサヤ　「草屋」とも書く。（一）草葺の家。わらや。（二）まぐさを貯へる所。こゝは（一）。

【ぽつ〳〵】　（卷一、一九七頁「ぽつり〳〵」の項を見よ）

【帚草】　ハハキグサ・ハウキグサ　ははきぎ（帚木）に同じ。まきくさ・にはくさともいふ。藜科、ははきぎ屬の一年生草本。高さ一―一・五米、全株無毛（又は細毛散生）で、多數の枝を分ち、線狀披針形で鋭頭の全邊葉を互生する。雌雄二家で、夏日、葉腋に綠黃色の小花（雄花或は雌花）二三を著け、花後胞果を結ぶ。ヨーロッパの原產で、我が國の園圃に栽培せられ、莖を乾して庭帚に作る。又嫩葉は食用にも供する。

【欅】　ケヤキ　楡科、けやき屬の落葉喬木。高さ三〇米、徑二・五米以上にも達し、上部に多くの枝を分つ。樹皮は帶綠暗紅褐色で粗糙。葉は短柄で互生し、卵狀長楕圓形又は披針形をなして鋭く尖り、緣邊に齒牙狀の鋭鋸齒を有する。雌雄雜家で、四五月頃、聚繖花序（或は單立）の雄花と、單立の兩性花とを、それ〴〵新條の下部又は上部に腋出し、十月頃不齊扁球形の小核果を結ぶ。花は淡綠、果は灰黑色。本州・四國・九州その他の山野に廣く分布し、材は堅硬で狂ひが少く且木理が美しいので、家具・建築・船艦等の材料として重用せられる。

【すく〳〵】　（一）滯なく捗つてゆく、又は速に進んでゆくさま。すら〳〵。ずん〳〵。（二）いくつも眞直に發生・生長したさま。こゝは（二）。

【突つたつて】　ツつたつて

〔突つたつ〕「つきたつ」の音便。（一）まつすぐに立つ。（二）勢よく立上る。こゝは（一）。

【掛稻】　カケイネ　「懸稻」とも書く。（一）昔、初穗として、青竹に懸けて神に奉つた稻束。懸稅。懸久眞。（二）

刈つて束にし、倒に竹に懸けて干してある稻。こゝは（二）。

【をだ】　刈り取つた稻を掛け竝べて乾燥させる裝置。稻懸。稻架。稻木。はさ。

木又は竹を地面に立て、又は立木等を利用して、これに横木をわたし、稻束を竝べて挾み掛けにする。高く數段重ねて掛けるのもある。（教科書三四頁の插圖參照）

【黄昏】　タソガレ　（卷一、一九頁を見よ）

【鴫】　シギ　（「鴫」は國字。）　鷸とも書く。鷸目、鷸科に屬する大部分の鳥の總稱。中・小形の涉禽で、羽色は一般に地味、嘴は多くは長直。翼は長く大群をなして遠距離を移動するに耐へ、脚はよく發達して沼澤・河邊その他の水濕地を巧みに步行する。多く北地に蕃殖し、春秋の渡りの時我が國を通過し又は我が國で越冬する。種類は極めて多く、普通しぎ類とたしぎ類とに大別される。併し我が國で古來「しぎ」と呼ばれるのは主に後者で、たしぎ類に「鴫」を、他のしぎ類に「鷸」を當てて區別する人もある。（九七頁「鷸」の項參照）

たしぎ類は主に水田や澤等に棲み、最良の獵鳥とされてゐる。頭は角形で眼は著しく後方に位し、嘴は極めて長く眞直で且柔軟。地色は背面は黑褐・赤褐等、腹面は白色で、これに種々の斑紋を散布し、眼を過つて黑・褐等の斑條がある。たしぎ・やましぎ・おほぢしぎ・たましぎ・あをしぎ等がこれに屬する。我が國內地では秋飛來して春去り、各地に普通に見られる。

【篠】　シノ　竹の、小さく細く叢生するものの總稱。めだけ・やだけ等の類。篠竹。篠笹。さゝ。

「めだけ」（雌竹）は、禾本科、めだけ屬の多年生植物。莖（桿）は直生し高さ六米內外。結節上に枝條を簇生して披針形・短柄の常綠葉をつける。花は通常生じないが、時に淡綠色の穎花を圓錐花序に綴る。本州中南部・四國等の林野に自生し、桿は釣竿その他の竹材となる。異名—しのだけ・にがだけ・かはたけ。

「やだけ」（箭竹）は、禾本科、やだけ屬の多年生植物。

大體めだけに類するが節間が長く結節が低い。高さ四米內外。每節一枝條を出し小枝を分つて葉をつける。本州・四國・九州に產し、桿は弓の矢などに用ゐられる。異名—しのべ・やじの。

【尖】　サキ

【しかも】　その上にも。ことに。

【しら〳〵】　（一）いかにも白いさま。しろ〳〵。（二）そしらぬさま。（三）興のさめたさま。こゝは（一）。

【高瀨舟】　タカセブネ　川船の一種。古くは船體が小さくて底深く、後世のは大船で高瀨（淺瀨）をも漕ぎゆけるやうに底を平たく淺くしてある。たかせ。

【筑波山】　ツクバサン　茨城縣の筑波・眞壁・新治三郡に跨がる山。海拔八七六米。關東平野の中央よりやゝ東北に偏して、所謂筑波山塊（雨引・加波・筑波の諸山を含む）の盡きようとする所に兀立するので、到る處からその姿を望むことが出來る。山の下部は花崗岩より成り、これを貫ぬく斑糲岩がその上に女體・男體の二峯を形成して特殊の山容を與へると共に、全山森林に蔽はれて綠葉・紅葉の美觀に富み、山上は四望闊大で、山河襟帶の大觀を恣にし得る。女體山（東）は男體山（西）よりもやゝ高く、前者の頂上には伊弉冊尊を祀る女體祠、後者のそれには伊弉諾尊を祀る男體祠及び中央氣象臺附屬測候所があり、兩峯中央の鞍部（御幸原）からは水無川（一に男女川に作る）がその源を發してゐる。又山腹には筑波町があり、その上方に在る縣社筑波神社（女體祠・男體祠はその境內の院）及び中禪寺は共に往古から聞えてゐる。尙、その山色は、朝は藍、晝は綠、夕は紫といひ傳へられ、殊に紫のそれが最も賞美せられるので、筑波山を一に紫山といふ。

筑波は古來關東の名山として謳はれ、近年は筑波鐵道及び登山鋼索鐵道（筑波神社より御幸原に至る）の設置と共に、東京から一日行程の遊覽地として四時訪客が絕えない。又、山麓から山頂に至る間に於ては、暖帶林から濫帶林に互る林相の變化がよく觀察され、且まうせんごけ・つくばね等異色ある植物が多く、植物學上の研究資料が頗

る豐富である。

【一脚を張り】　イッキャクをハり　一方の山脚をつきひろげ。片一方の麓をのばしひらいて。

〔脚〕　(一)あし。すね。膝の下。(二)物の下部。「山脚」(三)足に似た部分。又足があつて歩くやうに見えるもの。「雲脚」(四)たちば。身の置きどころ。地位。「失脚」。

【常磐木の部分】

筑波の山麓には樫(常綠樹)が多く、漸く登れば樫と樅(常綠樹)の混淆林となり、樅の林の保護の下に山毛欅(落葉樹)と樫とが相接して生じ、海拔七五〇米に到れば、樅は終を告げて山毛欅の單純林となる。隨つて常綠樹の部分といへば、大體に於て全山の六分の五乃至五分の四以下と見てよからう。

〔常磐木〕　トキハギ　四時落葉せずに綠色を保つ樹木。常綠樹。(二八頁「落葉樹」の項參照)

【赭く焦げた】　アカくコげた　赤く火に燒けた。

樹木が落葉して山肌があらはに見えるさまをいつた。

〔赭〕　(一)あかつち。(二)あかい。(三)轉じて、はげやま。

【觀測所】　クワンソクジョ　主として天象・地象・氣象等を常時觀察して測定を記錄し、調査・研究の資とする爲に設置された機關。氣象臺・天文臺・測候所・地震觀測所・火山觀測所・溫泉觀測所・檢潮所・海洋觀測所・緯度觀測所等がこれに屬する。こゝでは、男體山の頂に在つた山嶽氣象觀測所。

筑波山の觀測所は、故山階宮菊麿王殿下が氣象學御研究の爲、明治三十四年に御設立になつたもので、當時は山階宮筑波山觀測所と稱せられた。四十一年四月殿下御薨去の後文部省に御寄贈になり、四十二年四月から中央氣象臺附屬筑波山測候所と改稱、昭和四年三月改築が行はれて現在の廳舍が出來た。殿下御經營當時の風力塔その他は記念として保存せられてあり、我が國最古の山嶽氣象觀測所として名高い。

【ぽつちり】　こゝでは、點・穴などの、一つ在るさま。ぽつん。ぽつり。

【やゝ不透明な空氣は、針の尖でつゝくやうに云々】

晴れてはゐるが、水蒸氣を含んで、不透明な空氣の爲に全體が少しぼんやりしてゐる。その爲に殊更觀測所のぽつちりと點をうつたやうな白さが鮮明に鋭く眼に見えるのであらう。

【際立つて】　キハダつて　殊にめだつて。一際はつきりと。

【びつしり】　物の一面についてあるさま。びし〳〵。

【赭い葉】　アカいハ　赤黃色にいろづいた葉。

【兩毛の山々】　栃木・群馬兩縣の地方に連亙する山々、即ち、那須・日光・足尾の連山及び赤城・榛名・妙義等の諸山をさす。

〔兩毛〕　リャウマウ　下野國(現栃木縣の地)と上野國(現群馬縣の地)とを一括して呼ぶ稱。この兩國は、初め毛野國(けぬのくに)と呼ぶ一國であつたのを、仁德天皇の御代に東西に分つて下毛野(しもつけぬ)(東)・上毛野(かみつけぬ)(西)の二國とされたが、元明天皇の御代國名を二字と定められるに及んで「毛」を省いて下野・上野と書き、更に訛つて「しもつけ」「かうつけ」と讀むに至つたもので、兩毛・上毛などの稱もこれに由來する。

【綠青】　ロクシャウ　(一)銅を空氣中に放置する時、漸次空氣中の水分と炭酸瓦斯とが働いて生ずる綠色・有毒の錆。(二)青色顏料の一。有毒である爲、船底染料としてのみ用ゐられる。こゝは(一)。

【うなつて】

〔うなふ〕　「畝(うね)」を活用した語。鋤や鍬で田畠の土を掘り起して畝をつくる。

【芋】　イモ　植物の地下部(地下莖又は根部)が澱粉その他の養分を多量に貯へ肥大して塊狀をなしたもの(但し大根・蘿等の如く主根の肥大したものではない)、又、これを有する植物(多くは多年生草本)の總稱。天南星科(てんなんしやう)のさといも・やつがしら、旋花科(あさがほ)のさつまいも、茄科のじやがたらいも、薯蕷科(やまのいも)のやまのいも・ながいも・

つくねいも等はその代表的なものであるが、こゝは、さといもであらう。

「さといも」（里芋）は、一名はたけいも・いへついも。天南星科、さといも屬の多年生草本で、高さ一・三米内外。地下に塊狀・多肉の球莖を有し、これより大形・箭形の葉を叢生する。葉柄は長く肥大し、基部は互に抱合する。通常は花を出さないが、時に夏日、大形・黃白色の佛燄苞に包まれた肉穗花序を出す。（雌雄一家で、雄花は上部に、雌花は下部に集る。）球莖（親芋）はほゞ卵形で、周圍に多數の長卵形小球莖（子芋）が附著し、肉は白色・粘質で澱粉に富む。球莖及び葉柄は食用に供せられる。熱帶（印度地方）の原產で、古くから我が國にも栽植せられ、やつがしら・めあか・たうのいも等、種々の變種・品種がある。

【茶の木】　チャのキ　ちや。山茶（つばき）科、ちや屬の常綠灌木。高さ二米内外。葉は革質で厚く光澤があり、楕圓狀乃至倒卵狀披針形で緣邊に鋸齒を有し、短柄・互生。秋日葉腋に有柄の白色五瓣花を下垂して著け、花後扁圓鈍三角形の蒴果を結ぶ。支那の原產で、南九州・臺灣にも自生し、古來我が國の各地に栽培せられて、春期嫩葉から綠茶・紅茶を製する。異名―さうじんぼく・さうにんぼく・めざましぐさ。

ほそばちや・べにばなちや等の栽植變種があり、又類種としては南九州に自生するたうちや（にがちや）が知られ、廣義にはこれ等を總稱して茶の木といふ。

【退屈まぎれに】　退屈なあまりに。退屈をまぎらす爲に。

〔退屈〕　タイクツ　（一）倦みあくこと。倦み怠ること。（二）ひまで苦しむこと。無聊。

【轡】　クツワ　馬の口につける道具で、馬銜（くつばま）・鏡・引手の三部から成る。馬の口中に含（くく）ませた馬銜の兩端卽ち左右の口邊に鏡があたり、鏡には引手がついてゐて、それに手綱が連絡するのである。但し轡の字義は手綱である。

【極めつけて】　こゝでは、やつつけて、といふほどの意。

〔極めつける〕　手强く叱る。叱りつける。

〔極める〕　キめる　（一）決める。（二）叱る。（三）「行ふ」の俗語。

【叱りとばす】　荒々しく叱る。

【手もとは忙しい】　仕事をしてゐる手は忙しい。手は忙しく働いてゐる。

〔手もと〕　手許・手元　（一）てぢかい所。手の屆く程どの所。（二）物を握り持ち、又は仕事をなしつゝある手。（三）「手本金」の略。手もとに貯へ置く金錢。（四）物を取扱ふ手つき。てなみ。うでまへ。

【長閑】　ノドカ　（一）平和なさま。靜かなさま。ゆつたりしたさま。のんびりしたさま。（二）空が靜かに晴れて、うらゝかなさま。のどやかなさま。こゝは（一）。

【おり口】　おりクチ　おりはじめのところ。

【小麥】　コムギ　まむぎともいふ。禾本科、こむぎ屬の一二年生草本。莖（稈）は强剛で圓筒形をなし、高さ約一米。葉は、線狀披針形で緣邊糙澁なる葉身と、多脈・無毛の葉鞘より成り、その間に小舌を有する。五月頃、大麥より稍遲れて花莖を抽き、小形の穎花を長さ八乃至一二糎の穗狀花序をなして排列する。果實は楕圓形の穎果で、腹面に溝を有する。イラン（ペルシャ）の原產で、世界各地に栽植せられ、歐米に於ては穀物の首位を占める。製粉して麪麭・麪類・菓子等を製する外、醬油や味噌の原料とする。

【二畦】　フクウネ

〔畦〕「畝」とも書く。（一）田畠の中に、土を堆く盛り上げて長くつゞけ、物を植ゑつける所。（二）波のうねり。こゝは（一）。

【芋の莖】　さといもの葉柄をさす。さといもの葉は地下の球莖から直ちに生じてゐて、所謂莖（地上莖）の部分はないのであるが、葉柄が長く伸びて莖に類するので、普通にはこれを莖といふ。

【べつたりと茹でたやうである】

芋の莖が霜の爲に弱つて柔かくなつたさまをいつた。

〔べつたり〕（一）ひらたくなるさま。（二）ねばりつく

さま。

【株】　カブ　(一)木を伐り又は草を刈つた跡に殘る幹莖の下部及び根部。くひぜ。きりかぶ。(二)草木を根で數へるにいふ語。こゝは(一)。

【突きたてて】　さしこんで。つきこんで。

【ほぐれて】　解れて　解けてばら〳〵になつて。

〔ほぐれる〕(自動・下一)　解け放れる。解ける。ほつれる。

【こゞつた】　凝り固まつた。寄り集つた。

〔こゞる〕　凝る　こほつて固くなる。凝結する。

【子芋】　コイモ　親芋に附いた小さい芋。芋の子。(六五頁「芋」の項參照)

通常靑芋と呼ばれるもの(最も普通に栽培されるもので、狹義にはこれを里芋といふ。)は、子芋の數が極めて多くその發達も頗る良好で、專ら子芋を食用に供するが、たうのいも・やつがしら等は、子芋の數が少く親芋のみが食用に供せられる。

【ぞろつと】　「ぞろり/と」「ぞろ〳〵と」に同じ。多く連れ立つさま。こゝでは、多く簇つてゐるさま。

【ならして】

〔ならす〕　均す・平す　(一)たひらかにする。高低・凹凸のないやうにする。(二)大小・多少を合してその中を取る。平均する。こゝは(一)。

【棚引いた】　タナビいた

〔棚引く〕「靡く」とも書く。うすく横に長く靡く。雲・霞・煙などについていふ語。

語源については、大言海に「棚引く義カ、起ち靡くノ略カ、或ハ云フ、たハ發語ナリト」とある。

【眞逆樣】　マッサカサマ　「眞倒樣」とも書く。高所からさかさまに落ちるさまにいふ語。全くのさかさま。まつさかさ。

〔眞〕　マ　(接頭)　名詞・副詞又は形容詞の語幹に冠して、眞實・正確・純粹の意を表す。

下に來る語の首音の影響によつて「まつ」「まん」となることがある。「眞白」「眞中」

【麥の葉をかすつて】　麥の葉に輕く觸れて。麥の葉をほのかに明るくして。

〔かする〕　(一)輕く觸れる。すれて過ぎる。さはる。(二)文字をかすり墨に書く。(三)一部分をかすめる。(四)うはまへをはねる。こゝは(一)。

【一しきり】　一頻り　一時盛なこと。一時頻ること。ひとさかり。ひときり。一時。

【晩稻】　オクテ　稻の最もおくれて熟するもの。(早稻(わせ)・中稻(なかて)の對。)

【形容】　ケイヨウ　(一)なりかたち。すがた。樣子。ありさま。(二)物事の形狀・狀態をかたどつて言表すこと。こゝは(二)。

【殘曛】　ザンクン　夕日の光。殘照。夕曛。斜曛。

〔曛〕　(一)夕日の光。日の餘光。(二)たそがれどき。

【晩餐】　バンサン　ゆふはん。ゆふめし。ばんめし。夜食。

〔餐〕　(一)のむ。のみくらふ。(二)のみもの。くひもの。(三)ゆふめし。

【頰白】　ホホジロ　畫眉鳥とも書く。燕雀目、雀科、ほほじろ屬の小禽。頭上は栗褐色、背は栗赤色に黑軸斑を有し、翼及び尾羽は黑褐色に栗赤又は白色の羽毛を交へ、顏の主部は黑褐色で嘴の基部から眼の上下に亙りそれぞれ顯著な太い白條がある。下面は、上部は灰白色で他は淡黃又は淡褐。嘴は鉛黑、脚は黃褐色。雌は顏部に明瞭なる黑白斑を缺く。我が國特有の種で、千島から臺灣に至るまで廣く分布し、特殊の甲高い囀聲(「一番囀上」と稱るると傳稱される)を發する。獵鳥又は籠鳥として重んぜられる。

【頓著】　トンヂャク　(卷一、一五三頁を見よ)

【せつせと】　いそがしく。たえまなく。よくつとめて。せつせつと。

【夜の手】　ヨルのテ　夜の闇黑。

夜を擬人化していつた。

挿圖「筑波山」　西南方筑波郡方面から見た筑波山。高く見えるのは男體、右の峯は女體。

【鬼怒川をの歌】　鬼怒川をこの夜ふけにわたす船の水棹の音が遠く聞える、あゝ秋もすつかり深くなつてしまつたなあ。

長塚節歌集、明治四十一年秋雜詠八首の中にある。

〔わたす〕　渡す　こゝでは、水面を船で對岸に達せしめる、の意。

〔水棹〕　ミナサヲ（ミヅサヲ・ミサヲと讀む場合もある。）舟を漕ぐに用ゐる長い竹竿。淺い川や港で水中にさして船を動かし、常には筈を掛けなどするに用ゐる棹。

〔たく〕　闌く（卷一、一二三頁「闌けて」の項を見よ）

〔にけり〕　完了の助動詞「ぬ」の連用形に詠歎の助動詞「けり」を重ねたもの。

【芋殼をの歌】　壁に芋殼を吊したところ、その芋殼に、陽がかげつたかと思ふとまたさし、そのさした趣が如何にも微妙である。

長塚節歌集、明治四十年晩秋雜詠十八首の中にある。

〔芋殼〕　イモガラ　一般には「芋幹」「芋莖」と書く。さといも類の莖（葉柄）を乾かしたもの。貯藏に堪へ、煮物又は汁の實等に用ゐる。

〔かげる〕　陰る・蔭る　（一）陰になる。曇る。（二）日が傾く。薄暮となる。

二　解釋

1　主題

小春の岡とそこの畑の芋掘りの人々。

2　構想

(1)　岡の畑とその周圍（初―三五ノ七）。

イ　岡の畑。

ロ　周圍の田・鬼怒川の土手・櫟林。

(2)　岡の畑の芋掘りの人々（三五ノ八―三九ノ四）。

イ　畫の畑。

ロ　芋掘り。

(3)　夕暮から夜にかけての岡の畑（三九ノ五―終）。

イ　夕暮の畑。

ロ　夜の手に掩はれた天地。

3　敍述

〔小春の日光は岡の畑いつぱいにさしてゐる〕――本文の主要部を構成してゐる(1)(2)の全般を蔽ふ基調を成す一章である。そして(1)の終に近い「岡の畑は朗かに晴れてゐる」や、(2)のイ「岡はたゞ長閑である」は、この章との照應によつて、その季節とその季節特有な日光とを想起させてゐる。

〔鬼怒川の土手には篠がいつぱいに繁つてゐるので、近くの水は其の陰に隱れて見えぬ。上る白帆は篠の尖に半分だけ見えて、しかも大きい。土手の篠を越えて水がしら〳〵と見えるあたりは、もう遙の上流である。だから、篠の尖を離れて高瀬舟の全形が見える頃は、白帆は遙に小さく縮まつてゐる〕――寫生の精緻、わけても遠近法の的確さに於て目を瞠らせるものがある。これを近景として、鬼怒川沿岸の一地點が一幅の繪畫として眼前に浮かんで來る。

〔こんな周圍の中に、岡の畑は朗かに晴れてゐる。土は乾き切つてゐる。既に二三寸に延びた麥は、岡いつぱいに薄く綠青を塗つたやうである〕――丹念に周圍を敍した後で、畑そのものの描寫に歸つてゐる用意が注意せられる。

〔そこにもこゝにも百姓が小さく動いてゐる〕――芋掘りを描かうとして、まづこの大觀を試みてゐるのである。

〔畑の緣には馬が茶の木に繫いであつて、俵が轉がつてゐる〕――何でもないことのやうであるが、そこの全景を具象化する作用がある。

〔馬は退屈まぎれに、茶の木をむしることがある。其の時一人が驅けて來て、轡をがちんと一つ極めつけて叱りとばすと、またおとなしくなつて、ばさり〳〵と尾を動かしてゐる〕――畑につながれた馬の姿が如實に寫されてゐると共に、あたりの長閑さを象徵してゐる。

〔みんなの手もとは忙しい。しかし岡はたゞ長閑である。日は稍傾いた〕――寸分の隙もない手法である。直前に退屈さうな馬を描いて岡の長閑さを示した文を承けて「みんなの手もとは」と、忙しさを强調し、「岡はたゞ」と、その長閑さを一層徹しさせた後、「日は稍傾いた」といふ時間的推移を直敍して、その長閑さと忙しさの對照に時間的經過を有たせてゐる。寫生が細部に精しいと思つてゐると、かくの如き大局の大觀に出る。そして更に、「忽然として筑波山の絕頂から眩しい光がきら〳〵とさして來た」といふやうな新しい光景を展開させる。

〔女は芋の莖を菜刀でもとから切つて先へ出る〕――この「先へ出る」は、芋の莖の連續した畑を、仕事の堆積を、勞働を通して直接的に表現してゐる言葉である。

〔ぐつと鍬を持ちあげると、大きな土の塊がふはりと浮きあがる〕――この「浮きあがる」にも勞働の經驗がしみ出てゐるやうに、感じられる。外からの觀察のみでいへる言葉ではない。

〔掘つてある大きな土の塊を兩手で二尺ばかりあげて、どさりと打ちつける。こまかな土がほぐれて、こゞつた子芋の塊から白い毛のやうな根がぞろつとあらはれる〕――作業の方法と光景とが的確に描寫せられてゐる。

〔やがて俵を立てて入れる〕――「俵を立てて」は、これ亦傍觀的寫生の企て及ばない所の一つと思はれる。

〔日が落ちて殘曛がなほ明らかな數十分間は、彼等の仕事が最も捗どる時である〕――秋の末、夕日のさし加減で特に美しい紫を染め出す筑波山をも知らないで、迫りくる夕闇に追ひつかれまいと、只管、その仕事にのみ沒頭するからに外ならぬ。

〔村の竹藪から昇つた青い煙は、畑の百姓を迎へにでも出たやうに幾筋も棚引いて、田圃から岡まで屆かうとしてゐる〕――つい今しがたまで畑に働いてゐた女等が、家に歸つて立てた煙である。劇しい勞働の後の休息が用意せられてゐるのである。

〔百姓の後姿を村の中へ押込んで、やがて夜の手は、田圃から、畑から、次第に天地の間を掩うた〕――不可抗な時の威力が、勤勉な百姓の手にその一刻をも侵されまいとするかのやうに、夜の翼を伸ばして來る。百姓は默々として家路につく。自然の美しさにも目をくれず、如何なる事件にも心を奪はれず、必死の勞働を續けて來た彼等も、この不可抗な夜の手によつて完全に岡の畑から驅逐せられたのである。百姓の上に及す夜の手の威力がよく把へられてゐる。

三　批評

小春の日光に照らされた岡の畑の長閑さと、あたりの何ものにも關心をかけてゐる暇のないほど勞働に沒頭しきつてゐる百姓の生活とを如實に描寫してゐる。もと小說の一部分であつたものが、作者によつて、寫生文の一例として取出されたものであるだけに、部分的完成があるほどには、全篇としての結構が纏つてゐないかに見える。

單なる岡の畑の寫生でもなく、芋掘り勞働の描寫でもない。又人生の背景としての自然を描いたものでもなければ、自然の點景としての人生を寫したものでもない。もと現實的な自然と人生との交渉の一斷面を描いてゐる所に、この篇の特色が存する。

三　備　考

一　指導の問題

（一）自然觀察の精緻と生活觀察の深刻とが本課學習の眼目でなくてはならぬ。併し恐らくどの生徒も、自然觀察の精緻さの故に、又生活觀察の深刻さの故に、この文を面白くなく、ぎごちないものに感じるであらう。が、それは一讀か二讀の際の感銘に過ぎないもので、この文の決定的な價値判斷ではあり得ない。そこに指導の苦心が要せられる。

更にいへば、作者の自然觀察の精緻さとその價値を發見し得る生徒はあつても、そこに織込んである生活觀察の深刻さとその意義を理解し得る生徒は極めて乏しいであらう。この文は、芋掘りの人々を通して、土に働く百姓の生活が深刻に描かれてゐる點に、その中心的意義が係つてゐるのだから、生徒自身の讀書力で、どこまで理解を進め得るかを的確に看取した上に、その學習の方向を正しく指導しなくてはならぬであらう。

（二）百姓の勞働がどんなに餘裕のない深刻なものであるかを示してゐる主な箇所は、次の章句の前後であらう。

みんなの手もとは忙しい（三六ノ六）。

芋掘りの人々は勿論此の光は知らなかつた（三七ノ三）。

百姓に聞いてみれば、嘗てそんな筑波山は知らぬといふ。知らぬといふのは尤のことである。日が落ちて殘照がたほ明らかな數十分間は、彼等の仕事が最も捗どる時である（四〇ノ一）。

頬白が淋しさうに桑の枝を飛びめぐる。百姓はそんな事には頓著なしに、せつせと芋を俵につめる（四〇ノ八）。

（三）この作者は精緻な寫生の手段に擬態語・擬聲語を多く用ゐてゐる。

ぽつ〳〵。すく〳〵。ぽつちり。びつしり。ぼんやり。がちん。ばさり〳〵。きら〳〵。べつたり。ぴか〳〵。ざくつ。ぐつと。ふはり。そつと。どさり。ぞろつと。ぶり〳〵。せつせ。きゝ。

二　參考資料

作者の作風に關する夏目漱石の批評を、「土」の序から引用する。

余は「彼岸過迄」を片付けるや否や前約を踏んで「土」の校正刷を讀み出した。思つたよりも長篇なので、前後半日と中一日を丸潰しにして漸く業を卒へて考へて見ると、中々骨の折れた作物である。余は元來が安價な人間であるから、大抵の人のものを見ると、すぐ感心したがる癖があるが、此「土」に於ても全くさうであつた。先づ何よりも先に、是は到底余に書けるものでないと思つた。次に今の文壇で長塚君を除いたら誰が書けるだらうと物色して見た。すると矢張誰にも書けさうにないといふ結論に達した。

尤も誰にも書けないと云ふのは、文を遣る技倆の點や、人間を活躍させる天賦の力を指すのではない。もし夫れ丈の意味で誰も長塚君に及ばないといふなら、一方では他の作家を侮辱した言葉にもなり、又一方では長塚君を擯ぎ過ぎる策略とも取れて、何方にしても作者の迷惑になる計である。余の誰も及ばないといふのは、作物中に書いてある事件なり天然なりが、まだ長塚君以外の人の研究に上つてゐないといふ意味なのである。

「土」の中に出て來る人物は、最も貧しい百姓である。教育もなければ品格もなければ、たゞ土の上に生み付けられて、土と共に生長した虹同樣に憐れな百姓の生活である。先祖以來茨城の結城郡に居を移した地方の豪族として、多數の小作人を使用する長塚君は、彼等の獸類に近き、恐るべく困憊を極めた生活狀態を、一から十迄誠實に此「土」の中に收め盡したのである。彼等の下卑で、淺薄で、

迷信が強くて、無邪氣で、狡猾で、無欲で、強欲で、殆んど余等（今の文壇の作家を悉く含む）の想像にさへ上りがたい所を、ありありと眼に映るやうに描寫したのが「土」である。さうして「土」は長塚君以外に何人も手を著けられ得ない、苦しい百姓生活の、最も獸類に接近した部分を、精細に直敍したものであるから、誰も及ばないと云ふのである。

人事を離れた天然に就いても、前同樣の批評を如何な讀者も容易に肯はなければ濟まぬ程、作者は鬼怒川沿岸の景色や、空や、春や、秋や、雪や風を細密に研究してゐる。畠のもの、畔に立つ榛の木、蛙の聲、鳥の音、苟くも彼の鄕土に存在する自然なら、一點一畫の微に至る玆悉く其地方の特色を具へて敍述の筆に上つてゐる。だから何處に何う出て來ても必ず獨特（ユニーク）である。其獨特（ユニーク）な點を、普通の作家の手に成つた自然の描寫の平凡なのに比べて、余は誰も及ばないといふのである。余は彼の獨特（ユニーク）なのに敬服しながら、そのあまりに精細過ぎて、話の筋を往々にして殺して仕舞ふ失敗を歎じた位、彼は精緻な自然の觀察者である。

五　落葉

島崎藤村

一　解題

一　本文

「千曲川のスケツチ」の七「落葉の一」「落葉の二」「落葉の三」の全文である。「千曲川のスケツチ」は作者が舊師木村熊次氏の招きにより、明治三十二年に小諸義塾に赴任して後、三十三四年から三十八年小諸を去つて上京するに至る間に成つたスケッチを、大正元年に公刊したもので、作者が詩作から小說の創作に移る當時の習作的意義を有するものである。（千曲川のスケツチ　一冊、大正元年十二月、春陽堂發行。岩波文庫千曲川のスケツチ　一冊、昭和二年十月、岩波書店發行）

二　作者

島崎藤村（とうそん）。詩人・小說家。本名は春樹（はるき）。明治五年二月長野縣西筑摩郡神坂（みさか）村馬籠（まごめ）に生まれた。十三年東京に出、初めは義兄、後にはその知人の家に寄寓し、三田英學校・神田共立學校を歷て、二十四年明治學院卒業。學院時代、基督敎の洗禮を受け、また文學書に親しんだ。二十五年明治女學校に敎へ、雜誌「文學界」の創刊に與つたが、翌年約一箇年を旅に送り、旅先から「文學界」に寄稿した。二十九年東北學院の敎師となり、仙臺に在ること約一年、翌年東京に歸り、三十二年には長野縣北佐久郡小諸義塾に赴任し、三十八年まで約七年間をこゝに送つた。この間、三十年には處女詩集「若菜

集」を上梓し、調和ある清新な詩風を以て青春の情感をうたひ、ついで「一葉舟」「夏草」「落梅集」を刊行して、明治浪曼主義の高い記念塔たらしめた。その後次第に自然及び人間生活を現實的に眺めようとする傾向が著しくなり、三十五年頃詩から散文に移る決意を抱いた。かくて最初の長篇小說「破戒」を三十七年に起稿し、翌年上京して脫稿し、三十九年上梓して小說界に於ける新機運の先蹤をなし、小說家として本格的に立つに至つた。この浪曼的傾向から現實的傾向への發展は、また明治文學史の時代的發展に相應じてゐる。大正二年フランスの旅に上り、五年歸朝。七年以來東京市麻布區飯倉片町に住み、一時重患を煩ひ病褥に親しんだが、不斷に創作に精進し、近來は長篇小說「夜明け前」の制作に全力を傾倒し、昭和四年四月以來年四回づつ雜誌「中央公論」に發表してゐたが、十年十月完結した。著作には、詩集に「若菜集」「一葉舟」「夏草」「落梅集」及びそれ等を合した「藤村詩集」、小說に「破戒」「春」「家」「櫻の實の熟する時」「新生」「嵐」等、紀行・隨筆集に「千曲川のスケッチ」「海へ」「佛蘭西だより」「飯倉だより」「春を待ちつゝ」「市井にありて」等、童話集に「幼きものへ」「ふるさと」「をさなものがたり」等があり、その他「藤村讀本」（全六卷）・「藤村全集」（全十二卷）等も刊行されてゐる。

三　採擇の趣旨

自然觀察に成る文である點に於て、前二課に共通する。唯、第三課は海洋の自然であり、第四課は平野の自然であつたのに、本課は山上の自然である所にそれ〴〵の特色を保有する。のみならず、觀察者が第三課は宗教的文學者であり、第四課は寫生主義の歌人・小說家であり、本課は新に寫實を念としてゐるロマンティックな詩人である點に於て、著しい個性的反映が存する。

文藝的教材であると共に、觀察態度の誠實な點に於て、人間的教養に資すべき文化的教材である。

二　教材としての研究

一　註解

【落葉】　オチバ（ラクエフと讀む場合もある。）（一）地に散り落ちてゐる葉。又は落ちる葉。（二）おとしだね。落胤。（三）「落葉色」の略。こゝは（一）。

【初霜】　ハツシモ　その年になつて始めて置く霜。（霜）（卷一、二四七頁を見よ）

【武藏野】　ムサシノ（卷一、二九〇頁を見よ）

【淺々とした】　アサアサとした　非常に薄い。

【君】　作者が「千曲川のスケッチ」を呈した吉村樹氏をさす。氏は、作者が東京遊學時代寄寓した恩人吉村忠道氏の子息である。

「千曲川のスケッチ」の「はしがき」に「敬愛する吉村さん——樹さん——（中略）私は序のかはりとしてこれを君に宛てるばかりでなく、斯の書の全部を君に宛てて書いた。山の上に住んだ時の私からまだ中學の制服を著けて居た頃の君へ。これが私には一番自然なことで、又あの當時の生活の一番好い記念に成るやうな心地がする」とある。

【この山の上】　長野縣北佐久郡小諸町をさす。（作者參照）

作者は小諸町のことをいつも「山」「山の上」等といつてゐる。「千曲川のスケッチ」の三「山莊」には「一體、此の小諸の町には、平地といふものが無い」といつてゐる。

「小諸町」は、淺間山の西南麓、千曲川の東岸に位し、佐久地方の交通・經濟上の中心をなし、農產物・生絲の取引が盛に行はれ、又信越線の要驛で、淺間山登山口に當り夏期登山客で賑はふ。德川時代牧野氏一萬五千石の城下町で、町の西南隅に小諸城址がある。城は武田氏の時、鍋蓋城・穴城等と稱し、要害堅固を以て

知られたが、今は懐古園と呼ばれ公園となつてゐる。

【こゝの桑畠】　長野縣は桑園全國一位（内地桑作付總面積の一割强を占める（昭和八年現在））で、到る處に桑畠が見出される。

【桑】　クハ　桑科、くは屬の落葉灌木又は喬木。葉は長柄を有し概ね卵圓形で緣邊に粗鋸齒を有し、種々に分裂するか或は無分裂。雌雄二家又は一家で、淡黃綠色の小花より成る雄穗又は雌穗を穗狀花序に綴り、堅果の集合せる果穗を結ぶ。葉は養蠶の料として名高い。

やまぐは（山桑）は北海道・本州・九州・臺灣等の山野に自生する古來の國產種で、狹義にはこれを桑といふ。ろぐは（魯桑）及びまぐは（眞桑）は支那原產の栽植種。現在我が國で養蠶用として栽培される桑の品種は數百に及ぶが、主としてこの三種の系統である。

【爛れてしまふ】　こゝでは、地が生活力を失つて、ゆるみくづれたやうなさまをいふ。

〔爛れる〕　タダれる　皮肉がやぶれくづれる。腐れ傷れる。損ひくづれる。腐敗する。腐爛する。

【猛烈】　マウレツ　甚だ烈しいこと。勢の强く鋭いこと。

【冬の威力】　フユのキリョク　冬のもつてゐる恐しい力。

【雪】　ユキ　氣溫零下の空中に於て水蒸氣が凝結し微細な氷晶又はその群生したものとなつて降下して來るもの。零度近くの時は雪片となつて降り、溫度が甚だ低い時は針狀をなして降下する。

【まだしも】　まだそれでも。よくはないが、何れかといへば。まだ。

【裏口】　ウラグチ　家の裏手の出入口。勝手口。

【深い秋雨】　もの靜かな、萬物を落著かせるやうな秋の雨。

〔秋雨〕　アキサメ　夏の季節風が止んで冬の季節風に移る九・十月の候に、蕭條として降る細雨をいふ。この時期には定風もなく、氣壓配置も不定で、我が國內地の所々に小低氣壓が生じ、隨つて曇り勝の日が續いて屢〻小雨が訪れるのである。その梅雨に似て降り續く場合には、特に秋霖といふ。

【柿】　カキ　柿樹科、かき屬の落葉喬木。葉は尖端の急に尖つた楕圓形又は廣卵形をなし、全緣で有柄。秋日美しく紅葉することがある。雌雄一家で、五六月頃淡綠色・壺形の雄花及び雌花をつける。雄花は概ね三花より成る聚繖花序をなし、雌花は單立で雄花の倍大。秋橙黃色又は赤色の漿果（大小・形狀不定）を結ぶ。我が國及び支那の特產で、古くから栽植せられ、實を賞味する外、或は澁を採り酢を作り、材は器具製作に用ゐられる。

我が國の野生種として知られてゐるのは、やまがき・しなのがき（まめがき）・ときはがき等の約十種で、栽植品種は極めて多く、甘柿と澁柿に大別せられる。

【下る】　オチる（原文振假名）

【霜のゆるむ頃】　霜のとけかゝる頃。寒氣がゆるんで霜がとけはじめる頃。

〔ゆるむ〕（自動、四）「ゆるぶ」に同じ。（一）ゆるくなる。引きしまらない。たるむ。ゆるまる。（二）ぬるむ。ゆるやかになる。（三）怠る。たゆむ。油斷する。こゝは（二）。

【茫然】　バウゼン　（一）廣く遠いさま。（二）ぼつとしてとりとめのないさま。漠然。（三）あつけにとられたさま。きぬけがしてぼんやりとしたさま。惘然。こゝは（三）。

【天長節】　テンチャウセツ　（卷一、三八九頁「天長の佳節」の項を見よ）

【どんより】　空模樣の薄く曇つたさま。色合などの濁りうるんださま。

【霧】　キリ　（卷一、二四三頁を見よ）

【勝手もと】　カッテもと　臺所の方。かつてむき。

〔勝手〕（一）廚。臺所。（二）くらしむき。生計。家計。活計。こゝは（一）。

【凍えた】　コゴえた　甚だしい寒さの爲に感覺を失つた。

【かざしたく】　覆ひたく。あぶりたく。あたゝめたく。

〔かざす〕翳す　（一）陰にする。覆ひにする。まかげとする。（二）頭上に被る。頭上におく。

【しみて】凍みて　こゞえて。かじかんで。

【冬籠】フユゴモリ　冬の寒い間こもつてゐること。冬期、家・巣又は土中などにこもつて外へ出ないこと。

【木枯】コガラシ　「凩」とも書く。木を吹き枯らすあらしの意。初冬に吹く強風で、樹林を吹きまくつて落葉を誘ふ風。

【中旬】チュウジュン　月の中の十日、卽ち月の十一日から二十日までの十日間。

〔旬〕(一)十日。月の一日から十日までを上旬、十一日から二十日までを中旬、二十一日から末日までを下旬といふ。(二)轉じて、十年。(三)みちる。滿。「旬歲」(滿一年)。

【潮】ウシホ　(一)月及び太陽の引力により、朝夕二回海水の高くなり、又、低くなること。(二)さししほ(汐の對)。(三)あさしほ(汐の對)。(四)海水。こゝは(二)。

【千曲川】チクマガハ　千阿川とも書く。犀川とともに信濃川の二大支流の一。長野縣南佐久郡(甲信國境に蟠る甲武信嶽の溪谷)に發源し、佐久平の水を集めつゝ北上、上田盆地に注ぎ、西北流して善光寺平に入り、更に東北に進路をとつて犀川を併せ、信越國境を過ぎて信濃川となる。(犀川との合流點は所謂川中島の砂洲である。)その流域、卽ち佐久・上田・善光寺三平の盆地床及びこれと連なる溪谷には耕地・交通網・都邑等が發達してゐる。

【平素】フダン(原文振假名)つね〳〵。平生。日常。

【裏の沛】ウラのナガレ　小諸町馬場裏の作者の家の裏手にあつた細流。

「千曲川のスケッチ」の三「山莊」に「淺間の方から落ちて來る細流は竹藪のところで二つに別れて、一つは水車小屋のある窪い淺い谷の方へ私の家の裏を横ぎり、一つは馬場裏の町について流れて居る」とある。

【柳】ヤナギ　楊柳科中、主としてやなぎ屬に屬する灌木又は喬木(しだれやなぎ・ねこやなぎ・かはやなぎ・こりやなぎ・たちやなぎ・しばやなぎ・きぬやなぎ・きつねやなぎ等)の總稱。但し普通一般には、しだれやなぎをさすことが多い。

「しだれやなぎ」(枝垂柳)は、北部アジアの原產で古く我が國に栽植せられ、廣く各地に分布する落葉小喬木で、高さ一〇—一二米位。幹は直生するが枝條は細長く下垂し、葉は短柄を有し、線狀披針形で尖り、緣邊に細鋸齒を有する。雌雄二家で、春日四輝內外の雄穗或は二輝內外の雌穗をつける。花色は黃綠色。果實は狹圓錐形の蒴果で、成熟すれば雪白の絮を飛散する。好んで水邊に繁茂し、又、庭樹又は道路樹として重用される。異名—いとやなぎ・ろくかくやなぎ。

【烈風】レップウ　(卷一、三四四頁を見よ)

【枯々とした】葉が落ちて如何にも枯れきつたといふ感じのする。

〔枯々〕カレガレ　(一)草木などの枯れようとするさま。(二)聲の嗄れるさま。(三)水などの乾くさま。ここは(一)。

【霜葉】シモバ　(サウエフと讀む場合もある。)　霜にあたつて黃又は紅に變色した葉。もみぢ。紅葉。

【眞綿帽子】マワタバウシ　眞綿でつくつた帽子。

「千曲川のスケッチ」の十「川船」に「私達は飯山行の便船が出るのを待つて居た。男は眞綿帽子を冠り、藁靴を穿き、女は紺色染の眞綿を龜の甲のやうに背中に負つて家の內でも手拭を冠る。それが斯の邊で眼につく風俗だ」とある。

〔眞綿〕繭を精練して引き延したわた。主に屑繭からとる。白くて光澤があり、柔かで輕く、大島紬・結城紬等の原料又は衣服の引綿とする等、用途が多い。

【フランネル】flannel(英)　紡毛絲を以て平織又は綾などに荒く織つて起毛した薄く柔かく彈力に富んだ織物。但し、こゝでは、綿フランネル、卽ち綿絲でフランネルに摸して織つたものをさす。

【布】キレ

【目緣】マブチ　目のふち。まなかぶら。

【かゞめて】

〔かゞめる〕屈める　かゞむやうにする。折りまげ

る。かゞませる。

【吹きまくる】吹き捲くる「吹きまく」に同じ。風が吹いて物をまきあげる。吹きめぐらす。吹き亂す。壓倒的に、吹きたい放題に吹きまはる。

【撓み】タワみ　曲り。

〔撓む〕（一）壓されてまがる。しなふ。ゆがむ。（二）倦み疲れる。よわる。たゆむ。

【李】スモモ　薔薇科、さくら屬の落葉小喬木。幹の高さ三乃至六米に達し、葉は有柄で倒披針形或は倒卵形を呈し、緣邊に鈍い細齒牙を有する。四月上旬頃、長い花梗を抽き、白色或は黃白色の五瓣花を通常三箇づつ集生する。果實は廣卵形の核果で、夏日黃赤色に成熟する。支那原產の栽植種で、果樹として重んぜられ、種々の地方的品種が知られてゐる。異名—ばたんきやう・とがりすもも・よねもも・いくり。

【銀杏】イチフ　公孫樹とも書く。公孫樹科、いてふ屬の落葉喬木。高さ三〇米、幹徑三米に達することがある。葉は長柄を有する扇形で淺く二裂し、緣邊に不齊の小鋸齒がある。雌雄二家で、四五月頃、穗狀の雄花或は長梗を有する雌花を枝端に腋出、十月頃、球形・黃色の核果樣果實を結ぶ。南支那の原產で、古く我が國に渡來し、果肉を去つた白色の種子（銀杏）を食用に供する外、樹相及び秋期の黃葉を愛でて庭樹・街路樹に用ゐられる。異名—ぎんなんのき・ちちのき。

二　解釋

1　主題

山の上の烈しい霜と凄じい木枯で散つてゆく落葉。

2　構想

(1)　十月下旬に來る山の上の烈しい霜と桑や柿の落葉（初—四三ノ八）。

(2)　十一月初旬の深い霜と柿の落葉（四三ノ九—四四ノ一）。

(3)　十一月中旬の凄じい木枯と木々の落葉（四四ノ二—終）。

3　敍述

〔雜木林や平坦な耕地の多い武藏野へ來る冬〕——本州の脊梁ともいふべき山又山の信州の冬を對比しようとしていつてゐる。

〔淺々とした感じの好い都會の霜〕——同じ霜とはいつても、別種の感のある山の上の烈しい霜を對比しようとしてゐるのである。

〔桑の葉は忽ち縮み上つて燒け焦げたやうになり、畠の土はぼろ〳〵に爛れてしまふ〕——かういふ事例の上に指摘せられると、霜の恐しさが痛感せられて來る。そして「猛烈な冬の威力を示すものは、あの霜だ」といふ斷定が深く背かれて來る。

〔十月末のある朝のことであつた。私は家の裏口へ出て、深い秋雨のために色づいた柿の葉が、面白いやうに地へ下るのを見た〕——色づいた葉が、さそふ風もないのに、次から次とたえまなく、はらりともいはずに地におちてゆくのは、「面白いやうに」とより外は形容出來ない不思議な見物であると同時に、又、今まで見たことのない人には傳へることの出來ない異樣な感じを與へる光景である。寒さの强い地方に住む人々にとつては、必ずや桑畠の畔や柿の木の下に、この思ひがけぬ現象をふと見出した時の驚きの記憶の新なものがあるであらう。

〔肉の厚い柿の葉は、霜のために燒け損はれたり、縮れたりはしないが、朝日があたつて來て霜のゆるむ頃には、重さに堪へないで脆く落ちる〕——柿の落葉の特性がよく把へられてゐる。

〔天長節の朝、起き出して見ると、一面に霜が來てゐて、桑畠も野菜畠も家々の屋根もみな白く見渡される。裏口の柿の葉は一時に落ちて、道も埋れるばかりであつた。すこしも風は無い。それでゐて一葉二葉づつ靜かに地へ下る〕――一面の深い霜、道も埋れる柿落葉、風もないのにその上に落ちる一葉二葉、すべてはその季節の、空も地上の光景もあり〳〵と浮かんで來るやうな景致の描寫である。

〔十一月中旬のことであつた。ある朝、私は潮の押しよせて來るやうな音に驚かされて目が覺めた。空を通る風の音だ〕――信濃高原の木枯の特性がよく把へられてゐる。

〔時々それが靜まつたかと思ふと、急にまた吹きつける。戸も鳴れば障子も鳴る〕――山國に來る木枯の烈しさである。

〔往き來の人々は、いづれも鼻汁をすゝつたり、目緣を紅くしたり、あるひは涙を流したりして、顏色は白つぽく、頰・耳・鼻の先だけが赤くなつて、身を縮め、頭をかゞめて、寒さうに歩いてゐた〕――寒國の人々の、寒さの時期に於ける特別な相貌が的確に寫されてゐる。

〔風を背にした人は飛ぶやうで、風に向かつて行く人は、力を出して物を押すやうに見えた〕――空つ風の日の歩行の困難な狀態がよく體驗的に表現せられてゐると共に、精一杯に、氣候と戰つてゆく人々のさまが新な驚きを以て思ひ出されるやうな描寫である。

〔急に山々の景色は淋しく明るくなつた〕――これも山國に於ける木枯の後の實景であり、實感である。そして透涼と寂靜な初冬の天地が展開せられるのである。

三　批評

地味で丹念な自然觀察の態度が一貫してゐる。落葉の季節を對象として、日を追つて觀察しようとする研究的な熱意の働いてゐることが感じられる。この後の作品の素地を成したのも所以あることである。

殊に、詩から小說への轉化の時期に試みられたスケッチである所に、後日の爲に備へつゝあつた作者の用意が感歎せられる。

三　備考

一　指導の問題

この課も一般の生徒の興味に訴へる所が極めて薄いであらう。併し、深く讀み、自然觀察の態度の質實さや的確さが見え出して來れば、自ら研究的・發見的な興味を覺えるに至るであらう。が、それが理解の基礎は、やはり各自の自然觀察の體驗に外ならぬ。作文と相俟つて、自然觀察についての研究的な態度の指導が有意義であらう。

尙、地方的事情を異にする場合に於ては、理解の困難が一層大きいであらう。併しそれは主として程度の差や、時期の遲速に過ぎない筈であるから、その地とこの文の書かれた長野縣北佐久郡小諸町との地理的相違から、又は淺間山麓の地であり、有名な避暑地輕井澤に接續した高原地帶であることからも、その差異が理解せられるであらう。

何れにしても、興味本位の自然觀察ではなく、寫實本位の自然觀照である立場の理解から、寫實の興味と共に、觀察態度の眞摯さを學ばしめなくてはならぬ。

二　參考資料

「千曲川のスケッチ」の成立に關する作者の言葉を藤村全集第二卷の「第二卷の終に」から引用する。

『千曲川のスケッチ』は、年代順を追つて編んで行くこの全集の意匠に添ひにくいものである。その故は、あのスケッチを作つた年代から言へばこの第二卷に入れるのを至當と思ふが、あれを發表したのはずつと後になつて『家』の長篇を書き終へた頃であつた。あのスケッチの稿は長いこと自分の手許に仕舞つて置いた。そして數年の後に全部を寫し直したり書き改めたりして發表した。そんなわけで、文體や形式の上から言へば『家』を書いた頃の自分の筆が加はつて居ることは否みがたい。しかし私が詩から散文に移らうとした頃の信州時代の記念として、この第二卷にをさめることにした。

小諸に居た頃、私は可成多くのスケッチを作つた。『千曲川のスケッチ』として後に發表したもの以外にも、幾つかの手帳に書きとめて置いた草稿はあつたが、あるものはあまりに短く、あるものはまた私生涯に亙ることが多くて、そのまゝにしてしまつた。幾度か住居を變へたり旅から旅へと動いたりして、今ではあの手帳も殘つて居ない。

六　渡り鳥

松本亦太郎

一　解題

一　本文

「渡り鳥日記」の第一章「渡り鳥の生活」から抄錄したものである。「渡り鳥日記」は本篇の外十五篇から成り作者が外遊中の紀行・感想を主とし、その他の感想類をも集めたものである。（渡り鳥日記　一冊、大正六年一月、實業之日本社發行）

二　作者

松本亦太郎。心理學者。慶應元年九月上野國高崎に生まれ、明治二十六年帝國大學文科大學哲學科を卒業し、更に大學院に進み、二十九年アメリカのエール大學に入り、ドクトル・オヴ・フィロソフィーの學位を受け、更にドイツのライプチヒ大學に學び、歸國後（三十二年）文學博士の學位を得た。東京高等師範學校教授兼東京女子高等師範學校教授・東京帝國大學講師に歷任し、三十九年京都帝國大學文科大學の創設に當り、同大學教授となつて赴任し、京都市立繪畫專門學校長・京都美術工藝學校長をも兼ねた。大正二年東京帝國大學教授となり、十五年停年となつて退職。在職中大正七年及び十三年の二回歐米に派遣された。現在帝國學士院會員である。著書には「渡り鳥日記」の外「心理學講話」「諸民族の藝術」「繪畫鑑賞の心理」「素質の心理」等がある。

三　採擇の趣旨

海洋の秋、平野の秋、山上の秋をそれ〴〵に觀察し描寫した諸課の學習の一發展として、この季節と關係の深い候鳥の觀察に成つた本課を掲げた。

科學的な考察による人間的教養を目ざした文化的教材である。

二　教材としての研究

一　註解

【渡り鳥】　ワタリドリ　候鳥ともいふ。燕・雁・鴨・鷸等の例に見る如く、蕃殖地（生地）と越冬地とが甚だしく隔在し、毎年季節を定めてこの兩地間を往復する鳥類。即ち、冬期には蕃殖地を去つて氣候が溫暖で食餌の豐富な地方に移動し、こゝで越冬して、次年春暖の候となれば再び舊蕃殖地に歸つて生殖を營むもので、この季節的移行を「渡り」といひ、渡りの時期、その範圍の廣狹、その徑路等は種によつて異なる。

候鳥に對し、雀や雉の如く一年を通じてほゞ同一地域に棲む鳥を留鳥といひ、この兩者の中間階梯をなすもの、即ち、鶯や啄木鳥（きつつき）の如く比較的近隣の地方に時節によつて漂泊的に移動する鳥を漂鳥といふ。

候鳥の蕃殖地（多く寒帶又は溫帶）と越冬地とは概して南北の方向に位置し、その距離は甚だ遠く、往々大陸又は大洋を隔てる。（北極あたりから南極地方へ渡るものもある。）北半球では、秋北方の蕃殖地を去つて南方溫暖の地に向かふのを常とし、我が國に於ては、燕・杜鵑（ほとゝぎす）・佛法僧等の如く春南方から歸來して生殖し秋南方へ去つて越冬するもの（夏鳥）、雁・鴨・鷸（つぎみ）等の如く秋北方から渡來して翌春北方へ去るもの（冬鳥）、多くの鷸の類（むなぐろ・きやうちよし・だいしやくしぎ等）の如く我が國よりも北方に在る蕃殖地と南方に在る越冬地との間を往復する途中に於て、一時我が國に立寄るもの（旅鳥）、及び、ひげがら・のどぐろつぐみ等の如く、常には渡來しないが渡りの途中道を失つて偶然我が國に姿を現すもの（迷鳥）の四つに區別することが出來る。尚、渡りは安全を期する爲に夜間大群をなして行はれるのを原則とするが、飛力の極めて強いものや鷲鷹類の如く敵を怖れないものは、晝間時に孤獨でこれを行ふ。又、渡りの際には平常よりも遙に高空を、極めて速い速度で飛翔するのを常とし、大體に於て、海岸線・山河・島嶼等に沿つてコースをとる。

【黃鳥】　ウグヒス　鶯とも書く。燕雀目、鶯科の小禽。嘴細く翼は短く丸く、尾はかなり長い。羽色は所謂鶯色（茶と黑のまじつたやうな色）で、顏には灰白色のやゝ不鮮明の眉斑を有し、風切羽と尾羽は褐色でその外緣は帶褐鶯色、下面は灰白色で胸・脇・下尾筒等はオリーヴ色を帶びる。嘴は暗褐色で下嘴淡く、脚は淡褐色。雌は雄よりも著しく小さい。

【鴨】　カモ　雁鴨目、雁鴨科中、雁の類を除く大部分、即ち所謂河鴨類（まがも・かるがも・こがも・しまあぢ・よしがも・つくしがも・ともへがも・ながも・ひどりがも等）と海鴨類（きんくろはじろ・ほほじろがも・すがも・こほりがも・ほしはじろ・けわたがも等）との總稱。（をしどりも分類上前者に屬するが、一般には鴨とはいはない。）雌雄著しく羽色を異にし、雄は美彩を有し雌は地味。體は肥滿して頸部長く、嘴は上下に扁平。翼は細長で長途の飛翔に耐へ、脚は後方に位して游泳に適し、蹠は短大で前趾間に蹼がよく發達し、尾は短小で多く尖る。群棲を好み、地上・水中・地中・樹洞等に營巢。一般に北地（我が國では北海道以北）で蕃殖し、秋期大群をなして南方へ渡るものが多い。（全然渡りを行はないものもある。）

河鴨類は水中の潛行に巧みで水底の植物又は魚類を常食とし、湖沼・河川・水田又は内灣に棲息するが、海鴨類は歩行は巧みであるが潛水に慣はず、專ら魚類を食として海上に生活する。狹義に鴨といへば河鴨をさす。又河鴨中のまがも（一名あをくび）のみを鴨とい

ふこともある。

【閑雅】　カンガ　(一)しとやかでみやびやかなこと。いうにやさしいこと。(二)閑靜で景色に趣のあること。こゝは(一)。

【泰平】　タイヘイ　「太平」とも書く。世の中が大へんしづかに治まること。天下事なく、人民がやすらかに暮してゐること。世の中がおだやかなこと。昌平。昇平。

【瑞相】　ズヰサウ　(一)めでたいしるし。吉兆。瑞驗。(二)きざし。前兆。(三)福々しい人相。こゝは(一)。

【鳥】　トリ　鳥類。脊椎動物門、鳥綱を形成し、哺乳綱に次いで高級な動物群。肺を有し、溫血で、すべて卵生。皮膚は羽毛を以て被はれ、前肢は翼に變じて多くは飛行に適し、心臟は四室あつて横隔膜を缺き、顎は嘴となつて齒を有せず、嘴及び後肢の形態は習性の異なるに隨つて多種多樣である。往時は生態に基づいて走禽類・鶏雞類・涉禽類・鳩鴿類・游禽類・猛禽類・攀禽類・鳴禽類等に大別されたが、現在では、駝鳥目・鶏雞目・鶴目・海雀目・鷸目・鷸目・鳩鴿目・阿比目・管鼻目・全蹼目・雁鴨目・鸛鷺目・鷲鷹目・梟鴟目・鸚鵡目・杜鵑目・啄木鳥目・佛法僧目・翡翠目・怪鳥目・雨燕目・燕雀目その他、現生のものだけで約四十目に分類せられ、その中我が國に於ては約二十五目が數へられてゐる。

【家族生活】　カゾクセイクヮツ　一家族としてのくらし。

〔家族〕　夫婦及び親子を中心とする血緣的小共同體。

【サウス・ケンシントンの博物館】　現在サウス・ケンシントンには、美術工藝の蒐集を以て名高いヴィクトリア・アンド・アルバート博物館(一般にはこれをサウス・ケンシントン博物館と呼ぶ)、發明品の陳列で知られてゐる科學博物館、及び大英博物館の分館である博物學博物館の三大博物館があるが、こゝでは最後に擧げたものをさすのであらう。

博物學博物館(The Natural History Museum)は、西暦一八八〇年に大英博物館から分離してクロムウェル街に設けられたもので、この種の博物館では世界第一のものとせられ、動・植・鑛物の各種に亙る廣汎な蒐集と陳列法の科學的なることとを以て聞えてゐる。

〔サウス・ケンシントン〕　South Kensington　ロンドン市ケンシントン區の一部。(ケンシントン區はロンドンの中心部からやゝ西に位する一區域、卽ちハイドパークの南から西に亙る一帶の地。)同區のヴィクトリア停車場に接する繁華地で、三大博物館の外、帝國圖書館・帝國科學大學・ロンドン大學・王立美術學校・王立地學協會・アルバート會館等があり、學藝の中心の觀をなしてゐる。

〔博物館〕　ハクブツクヮン　museum(英)の譯語。學術の研究に供し、或は社會教育に資する爲に、美術・歷史・自然科學等の資料を組織的に蒐集・陳列して一般の展觀に供する施設。

【蒐集】　シウシフ　寄せ集めること。まとめよせること。

【剝製】　ハクセイ　動物體(主として脊椎動物)の皮を剝ぎ、骨骼・筋肉・內臟等を除去して、皮の內面に防腐法を施し、內に綿・麻綿・木綿・鉋屑などを塡めて縫ひ合はせ、生時の外形をとゞめしめて標本を作ること。又、その製品。

【天然】　テンネン　(一)人爲の加らぬ狀態。自然。本性。天性。うまれつき。(二)人力の如何ともなしえない狀態。(三)造物主。こゝは(一)。

【直寫】　チョクシャ　(一)そのまゝ書きうつすこと。(二)ありのまゝをうつすこと。こゝは(二)。

【表情】　ヘウジャウ　(卷一、七三頁を見よ)

【風色】　フウショク　(一)けしき。ながめ。風景。風光。(二)風もやう。天候。こゝは(一)。

【眞に迫つて】　シンにセマつて

〔眞に迫る〕　まことのものと同一に感じられる。

【禽鳥】　キンテウ　鳥。鳥類。(前頁「鳥」の項參照)

操觚字訣に據れば、禽は「とり」「けもの」の總稱で、主に「とり」に用ゐ、鳥は「とり」のみに用ゐて「けもの」には用ゐず、又、禽は「翠禽」「文禽」などの如く汎稱に用ゐ、鳥は「黃鳥」「畫眉鳥」などの如く、一定の名をさすに用ゐるといふ。

【情合】　ジャウアヒ　(一)人情のぐあひ。(二)情意の一致。こゝは(一)。

【濃】コマヤカ

【想像】サウザウ　(一)おしはかること。おもひやること。當推量(あてずあるあらう)。(二)心理學的には、外界とは無關係な狀態に於て直觀表象卽ち心象が心に浮かべられる作用。こゝは(一)。

【不慈】フジ　慈愛のない。いつくしみのない。

〔慈〕(一)いつくしむ。なさけをかける。親が子を愛する。(二)なさけ。あはれみ。仁愛。親の愛。(三)佛語。Maitri の譯語。衆生を愛念して樂を與へること。

【本心にたち返る】人間本來の心にかへる。

〔本心〕ホンシン　もちまへの正しい心。まごころ。良心。正氣。ほんしやう。

【喜樂】キラク　喜と樂しみと。喜び樂しむこと。

【棲息】セイソク　「栖息」とも書く。すむこと。やどること。

【一大奮鬪の生涯】イチダイフントウのシャウガイ　全力を擧げて、困難とたゝかひぬく一生。

【比類】ヒルヰ　くらべるもの。たぐひ。なかま。

【種族蕃殖】シュゾクハンショク　こゝでは、種としての族を蕃殖させること。卽ち、自己の屬する種の子孫の蕃殖をはかること。

「種」は、生物分類上の基本的な單位。遺傳的・形態的・生態的に一定共通な特性を具有する個體群で、自然の狀態にあつては種が異なれば交配は行はれず、又特別な外的影響のない限り種の子孫は不變である。動植物の分類方式上では、種の上に屬を設け、屬名と種名とを連記したもの(正式にはこれに命名者の名を加へる)をその生物の名とする。種を更に細別して亞種・變種その他種々の段級を設けることもある。

〔蕃殖〕(一)ふえはびこること。(二)子を生んでふえること。こゝは(二)。

【不可抗の天然力】フカカウのテンネンリョク　抵抗しがたい自然の力。

【頡頏】キッカウ・ケッカウ　(一)鳥の飛上り飛下ること。集傳「飛而上曰頡(ヒテルフセト)、飛而下曰頏(ヒテクラフト)」(二)轉じて、互

に優劣のないこと。相對抗して互に下らぬこと。たてつくこと。こゝは(二)。

【去來現象】キョライゲンシャウ　こゝでは、鳥類が時を定めて來たり去つたりする現象、卽ち、渡りの現象をさす。(九〇頁「渡り鳥」の項參照)

〔去來〕(一)去ると來ると。ゆきき。往來。(二)過去と未來と。

〔現象〕(卷一、二三二頁を見よ)

【鄉土】キャウド　(一)その土地。(二)生まれ故鄉。生地。ふるさと。こゝは(二)。

【黃金鷸】コガネシギ　golden plover(英)の譯名。背面に金黃色の斑紋を有するのでその名があるのであらう。むなぐろの近似種(恐らくは同種)。

「むなぐろ」(胸黑)は、一名あいぐろ。鷸目、千鳥科、むなぐろ屬の鳥。翼長一六五粍內外のやゝ大形の千鳥で、嘴の前半部に著しい膨れを有し、翼は長く尖り、尾は短く、後趾を缺く。體の上面はすべて黑色の地に金黃色及び少許の白色の斑點があり、額・眉斑及びこれに續く上胸側面の部分は白色、それを除く顏及び下面は全部黑色で、明瞭な對照をなす。嘴は黑色、脚は蒼灰色。但し冬羽は下面の黑色部が全部白變し、粗に灰褐斑點を混ずる。一見だいぜんに酷似するが、それよりも形が小さく、又腋羽が灰色を呈する點で容易に識別せられる。極めて長途の渡りをなすもので、シベリア北部・アラスカ西部等で蕃殖し、南支那を經て印度・マレー諸島・濠洲・ニュージーランド等に渡行して越冬。アメリカ方面では、北米大陸の緣に近い部分から南米大陸の南邊まで渡行。我が國には春秋の二期樺太から臺灣までの各地に旅鳥として極めて多數渡來し、肉の美味を愛でて多量に捕獲せられる。

【ニューファンドランド】Newfoundland(英)　北アメリカ大陸のセントローレンス灣口に橫たはる大西洋の一大島。北緯四七度—五二度、西經五三度—六〇度に位する。面積約一一〇、七〇〇方粁。島は形狀不整で海岸線の出入多く、內地は概して岩石の多い高原が起伏してゐる。氣候は冬長く夏短く、氣溫は二月平均零下五・五度、

七月平均一五・五度位。近海は寒暖兩流の會合點で、世界三大漁場の一と稱せられ、殊に鱈漁に於ては世界に比を見ない。對岸のラブラドル地方と共に、カナダとは別の英領自治植民地をなし、住民は主としてイギリスからの植民の子孫で、その大半は漁業に從事してゐる。首府はセントジョンス。人口約二八〇、〇〇〇萬（昭和六年現在）。

この地は既に九十世紀の頃ノルウェー人によつて知られたが、十五世紀末英人ジョン・カボットの再發見以來歐大陸よりの植民が始り、英・佛兩國間に爭奪戰が行はれた結果、西暦一七一三年英領に歸し、一八五五年以來完全な自治領となつた。

【中央亞米利加】 チュウアウアメリカ Central America（英） 略して中米ともいふ。北アメリカ大陸の一部で、南アメリカに連絡する地峽部。ほゞ北緯八度―一八度、西經八三度―九二度に位し、東はカリブ海に面し西は太平洋に臨んでゐる。地形は概ね山地で、太平洋岸の高原の緣邊は山脈をなし、これに伴なつて三十餘の火山が噴起してゐる。東北貿易風帶に屬し、氣候は概ね熱帶性である。政治上ではグッテマラ・サルヴァドル・ホンヂュラス・ニカラグッ・コスタリカ・パナマの六共和國及び英領ホンヂュラスに分れてゐる。

作者は西印度諸島中のハイチ島を「中央亞米利加のハイチ島」といつてゐるが、廣義にはメキシコをも中米に包含させることがあるので、更に廣く、地形的には中米と南米とを連絡する海中山脈である西印度諸島を中米に包含させたのであらう。

【ハイチ島】 Haiti Isl.（英） 西印度諸島の大アンチル列島に屬する一大島。ウィンドワード海峽を挾んでキューバ島の東に位し、東方はモナ海峽を隔ててポルトリコ島に相對し、北は大西洋に、南はカリブ海に面する。面積約七七、三〇〇方粁。島は山嶽性であつて、その北側は山脚海に迫り、貿易風を受けて降雨量多く、樹木がよく繁茂するが、南側は風下で乾燥し、サボテンが繁茂し、又中央部は一層乾燥してエンキリヨの鹹湖があるほどで

ある。全島の約七五％は林野である。

西暦一四九二年コロンブスはこの島を發見してエスパニョラと命名した。その後、イスパニア人・フランス人・黒人奴隷の間に屢〻領有を爭ひ、一八二二年ハイチ共和國成り、一八四二年東部は獨立してサント・ドミンゴ共和國を建てた。その後も兩國間の紛爭が絶えなかつたので、一九一五年アメリカ合衆國軍同島に上陸して全國の秩序回復に當り、爾來事實上同國の保護領となつた。

【移住】 イヂュウ （一）住む土地をかへること。（二）外國に移り住むこと。こゝは（一）。

【哩】 マイル mile（英） イギリスの距離の單位。八〇鎖（チェーン）（一、七六〇ヤード）で、約一・〇九三粁に當る。英里。

【石返し】 イシガへし turnstone（英） の譯名。（石の下に潜む小甲殼類や蟹等を啄むのでその名がある。）きやうちよしぎ（京女鷸）に同じ。鷸目、千鳥科、きやうちよしぎ屬の鳥。翼長一五〇粍位。脚短く丈低く、嘴は圓錐形で短く尖り、羽色は、頭・喉・腰・上尾筒及び胸以下の下面は白色で、前額及び下嘴の基部より後方に各〻一條の黑斑があり合一して胸の黑色部と連絡してゐる。背には栗色・黑色・白色の斑紋があり、尾は白色で先端は幅廣い黑帶に終る。嘴は暗黑色、脚は黃赤色。冬羽では黑色部の羽毛は白緣を有する。分布最も廣く、渡りの範圍も廣大で、北極洋に面する歐洲・アジア北部及びアラスカ・グリーンランド等で蕃殖、冬期は、歐洲では地中海を經て北部アフリカに移行し、アジアでは印度洋沿岸地方及びサンドウィッチ諸島よりモルッカ・ニュージーランドに到達、アメリカ方面では西部地方を經てペルー・チリ等に到る。我が國では、樺太・千島から臺灣に至るまでの各地に、旅鳥として春秋の二回多數に渡來する。

【鷸】 シギ （一）廣義には、鷸目に屬する鳥類、殊に鷸科及び千鳥科に屬するものの總稱。（二）一般には、鷸目、鷸科に屬する鳥類の總稱。（三）狹義には、鷸科中の田鳴類に屬する鳥類の總稱。こゝは（一）で、黃金鷸も石返

しも千鳥科に屬する。（六二頁「鴫」の項參照）

「千鳥科」は、大體に於て鷸科に類する中形又は小形の鳥であるが、いづれも嘴が短くて先端に堅硬な膨大部があり、基部のみ柔軟（時には全部堅硬）である點等で、鷸科と區別せられる。（鷸科では、嘴は細長く眞直（又は上下に彎曲）で、先端の堅硬部が少いか、或は殆ど全部が柔軟である。）翼は極めて長く、脚も長く、趾は後趾を缺いて三本のものが多く、尾は短い。きやうぢよしぎ・だいぜん・むなぐろ・めだいちどり・いかるちどり・こちどり・しろちどり・けり・たげり・みやこどり・せいたかしぎ等がこれに含まれる。多く河口・海岸等に棲息し（いかるちどり・こちどり等は河原を好む）、長途の渡りを行ふものが多い。

【グリーンランド】 Greenland（英）　北アメリカ大陸の東北に接して横たはる世界第一の大島。ほゞ中央部を西經四〇度の子午線が走り、極南は北緯六〇度、極北は北緯八四度に達し、その大部分は北極圏内に屬してゐる。推定面積約二、一七五、六〇〇方粁。島内は一大高原狀を呈し、山勢が海に逼つて急崖をなす所多く、海岸は峽灣（フィヨルド）が發達して小島嶼に富む。内陸は調査不十分であるが大部分は氷河・雪原に蔽はれ、南東海岸の低地のみが纔かに居住に適するに過ぎず、氣溫は頗る低く、最南部に於ても夏期五度、冬期零下二〇度を示す。植物としては、はんのき・かんば等の小喬木及び灌木類・蘚苔類等が知られ、動物には白熊及び海獸・海鳥の類を見る。デンマルク唯一の植民地で、住民の大半はエスキモー人より成り、主として漁業・狩獵に從事してゐる。最大聚落はシドプロヴェン。人口一四、三五五、内デンマルク人二七四（大正五年現在）。

この地は九八三年ノルウェー人エリックにより發見、一七二一年以來デンマルク領となり、近世多數の探檢者が訪れてその名を地名に殘してゐる。

【濠洲】 ガウシウ Australia（英）　濠太剌亞（オーストラリア）洲の略。ほゞ東經一一三度—一五四度、南緯一一度—四四度（タスマニア島を含む）に位する世界最小の大陸。東は太平洋、西及び南は印度洋、北はアラフラ海に面してゐる。面積約七、七〇〇、〇〇〇方粁。地形上、東部高地・中央低地・西部高地に三分せられる。南回歸線が大陸の中央を通過してゐるので一月が丁度中夏の候に當り最高氣溫を示す。南部は地中海性氣候（夏期は乾燥し、冬期に多雨の氣候。地中海沿岸はその好例）で溫和、東部も溫和で常に東南風が吹き、雨量が多く、北部は暑熱が強くて夏期に雨が多く、中部は乾燥・高溫の沙漠性氣候を呈する。

六大洲中人口が最も稀薄で、土人オーストラリア族は次第に減少し（現在、三萬餘）、總人口六、六三〇、六〇〇（昭和八年現在）の九九%はイギリス人である。政治上五州・一地方に分ち、これにタスマニア島を加へてオーストラリア聯邦を組織してゐる。すべてイギリスに屬する自治植民地である。

【南米】 ナンベイ South America（英）　南亞米利加の略。北アメリカ洲の南部に接續する世界第四の大陸。北緯一三度—南緯五五度、西經三四度—八二度に位し、東は大西洋に、西は太平洋に面してゐる。面積約一八、一四〇、〇〇〇方粁。北部の幅の廣い部分を赤道が横斷してゐるので、大部分の地域は熱帶に屬する。西岸に沿うてアンデス山脈が走り、この上に海拔六〇〇〇米以上の活火山を有する。東部にはギアナ高地・ブラジル高地等が發達し、アンデス山脈とブラジル高地との間にアマゾン河が東流して世界第一の流域を展開し、南部にはラプラタ河が南流する。アマゾン河流域は雨量多く、大森林を形づくつてゐるが、アンデス山脈以西は殆ど降雨なく、各所に沙漠を形成してゐる。

北部にはギアナ（英・蘭・佛に分屬）・ヴェネズエラ、東部にブラジル、南部にはパラグヴァイ・ウルグヴァイ・アルゼンチン、西部にはコロンビア・エクヴドル・ペルー・ボリヴィア・チリの諸國がある。

【南阿】 ナンア South Africa（英）　南阿弗利加の略。アフリカ大陸（北緯三八度—南緯三五度、西經一八度—五一度）のほゞ南緯一七度以南（東アフリカを除く）、即ち南部アフリカ。東は印度洋に、西は大西洋に面する。面積約一、二二〇、〇〇〇方粁。地形は一大高原を呈する。東岸を縱走するドラケンベルグ山脈は東南

貿易風の齎す濕氣を凝結させるから、東部の海岸平野は溫暖・多雨で「アフリカの花園」と稱せられ、內地の臺地は大陸性氣候でサヴァンナ（樹木の稍どない叢漠たる草原）をなし、西部にはカラハリ沙漠がある。

北部のローデシア及び中部のベチュアナランドは共に英國の保護地、南方の主要部はケープ・ナタール・オレンジ自由州・トランスヴァールの四州が組織する英國の自治植民地南アフリカ聯邦（略稱、南阿聯邦）が占める。西部の西南アフリカはもとドイツ領であつたが、世界大戰の結果南阿聯邦の委任統治地となつた。東部の葡領東アフリカは、普通、東部アフリカに包含せしめる。

【北氷洋】　ホクヒョウヤウ　Arctic Ocean（英）の譯語。北極海（Arctic Sea）に同じ。ユーラシア（アジア・ヨーロッパ）・アメリカの二大陸に圍まれた內海。面積約一四、三五〇、〇〇〇方粁（地中海の約五倍）。太平洋とは深さ僅かに四〇米のベーリング海峽で連結され、大西洋とはノルウェー海及びバレンツ海で續いてゐる。北極地方の大部分を占め、その緣邊附近にニューシベリア群島・フランツジョセフランド・ノヴァヤゼムリア・スピッツベルゲン群島・グリーンランド・北極海群島等がある。海氷としては氷山がなく全部叢氷で、厚さ約一—二米、時に氷餅となる。全海面の約三分の二は常に氷殼下にあるが、所々風に破壞されて開水面を生ずる。

【地球の直徑】　チキウのチョクケイ　地球の赤道に於ける直徑をいふ。約一二、七〇〇粁。

地球は南北兩極に於て扁平な扁平楕圓體で、その赤道半徑は約六、三七八粁、極半徑は約六、三五七粁、扁平率（赤道半徑と極半徑との差を赤道半徑で除したもの）は二百九十七分の一と算定されてゐるが、扁平率が小さいので一般に球形と見做し、赤道に於ける直徑を地球の直徑といふ。

尙、本文前行の「九千哩」を米に換算すれば約一四、五〇〇粁である。

【最短距離】　サイタンキョリ　平面上では、二點を結ぶ直線の長さ。球面上では、二點を通過する大圓（球の半徑を半徑とする球面

上の）上の圓弧の長さ。

地圖は地球の球形の表面を平面に描寫したものであるから、地圖上では、赤道上の二地點又は正南北の二地點以外は、直線を以て二地點間の最短距離を示すことは出來ない。

【迂回】　ウクヮイ　遠路をまはること。まはり道をすること。

【バルチック海】　Baltic Sea（英）　バルト海に同じ。ヨーロッパ大陸とスカンディナヴィア半島との間の內海。北緯五四度—六六度、東經九度—三三度に亙つて稍南北に長く、西南緣のキール（ドイツ）と北緣のハパランダ（スウェーデン）の距離一、七〇〇粁に及ぶ。面積約四一〇、〇〇〇方粁。その北部をボスニア灣といひ、東部にフィンランド灣・リガ灣がある。海口は南スカンディナヴィアとユットランド半島との間に於てカテガット海峽及びスカゲーラク灣を以て北海に連絡してゐる。陸水の流入が多く、外海とは殆ど絕緣せられてゐるので、海水の含鹽量が極めて少い。バルチック海中の主なる島はボルンホルム・エーランド・ゴットランド・エーゼル・タゲー及びオーランド諸島等である。一般には狹義にオーランド諸島以南をバルチック海といふ。

バルチック海に面する國々は、スウェーデン・デンマルク・ドイツ・ポーランド・リトワニア・ラトヴィア・エストニア・ロシア・フィンランド等である。

【鶴】　ツル　鶴目、鶴科に屬する涉禽の總稱。體大きく頸も脚も極めて長く、嘴は強大で眞直。翼はあまり長くないが、三列風切のみは特に長くて尾と誤られる。尾は短く、腿の下部は羽毛を被らず裸出し、趾は短大で後趾は著しく小さい。沼澤地・海濱又は森林中の泥濕地に群棲し、多く粗大・扁平な巢を地上に營むが、種類によつては單に地表に凹所を作つて產卵する。東部アジアの北部（我が領內では北海道・朝鮮）で繁殖し本邦內地は越冬地である。

鶴の類は世界に十九種あるのみであるが、我が國に渡來するものは比較的多く、たんちやう・まなづる・な

べづるその他六種を算する。但しいづれも維新後急激に數を減じ、現今內地では鹿兒島縣の一部を除く外、殆ど跡を絕つた。狹義にはたんちやう（卽ち頭上の皮膚が赤く裸出し、頭と風切羽の一部の黑色を除く外全身純白のもの）を鶴といふ。

【アルプス山】 Alps Mts.（英） イタリア・フランス・スウィス・ドイツ・オーストリアなどの諸國に跨がるヨーロッパの大褶曲山脈。イクリア半島の北部（イタリアの北境）を大きく弧を描いて走り、東にカルパチア、東南にヂナルアルプ、西にジュラ、南にアペニンの諸山脈と相連なつて、一大山系を形づくつてゐる。通常これを西アルプス・中央アルプス・東アルプスの三群に分ち、中央アルプスを更に北部と南部とに分けるが、いづれも山勢嶮峻を極め、最高峯モンブラン（海拔四八一〇米）を始め、モンテローザ（四六三八米）・マッテルホルン（四五〇五米）・ユングフラウ（四一六六米）等、四時雪を頂く高峯（雪線は、二五五〇—三三〇〇米）が限りなく相連なり、その間にはメーアード・グラース・アレッチ・パステルツェ等幾多の氷河が今も猶存してゐる。又山麓は鬱蒼たる森林に蔽はれ、或は綠の牧場が開け、これを飾るに紺碧の湖を湛へて、ヨーロッパ第一の豪壯・雄大な風景を現出してゐる。

【ライン河】 R. Rhine（英） スウィスに發源してドイツの西部を流れ、オランダを經て北海に注ぐ大河。全長一、三二六粁。源流をアルプス山脈のサンゴタルド峠に發し、東北流してボーデン湖に入り、獨・瑞國境を西流してバーゼル市に到り、これより流路を北北東に轉じて獨・佛國境を過ぎ、南プロシャの地に入り、次第に低地河としての規則正しい曲流をなしつゝ、マンハイムの河港を經てマインツ市に達する。こゝで大支流マイン河を併せて北西に向かひ、再び水勢を增してライン峽谷の美を現出、コブレンツ市でモーゼル河と合してからは水量愈〻豐に、ジーク・ルール・リッペの三河を收容してオランダに入る。以後は大三角洲を作つて多數の脈流に分れる部分で、ユトレヒトの低地（海面以下）に到つてワール・レック・イーゼルの三大主脈流に分岐、前二者は更に脈流を分つて西方の外洋（北海）へ、後者は北流してゾイデル海へ注ぐ。

この河は既に中古時代に於て極めて重要な地位を占めたもので、バーゼル以下の諸都市はいづれもその繁榮をこれに負つてゐる。尙、今日ではドナウ・マース・セーヌ・ローン諸河との間に運河連絡が施設されてゐて、一層ライン航行の價値が高められてゐる。

【ローン河】 R. Rhône（英） スウィスに發源しフランス南部を流れて地中海に注ぐ大河。全長七五九粁。源をアルプス山脈のフルカ峠に近いローン氷河に發し南西より北西に轉じてジュネーヴ湖の東端に入り、湖の南西端に當るジュネーヴ市から溢出してフランスに入り、ジュラ山脈の南方に峽谷を穿つて西流、リヨン市附近でソーン河を併せ、以後南方に流路をとつて、セヴァンヌ山脈の東をかぎり、ヴァランス・アヴィニョン等の諸市を流過、アルル市附近に到つて數分流を出し、大三角洲を作つてリヨン灣に注ぐ。

南部フランスに於ける主要な河流で、交通・運輸に貢獻すること著しく、大洋航行の船舶はアルルまで溯行可能であり、ロアール・セーヌ・ライン諸河との間に運河連絡が施設されてゐる。

【シシリー】 Sicily（英） シシリー島。地中海の中部、イタリア半島の尖端（カラブリア半島）と幅員一八・三粁のメッシナ海峽を隔てて橫たはる三角形狀の島。イタリアに於ける最大の島で、面積二五、七三九方粁。南方アフリカとの間には幅員一四〇粁の淺いチュエス海峽（シシリー海峽）を挾んでゐる。イタリア半島から分離された陸塊として、アペニン山脈帶の一部を形成する。一般に北海岸に沿うて走る主嶺を脊として南に向かつて緩かに傾斜し、東部にはエトナ活火山が聳立する。氣候は代表的の地中海性氣候を呈し、冬の雨期と夏の乾燥期とに分れてゐる。

【やたら】 みだり。むやみ。むしやう。むちやくちや。

【公道】 コウダウ　こゝでは、定まつた道といふ程の意。

【本能】　ホンノウ　動物が、その心身の先天的機制により、個體及び種族保存の爲に、外圍の變化に對して反射的に行ふ合目的性行動。同一の種に屬する總べての個體にほゞ共通であるのを常とし、遺傳的・先天的にその動物に既存するもので、經驗・學習等によつて後天的に獲得せられるものではない。個體保存の爲の食欲本能（捕食）・防禦本能（恐怖・憤怒等）の如き、種族保存の爲の交配本能・哺育本能の如きは、その代表的なものであり、その外高級なる動物には群棲本能（社會形成本能）等が知られてゐる。

尙、新しい動物學的解釋によれば、遺傳的に神經の徑路にそなはる總べての能力及び行爲が本能であるとせられてゐる。

【一行】　イッカウ　（一）一つら。一ならび。（二）連れだつてゆくこと。又、その人。みちづれ。同行。同伴。（三）書面一通。こゝは（二）。

【迷子】　マヒゴ　「まよひご」の訛。道に迷つてさまよふ小兒。

【旅行熱】　リョカウネツ　旅行したいといふ興奮した精神狀態。

〔熱〕　こゝでは、精神を一方に傾けそゝぐこと。興奮した意氣。熱心。熱情。

【經驗】　ケイケン　（一）實際にためし試みたこと。又實際に試みて得た知識・技能。（二）感官を通じて得た知覺。又知覺によつて結合せられた知識。こゝは（一）。

【無鐵砲】　ムテッパウ　理非・前後を顧みないで、むやみに事をすること。無法。

【鶉】　ウヅラ　鶉雞目、雉科に屬する鳥。頭は黑色で白い縱斑を有し、背面は赤褐色で、羽軸に沿つて細長三角形の白斑がある。下面の腮及び喉は美麗な赤栗色を帶び、多くは中央部に黑色縱斑を有する。冬羽では喉の赤色部は消えて白色となり、又雌の喉は黃白色にわづか褐色を混へる。他の雉科のものと異なり、尾は極めて短く且尾羽も柔軟。東南部シベリア・滿洲・蒙古・支那・朝鮮及び日本內地等に棲息し、我が國では樺太以南、九州・臺灣に亙つて分布するが、蕃殖地は主として本州の東北地方で、それ以南は越冬地である。古來飼鳥及び獵鳥として重んぜられ、肉は頗る美味。

【東京から大阪まで】

東京・大阪間の距離は東海道本線の粁程で五六八・一粁（約三五三哩）であるから、一時間三八哩（約六一粁）の速力ならば約九時間一八分、四三哩（約六九粁）ならば約八時間一二分を要する譯である。

因みに、現在最速の特急「燕」の東京・大阪間の所要時間は八時間である。

【鳩】　ハト　鳩鴿目、鳩鴿科の鳥類の總稱。地鳩類（きじばと・しらこばと・べにばと・きんばと等）・岩鳩類（かはらばと等）・樹鳩類（からすばと・あをばと等）に大別せられ、殆ど汎世界的に分布する。すべて中形の鳥で、體色は種々。嘴は比較的小さく前端膨大して鉤曲し、堅硬ではあるが、基部に柔軟な膜を被る。翼は長く圓く尖跡は短大で、趾は四本とも同高。尾は圓形又は楔狀。概ね森林地方に生活して樹上に粗雜な巢を營むが、岩鳩類のみは海濱を好んで、岩石の空洞又は罅裂等に營巢する。又、地鳩類は平常地上に生活することが多い（巢は樹上）。

尙、一般に鳩の類は歸巢本能が强いので知られ、飛翔力は强いが殆ど渡りは行はない。

我が國で普通一般に鳩と稱するのは神社・佛閣に見るいへばと（＝どばと）であるが、これはかはらばとの變種で、原種は我が國に產しない。（寺院・琉球等で見るのは、いへばとの半野生化したものである。）通信用に用ゐられる傳書鳩（軍用鳩）も亦かはらばとの變種である。

【競馬】　ケイバ　騎馬の競走。廣義には、往古一種の儀式として行はれたものから、單なる餘興・娛樂・興行として、又は純粹の競技若しくは武術として演じられたものまで、すべて走馬能力又は騎馬技術を競ふ催の總稱であるが、現在一般には產馬の奬勵、馬匹の改良、馬事思想の普及等を促進することを目的とし、賭博的興味を伴なはせて行はれる興行をさす。こゝは後者。

現在の意味に於ける競馬は十八世紀末英國に起つて各國に普及し、我が國でも明治以來行はれ、現在では十一の競馬倶樂部（社團法人）が公認されてゐる。普通に行はれる方法では、倶樂部の所屬馬又は各個人の持馬を一定の種別又は規定の下に一定競馬場で競走せしめ、觀客は馬券を購つて優勝馬を投票し、的中者はその同の馬券賣上高の大部分を割戻し的に分配される（これと客との間に取引が行はれる）、競技種類は平地競走・障礙競走・速歩競走に大別せられ、馬種は英國のサラブレッド種又は同品種の系統を引いたもの（例へばアングロアラブ・アングロノルマン等）が主として用ゐられてゐる。

【ヤード】 yard（英） 碼。イギリスの距離の單位。約〇・九一四米に當る。

英・米では、距離の單位は主としてヤード・ポンド法即ち吋・呎（十二吋）・碼（三呎）・鎖（二十碼）・哩（八十鎖）を用ゐる。（佛・獨は專らメートル法採用。）

【燕】 ツバメ　燕雀目、燕科、つばめ屬の鳥。嘴は著しく扁平でほゞ三角形をなし、口角が深く切れ込んで眼の邊に及ぶ。翼は極めて細長・眞直で尖り、尾羽は長く叉狀をなす。脚は短く弱く、趾も亦細小。背面はすべて金屬光澤を帶びた黑色で、前額・腮及び喉は栗色、前胸に黑帶を有する外、下面はすべて白色。嘴及び脚は黑い。東部シベリア・滿洲・支那北部及び我が國で繁殖し、印度・マレー半島・モルッカ・ニューギネア及び濠洲の北部等で越冬。我が國では樺太以南臺灣までに極めて多く、古來、春來秋去の夏鳥として雁と對比せられ、又人家の軒合に巢を營むのを以て知られてゐる。食餌はすべて昆蟲類で、その小形のものを飛行中に啄食する。

類種に、あかはらつばめ・こしあかつばめ（＝とつくりつばめ）等があり、廣義にはこれ等を總稱して燕といふ。いづれも脚が弱いので地上の歩行には適しないが、飛翔は迅速（鳥類中で最も速いとされてゐる）且輕快を極め、最も顯著な候鳥の一である。

【馬】 ウマ（卷一、二七二頁を見よ）

【翼】 ツバサ　鳥類の飛翔器官で、他の脊椎動物の前肢に當る部分。その主要部をなすのは風切羽（外側のものを初列風切・內側のものを次列風切といふ）で、これを覆ふ短小・柔軟な諸羽は雨覆羽と呼ばれる。翼の骨は上膊骨・橈骨・尺骨・腕掌骨・指骨から成り、これ等の長短は翼を動かす速度に影響する。又、翼を動かす筋肉は胸筋であつて、翼を下方に打つ運動を掌る大胸筋、翼を上方に擧げる作用をなす中胸筋、及び前者を補助する小胸筋の三つに區別せられる。

【迅速】 ジンソク　すみやかなこと。極めてはやいこと。迅疾。

【大西洋】 タイセイヤウ　Atlantic Ocean（英）　ヨーロッパ・アフリカ及び南・北アメリカの四大陸の間に在る大洋。五大洋の一。面積は八、一六六〇、〇〇〇方粁で、全世界海面總面積の三分の一を占める。歐・米間を結ぶ世界交通上の公道をなす。

參考の爲、イギリスと新大陸（南・北アメリカ）諸港間の距離を左に掲げる。（リヴァープールはロンドンの西北二〇〇哩、サザンプトンはロンドンの西南八〇哩。）

リヴァープール―ケベック（カナダ）	二六三〇海里
サザンプトン―ニューヨーク	三一四〇海里
リヴァープール―コロン（パナマ）	四五三〇海里
リヴァープール―ヴェノスアイレス	六二六〇海里

【羽翼】 ウヨク　（一）とりのはね。つばさ。翼。（二）輔佐すること。又、その人。たすけ。こゝは（一）。

【渺茫】 ベウバウ　ひろ〳〵としてはてのないさま。

【往々】 ワウワウ　（一）折々。時々。（二）ところ〳〵。ちらほら。こゝは（一）。

【濃霧】 ノウム　濃度の高い霧。（卷一、二四三頁「霧」の項參照）

【疾風】 シップウ　（一）疾く吹く風。（二）氣象學に於ける風級の8。樹木の枝を動かす程度の風（卷一、一三三頁「秒速十五メートル」の項參照）。こゝは（一）。

【コーカサス】 Caucasus（英）　コーカサス山脈。中央アジアの裏海と黑海に挾まれたコーカサス地方を橫斷して西北から東南に連亙する高峻な山脈で、東は裏海西岸のア

プシェロン半島に起り、西北走して黒海東北岸のタマン半島（黒海・アゾフ海間に在る）に達し、ケルチ海峡に於て盡きる。延長一、四五〇粁、幅四八―二二五粁。山相はアルプスよりもピレネーに酷似し、高さは遙にアルプスに勝つてゐる。中央主脈に於て最も高峻で、エルブルース（海拔五六三〇米）・カスベク（五〇〇〇米）その他四〇〇〇米以上の萬年雪（雪線は平均三〇〇〇米）で掩はれた峻嶺が連亙し、その中に幾多の火山を含んでゐる（活火山はない）。谷々には數多の氷河を存し、中部主脈だけでも九百を算し、その總面積は約一、七〇〇方粁に達する。尙、西部山脈は豪雨を以て知られてゐる。

「コーカサス地方」は、北コーカサス地方と南部の後コーカサス聯邦の二部に分れ、前者はロシア・ソヴィエート共和國の一部をなし、後者は三共和國によつて組織せられ、ソヴィエート聯邦に加盟してゐる。

【氷河】　ヒョウガ　glacier（英）の譯語。內陸又は山地に於て、地表を蔽うた氷塊が地表面上を移動するものの總稱。雪原として堆積した雪は表面が融けてその水が次第に下部に集つて凍り、又下底まで溶融點に達しない寒地では次第に下部から凍つて上表には更に雪が積つて厚くなる。かくして凍結した氷はその重みにより傾斜面を流下して氷河を形成する。

極地方で地表を蔽うた氷原が、その中央部から四方に向かつて放射狀に移動するものを內陸氷河といひ、山地に於て見られるものを山嶽氷河といふ。內陸氷河の更に大なるものを大陸氷河といひ、グリーンランド・南極地方、又第四紀に北ヨーロッパ・北アメリカを蔽つてゐたものはこれに屬する。これの末端が海面に達し破碎されたものは氷山となつて海上に漂ふ。山嶽氷河はまた、山麓型・樹枝型・アルプス型・馬蹄型等に分けられ、ヒマラヤ・天山等の氷河は多く樹枝型氷河に、アルプス・コーカサス等のそれはアルプス型氷河に屬する。氷河の流速は、アルプスに於ては一日平均三分の一米乃至三分の二米を普通とするが、アラスカ・グリーンランドの大氷河では一日一〇米乃至二〇米に達するものもある。

【襲はれた】　オソはれた

〔襲ふ〕（一）著物を重ねて著る。（二）不意に乘じて攻めかゝる。（三）不意に訪問する。（四）うけつぐ。うける。こゝは（二）。

【悠々】　イウイウ　（一）遙なさま。遠いさま。（二）はてのないさま。無限に遠いさま。（三）ひまのあるさま。ゆつくりするさま。ゆつたり。こゝは（三）。

插圖「しぎの飛群」　はやぶさに追はれて亂れ飛ぶ鷸類。下村兼二氏が福岡縣有明海に於て撮影したもの。

插圖「渡り鳥の大群」　空高く渡り行くおびただしぎの大群。同じく下村氏が有明海に於て撮影したもの。

二　解釋

1　主題

渡り鳥が自然の威力の前に試みる大奮鬪。

2　構想

(1)　鳥類の生涯は一大奮鬪の生涯（初―五〇ノ五）。

(2)　鳥類の奮鬪生活の適例たる去來現象（五〇ノ六―終）。

イ　日本に於ける去來の時期と方向。

ロ　去來の距離。

ハ　去來の道筋。

ニ　去來の方法。

ホ　飛行の速力。

六　渡り鳥

へ　飛行の困難。

3　敍述

〔親鳥が其の雛や卵を愛育保護する天然其のまゝの狀態を直寫してゐるが、鳥の表情といひ、周圍の風色といひ、いかにも眞に迫つてゐて、これを見る人間は、禽鳥の一家親子の情合がいかに濃であり、いかに平和であるかを想像し、感歎せざるを得ない〕――鳥のことをいふのに「表情」といひ、「一家親子の情合」といふ。そしてそれを見てゐる者を「人間」といつてゐる。鳥が無心に營んでゐる家族生活を見ると、人間の營んでゐる家族生活の方がこれに及び難いのを反省させられる程だといふのである。殊に作者の所謂「渡り鳥」となつて、家鄉を離れ旅行してゐた當時の作者にとつては、一層その情合の濃さに心を惹かれるものがあつたであらう。

〔鳥類が右のやうな喜樂・平和の中に棲息するのは、其の生涯の或短時期に過ぎない。他の方面からみれば、鳥類の生涯は實に一大奮鬪の生涯であるといはねばならぬ〕――まづ一般に知られてゐる鳥類の生活の平和な一面を出して、あまり知られてゐない大奮鬪の一面を敍する準備としたものである。そこに目を瞠つて奮鬪生活を讀みすゝめさせる效果がある。

〔鳥類の奮鬪の最も激烈を極めるのは、殆ど不可抗の天然力に頡頏して、其の意志を貫ぬかうと努力する時である。かゝる場合に於ける奮鬪は、實に莊嚴なものである〕――かよわい禽鳥の身を以て不可抗の天然力に抗して、敢然として生活の意志を貫徹すべく努力する所に莊嚴な觀を呈するのである。

〔あの小さい雙翼の力を賴みに、地球の直徑よりも遠い距離を飛翔する勇氣と努力とは人間の想像以上である〕――誠に想像以上である。平常鳥に對して懷いてゐる愛らしいとか、小さいとかいふ感情だけでは間に合はなくなつて來て、その渾身の努力の前に頭を下げざるを得なくなるのを覺えるやうな事實であり、敍述である。

〔もし誤つて去來の公道から迷ひはづれる時は、種々な障害に遭つて、遂に其の目的地に達することが出來ずに死ぬのである〕――鳥類の去來にも、この道さへ愼重に構へて行けば間違ひないといふ道が先達によつて開かれ遺されてゐるのである。幾代もの經驗によつて、又幾多の母鳥や幼鳥の死によつて見出された道なのである。

〔鶉の如きは海上で疾風に遭ふと、これに抵抗して前進を續け、愈〻力が盡き、氣を失つて、水中に墜ちるのである〕――死力を盡くして果てる彼等の敢爲さにはたゞ驚く外はない。

〔疲勞の餘り、已むを得ず數日間は全く翼を收めることもあるが、それでも、やはり歩行によつて、絶えず前進を續けるのである〕――驚くべき努力である。「鳥の努力は隨分激しいもの」といふ作者の何度目かの歎聲が心から肯かれる。

三　批評

作者は渡り鳥に對して格別の興味を感じてゐるらしい。科學者らしい觀察の廣さと自由さとがこの文に爽やかさを與へてゐると共に、さういふ觀察や究明の底にこもつてゐる鳥に對する限りない愛情がこの文に一種の厚みを與へてゐることも見逃してはならない。隨つて又、その感銘には、單なる鳥類の奮鬪生活の認識として終ることの出來ないやうな何ものかを含んでゐることが內省せられる。

三　備考

一　指導の問題

知的興味の文である。渡り鳥の文學に現れたものは古來少くないが、かういふやうに、科學的立場からそれを全般的に

觀察したものは存在しなかつた。さういふ點で、生徒にとつては、知識としても新しい事實が少くないであらう。まづさういふ知識として系統的に理解することを學習の眼目として指導を試みるのが妥當な方法と思はれる。

それに伴なつて問題になつて來ることは、さういふ渡り鳥の習性を知的興味の對象としてゐる作者の世界觀ともいふべきものである。勿論、これだけの文からその全幅を窺ふことは不可能であるけれども、鳥類の家族生活の平和を敍し、又その去來に際しての奮鬪ぶりを述べるに當つて洩らされもし、又籠められてもゐる感慨によつて、その一端を推すことは出來ようと思はれる。作者の筆法が科學者らしい爽やかさ明晰さを主調としながら、時に道德的色調を帶びてゐることは否み難いものがある。併し、かういふ方面への追究は恐らくこの年齡の生徒の關心を有たない所であらう。隨つてかういふ方面を深く追究させることよりも、科學者らしい觀察の事實なり方法なりについての理解を十分ならしめることが、適切、且道德的方面への眞實な發展をも可能ならしめる指導であらうと思はれる。

二　參考資料

(一)　本文の理解を補ふに足るべき部分を原文の中から左に引用する。

鳥類が天然界の種々なる障碍に抵抗し其の目的地に達せんと努力奮鬪する狀態は上來見たる所にて略之を察知するを得るのであるが、此の去來の念願は實に强大なるもので、去來慾の勃發する時鳥を拘束する時は、鳥は堪へ難き苦痛を感じ如何かして籠外に脫せんと試み、遂に頭や嘴が傷きて血だらけになるも顧みず愈切に破籠を企つるものである。翼を切られた或る水鳥が移住慾を押へる事が出來ずして、步行して千餘哩の旅程に上つたと云ふ例もある。時としては移住慾が非常に强くなりて、其の爲めに親子の情は一時壓倒せられ、其の幼鳥が巢外に遊びに出た留守に、前後を顧みるの暇なく出發して長き旅路に就く鳥もある、斯う云ふ親鳥が安全に目的地に達して、移住慾が靜まつた時には遠隔の地に遺し置きたる幼鳥の事を思ひ出して嘸後悔をするであらうとダーウキンは言つて居る。

極めて平和喜樂の生活をなして居つた鳥が一夕奮然と感ずる所ありて、あらゆる愛著を斷ち、あらゆる危險を犯し、其の生命を賭して或る地點に向つて猛進すると云ふは至極不思議なる現象にて、是れは抑も如何なる理由から起るのであるか。之に對しては自然淘汰の方よりの解釋と生理上よりの解釋との二つがある。太古に於ては地球の北方の陸地は氷河が張り詰めて居つたのであるから、鳥類は多く南方の溫暖なる陸地にのみ棲息して居つたのであるが、鳥類の蕃殖が盛になるに從ひ食物が漸次に不足し、其の結果として生存競爭が烈しくなり、又一方に於ては氷河時代の去ると云ふ事があつて鳥類棲息の範圍が漸次北方に擴がる事になつたのである。併し生存力の弱い鳥は北方の氣候に耐へられずして死滅に歸し、北方の嚴なる氣候に抵抗するを得る鳥丈けが殘存する事になつたのである。そこで尙存鳥類は春夏の候には成る可く北方に居る方が競爭が少く生活し易いから、自然北方移住の習慣が出來、此の習慣が代々積み重り、遂に今日に於て春夏には北方に移住する事が天性となつたのである。併し秋冬になれば北方に生活する事は困難になつて來るから此の季節には南方に移住する習慣が出來、是も亦代々積み重りて遂に鳥類の天性となつたのである。ダーウキン、スペンサー、アルレン及びパルメンなど云ふ人々は斯の如く食物及び氣候が生活に及ぼす關係上から鳥の去來現象の說明を試みるのであるが、併し或る鳥類は冬期に於て食物の多き熱帶の地を去り却て北方の寒地に向ふ事もあるから、此の自然淘汰的遺傳說丈けではまだ十分の說明とは云はれない。

夫れで近來少壯の心理學者及び動物學者はもう一つの解釋を試みて居るのである。其の說によると一年內に於ける鳥の身體の生理的變化には二つの著るしき時期がある、卽ち生殖前期に於て、或は生殖期中に於ては身體に最大なる變化を生じ、脫羽期に於て之に次ぐの小變化を生ずるのである。而て生殖前期に當つて鳥類の音聲、羽毛、上冠、下冠其の他爭鬪の具の如きは最も完全なる程度に發達するのである。加之或る鳥は移住出發前に際し其の生殖機關が著るしく膨大するのである。此の生殖力の週期的增加に應じ全身に一種の生理化學的の變化を生じ、從來棲息し居たる外圍の境遇と順應する事が出來ざる樣になつて來るのである。其の結果鳥の性質一變し、是れ迄樂んで居つた土地氣候に對して何となく不滿足厭倦の情を生じ、生殖慾を滿足せしむべき風土に對し、一種の羨望の情を發するので、其の結果として南方移住が起つて來るのである。之と相反して居るのが脫羽期に於ける身體變化である。生殖期に於ける變化は

種族繼續を目的として居るのであるが、脱羽期の變化は寧ろ自己の保存を目的として居る。此の時期に於ては鳥は歌ふを止め、裝飾的羽毛は脱落し、雌に媚ぶるが如き求婚的擧動は止んで、却て孤獨非社交的の傾向を現し、或る鳥は仲間を避け或は穴に隱るゝのである。斯の如き脱羽期の變化は南方移住の完了せられたる後起り始むるものにして、此の身心の變動に對して南方棲息地の境遇は又堪へ難くなり、厭倦の情を催し來るので、北方移住を欲せざるを得ざる事となる。

如上生理的の解釋は鳥類の去來現象の基礎を一種の生理作用に求め、此の生理作用が神經を刺戟して南方移住或は北方移住を生ぜしむると說くのである。此の生理說と最初の自然淘汰說とを相合して考ふれば鳥類の奮鬪生活の起る原因は大略之を察知する事が出來るのである。

（二）鳥類移住の大要を、川村多實氏の動物生態學（岩波講座、生理學）から左に抄記する。

鳥の季節的移住卽ち渡りは東西共に昔から人が知つて居るが、西洋では中世の非科學的時代に、燕が池沼の泥中に越冬するとの迷信が行はれ、英國の有名な動物解剖學者ジョン・ハンター（J. Hunter）は之を確める爲に、中央に水槽を竝べた室內に燕を放つて試驗したと云ふ逸話が殘つてゐる。近頃は此移住がよほど明になり、特に初著者記錄法（first arrival recording method）、標識法（banding or ringing）が行はれて、徑路や時間が精確に知られるやうになつた。

さて一地方の鳥に留鳥、漂鳥、候鳥（冬鳥、夏鳥、旅鳥、迷鳥）の區別のある事は申すまでもなからう。或場合留鳥、候鳥の差は移住する距離の差異で、土地區劃を廣大に取れば候鳥も留鳥の中に入れられる。又越冬區域と繁殖區域とが一部相重なる場合、その場所では年中その種の鳥が見られる（個體は入りかはつてゐるが）ことになる。

移住の準備として多くの鳥は羽換を爲し、脂肪を貯へるは勿論、勢揃して飛翔の練習をやる。遠距離を旅する種には旅程に上つて後に羽換するものもある（かういふものは交尾も亦到著前に行ふ事が多い）。英國の鳥では若鳥が先に南方に向けて出發するが、米國では老鳥であることも多いといふ。北海のヘリゴーランドでは不具者（足が足らぬとか、尾、嘴の畸形のもの）が春は後から秋は先に渡ると云ふ。晝行くものは大形又は翼の强い雁、鴨、烏、燕、鷹の類、晝夜兼行のものは鵲、千鳥、鷗（雁、鴨も時に然り）で、薄暮に渡るものには「よたか」類がある。其他の鳥は凡て夜中に飛ぶものである。

徑路は種々あるが大體南北の方向で、北米よりは南米、歐洲よりはアフリカに、シベリヤよりは印度、東印度諸島、濠洲に行くが、西部シベリヤの鳥は西歐又はアフリカに行く爲にヘリゴーランド附近では殆ど東西に飛び、東亞の鳥も大陸の形に從ひ北東から西南に向ふ。南極地方の鳥數種に限り夏季（南極の寒期）に北方に向ふから、南米溫帶地方の海岸では冬と夏とに二度盜賊鷗が見られる奇現象を呈する。東半球を往復するものは海鳥を除けばグリーンランドから英國を經てアフリカに行くもの唯一種あるだけである。往復同じ路を通るのが多いが、中には環形を描くものもある。例へばカナダの鷸、千鳥は先づ東方に向ひ、ノバスコチアから大西洋を縱に二千哩二日間で一氣に飛び南米大陸の東方を南方パタゴニアまで往き、歸路はアンデス、ロッキーの山脈に沿うて北上する。

遠距離に往くものはカナダより南氷洋まで一萬一千哩を往復する「北極あぢさし」、カムチャッカより日本、東印度諸島を經て濠洲東方の諸島まで往く鷸、千鳥である。南米からボストン附近に往くにメキシコ灣を迂回する海鳥がある（之は元太平洋岸の鳥であつたため）。アラスカの鷸、千鳥は二晝夜で布哇に飛ぶ。二條の徑路を持つものもあつて、カナダで育つ「くろがも」類には一部は大西洋に他は太平洋に往つて越冬するものがある。同じくカナダの「しぎ」の一種（*Limosa fedoa*）は一部は大西洋岸を廻り、他は太平洋岸を廻つて共に中央アメリカに行く。歐洲の「かふのとり」も一部はバルカン半島からナイル河に沿うて、他はスペインからアフリカの西方を過ぎて共に南亞地方まで行く。又徑路の幅の廣いものと狹いものとがある。徑路は屢〻海岸線（例、地中海附近）、大河の本支流の走向（例、北米ミシシッピー河）等に一致するが、然し常に左樣とも限らない。濃霧の日又は暗夜にも迷はずに直線に進むのを見ると眼耳鼻などによつて路を定めるものでないことがわかる。（中略）

鳥の渡りの速度はその飛翔力に比して割合に遲く、大抵一日二、三十哩。我邦の燕の先頭が現はれる日は九州から東北までの間に八日の差があり、一日平均三十六里づゝ北進することになる。大抵初めの間に遲く、次第に速度を增し、後には一日百哩以上になるのが通則であるが、之は渡りが氣候の變化特に等溫線の進行に伴ふことが多く、この進行する模樣がその樣になつてゐるからである。高山や海を超える際は距離を伸ばすのが例で、蜂鳥や鶯科の極く小さい鳥がメキシコ灣や地中海上數百哩を一夜に飛ぶ。更に「ひたき」の

一種でアフリカからヘリゴーランドまで一夜に飛ぶものも知られてゐる。

鳥の飛行の高さは昔は過大に計算せられたが、今日は飛行家の目擊によつて精確に知られる。大體四百米以下で、二千米以上には稀に雲雀を、三千米以上には鷲を見るだけ。然し渡りの際は平時よりはよほど高空を飛ぶのである。之は氣流の變動を避くる爲であらう。

多數が群飛する事は彼等が渡りの途中災厄に遭つて死する際によく判る。卽ち狩獵者に捕殺せられ、記念碑、燈臺の如き人工建築物に衝突し（我邦近海では津輕海峽の燈臺、旅順白玉塔などで著しい）又は暴風雨に翻弄せられて一夜に何萬と云ふ個體が海に入り又は氷雪上に斃れる（北米大陸に其例が多い）のである。シベリヤの小鳥が印度に行く際にも海拔一萬五千呎以上の寒原を橫ぎり千古の雪を載いたヒマラヤ山脈の最低一萬八千呎の峠を越えねばならぬ。

七　快晴

河井醉茗

一　解題

一　本文

「紫羅欄花」に收められた詩の一つである。「紫羅欄花」（あらせいとう）は醉茗詩集の後をうけ、主として女性に與へる詩と昭和時代に入つて後の作とを集めた詩集で「阿羅世伊止宇」二十八篇、「詩の道」二十三篇が收められてゐる。（紫羅欄花一冊、昭和七年七月、東北書院發行）

二　作者

河井醉茗（すゐめい）。詩人。本名は又平。幼名は幸三郎。明治七年五月堺市旅籠町六番屋敷に生まれた。十五歲頃から新體詩に親しみ、雜誌「少年團」「いらつめ」等を愛讀し、新體詩・短歌・俳句の投書を始め、母の急死に逢つて悲痛の極、一層文學への志望を强くしたが、家庭の事情からその後の十年間を鄕里に商人としての生活を送るべく餘儀なくされた。その間詩作に不斷の努力を續け、雜誌「文庫」に寄稿して次第に認められ、やがて同誌の詩の選を囑せられるに至つた。三十三年遂に上京して「文庫」の記者となり、翌年處女詩集「無弦弓」を出版した。同年東京專門學校（早稻田大學の前身）に入學したが、三十六年中途退學。四十年までの十三年間、文庫派の詩の指導者として多くの新進詩人を誘掖し、傍ら雜誌「女子文壇」を主宰して女流作家の養成に力めた。翌年「文庫」を辭し、文庫派系統の若い人々を中心に自ら詩草社を起

し、約一箇年雜誌「詩人」を發行して目覺しい活躍をなし、初期口語詩運動に少からぬ功績を殘した。大正二年女子文壇社を去り、詩作を發表する傍ら婦人の友社・アルス等に編輯記者を勤めたが、現在は自由な文筆生活を營んでゐる。著作には「無弦弓」「塔影」「劍影」「玉蟲」「霧」「彌生集」「醉者詩集」「紫羅欄花」等の詩集及び詩文集がある。

三　採擇の趣旨

渡り鳥の生態を科學的に觀察しつゝ、そこに作者の道德的世界觀の片鱗を示してゐた前課を承け、題材は自然觀察から都會生活の觀察に一轉してゐるが、そこに新しい社會的道德觀を樹立してゐる點に於て一脈相通ずるものがある。この意味に於て、文藝的教材であると共に、社會的自覺を歌つた文化的教材でもある。

二　教材としての研究

一　註解

【快晴】　クワイセイ　空が氣持よく晴れてゐること。一點の雲もなくさつぱりと晴れ渡つてゐること。

【足どり】　アシどり　あるきぐあひ。あしつき。足のはこび。あしびやうし。

【中心】　チュウシン　(一)心の底。胸中。(二)まごころ。本心。(三)まんなか。中央。(四)物事の集注するところ。中樞。(五)有限直線に於て、その線上にあつてその兩端から等距離の點。圓又は球に於て、圓周上若しくは球面上のすべての點から等距離の點。こゝは(三)。

【潮のやうに吸ひこまれて】　時間に支配されてゐる人々が餘裕も躊躇もなく、目的の場所に向かつてひたすら急いでゐるさまが、外から見れば、自分の意志によつて足を運んでゐるといふよりも、何か强大な力によつて、潮水のやうに、押しよせては吸ひこまれてまき込まれてゆくかのやうに見えるのをいつた。

【塵埃】　チリ　(普通にはヂンアイと讀む。)(一)ものの粉末の飛び散るもの。あくた。ごみ。(二)けがれ。よごれ。(三)轉じて、けがれた世。俗界。こゝは(一)であるが(二)の意をも含んでゐる。

【いそいそ】　喜び勇むさま。氣のすゝむさま。かひ〴〵しいさま。

【時】　トキ　こゝでは、生涯のうちに再び繰返すことの出來ない、現在の生活に卽した具體的な時をいつてゐる。

【虛しい日】　ムナしいヒ　中味の充實してゐない日。無益な一日。意義のない日。

〔虛しい〕(一)中に物のない。內容のない。からな。(二)事實がない。あとかたがない。無根な。(三)效果のない。無益な。かひがない。(四)はかない。かりそめな。(五)欲心がない。心の淡泊な。

【目標】　モクヘウ　めあて。めじるし。

【場所】　バショ　こゝでは、働く場所、持場、の意。

【ビルディング】　building (英)　原語には建築物・建築法・建設等の意味があるが、我が國では、洋風の高層建築物、殊に一棟の內に多くの貸事務所などのある大建築物をいふ。

【街頭】　ガイトウ　まちのほとり。街上。

〔頭〕　ほとり。あたり。

【店頭】　テントウ　みせさき。

【廚房】　チュウバウ　くりや。臺所。炊事場。

〔房〕　へや。

【かひがひしく】

〔かひがひしい〕(一)詮(ひ)のあるさま。役に立つさま。(二)きび〴〵してゐる。はき〴〵してゐる。勇ましい。けなげな。まめやかな。こゝは(二)。

【幸福】　カウフク　(一)運のよいこと。(二)さいはひ。しあはせ。(三)心理學上では、人生の根本要求が滿足されて、不足感のない心の狀態。こゝは(二)。

二　解釋

1　主題

晴れた大都會の冬の朝、潮のやうに行進してゆく人々に伍して今日の仕事に向かつてゆく心の晴れやかさ。

2　構想

(1)　冬の晴れた朝、大都會の中心へ吸ひこまれてゆく人々の足どりの健かさ（第一・二節）。

(2)　私も、さつぱりした身なりで、いそ〳〵と仕事に向かふ（第三・四節）。

(3)　それ〴〵の人たちがかひ〴〵しく働いてゐる時、私も幸福に働く（第五節）。

3　敍述

〔ああ、よく晴れた愉快に晴れた朝〕――この「ああ」は音調を整へる爲の虚辭ではない。實感の溢れである。「晴れた」を二度繰返さずにゐられぬ程の感歎が籠つてゐるのである。「愉快に」といふ主觀をためらふことなくぶちまけてゐるのも生々と感じられる。

〔なんと多數の人が歩いてゐることでせう。みんな健かな足どりで……〕――大都會の朝を大觀すれば、誰しもこの驚歎の聲を發せざるを得ないであらう。どこから集つて來たのかと思はれる多數の人々が、しかも健康な元氣な足どりで行進してゐる。これは驚異の聲であると共に、又讃歎の言葉でもある。まことに、多數の人が大都會の中心目がけておしよせて行く有樣には、「潮のやうに」といふ外に形容のしようもない一種の莊嚴さがある。

〔私もその一人……〕――その多數の人の群の中に、自分自身を見出してゐるのである。人々と同じく、發剌と動いてゐる自分を意識してゐるのである。塵埃がかゝつてないのは髮だけではない。垢のついてないのは著物だけではない。頭の中にも胸の中にもそんなものは微塵もないのだ。疲勞・倦怠・惰性、そんなものは昨日の日と共に消え去つて、今生まれたもののすが〳〵しさで、晴れやかな冬の朝の街路の上を「いそいそと歩いて」ゐる自分を見出してゐるのである。

〔仕事は私を待つてゐます……〕――この足どりの彈力はどこから涌くか。それは待つてゐる仕事に外ならぬ。仕事をしに行くといふ喜が、「虚しい日ではない」といふ生きがひの感が、その歩みを輕やかにするのだ。

〔私には目標がある場所がある……〕――人々がかひ〴〵しく働いてゐる時、自分にも働く場所があるといふことは、そして國家に、社會に、人類に奉仕しつゝあるといふことは、自分が無用の存在でないといふことは、いちばんたしかな幸福の根源である。眞實な幸福はかくしてのみ味ははれる。

三　批評

都會生活を、特に勞働の場所としての都會生活を題材にしてゐる點が新しい。健康な感覺・思想を、單純・平明な語句を以て表現した詩である。

三　備考

一　指導の問題

歌はれてゐる題材は新奇でもなく所謂詩的でもない。極めて平凡な日常事に過ぎない。併しそこに見出されてゐる詩的感興は陳腐でもなければ、卑俗でもない。都會生活者の生活意識に潜んでゐる、健康な感覺と、新しい道德觀とを、所謂ラッシュアワーの足どりに見出してゐる所に、この詩の意義が存する。

用語の昵近さに心を許して、新しく生かされた言葉の獨自性をとりにがしてはならぬ。所謂詩語・雅語といふやうなも

のが使はれてゐなくとも、日常語が詩的な陰影を持つて使はれてゐるのである。「私を慰めてくれます」の「慰めて」にしても、平凡な語でありながら、深く靜かに心にしみ、內燃の力となる日の惠を表現するにいかにもふさはしくぴつたりしてゐる。「潮のやうに吸ひこまれてゆきます」の「吸ひこまれ」るの如きもこれ以外の表現はあり得さうもない。その他一つ〳〵の言葉が落ちついてすなほに生かされてゐる。

次に構想については、第一・二節に快晴の朝の大都會のまさに活動に入らうとする姿を寫し、第三・四節には、その中の一人としての自分を焦點として、內なる緊張を描き、第五節に於ては、多數の人々のそれ〴〵の活動と自己のそれとを關聯に置き、協同の中の一つとしての自己の場所を持つことに新しい幸福を見出してゐるのであるから、一節々々の意味の理解を進めて、全詩の機構を體系的に直視出來るやうに導くことが必要であらう。

かくして一語一句が新しく生かされ、一節々々が有機的關聯に措かれてゐることが理解せられるならば、この詩の主題が都會生活に對する健康な感覺と新しい理解から成立したものであることが眞に肯かれるであらう。作者が本詩を收めてゐる紫羅欄花の後書によれば、この詩集には「女性に與へる詩」を纏めたとあり、第五節の「それぞれの人たちが」の「人」は、原作では「女」であるけれども、かういふ題材をかういふ詩的感興で歌つた作が外にない爲に、「女」を一般化して「人」に改め、來るべき時代の青年に讀ませようとしたのである。作者がこの詩で「女」に與へようとしてゐる精神は、そのまゝ、來るべき時代の新人たるべき青年に與へる言葉としても、甚だしい違ひではなからうと信ずる。

二　參考資料

作者の詩人としての位置に關する批評を佐藤清氏の「『醉茗詩集』を讀みて」（「詩聖」第十八號）から抄出する。

河井醉茗氏はその詩作時代から言へば、さきの四詩人（藤村・晩翠・有明・泣菫）と同時代の人である。そして此の四詩人がとにかく名を爲して少年少女の口々に傳誦されるやうになつた時、醉茗氏は必しも世間的に盛名を馳せてはゐなかつた。けれどこの四詩人が盛名と共に詩作を廢した時、詩を棄てなかつたものは醉茗氏一人であつた。詩壇のはげしい變動の浪にさらはれずに、醉茗氏だけは依然として詩を作つてゐた。そして今も尙作つてゐる。此點に於て、醉茗氏は新詩を以て一生を貫いた唯一の詩人として、一人稀有の記錄を殘した人である。

醉茗氏の價値判斷は今後の批評家の手に任せてあるとしても、今日醉茗氏についてもう一つの明らかな事實は、醉茗氏の日本詩壇そのものに對する功績である。「少年輩何をか知らんや」と樗牛に罵られた「文庫」が事實に於て現代の日本詩壇の中堅となつてゐる多くの詩人の搖籃であつたことゝ、「文庫」は實に醉茗氏の開拓した詩の苗代であつたこととである。此の功績は醉茗氏の詩を外にしても、日本詩壇のあらん限り永久に醉茗氏に歸せらるべき感謝でなくてはならない。

八　潮待つ間

幸田露伴

一　解題

一　本文

「潮待ち草」の卷頭「干潟の舟」の全文である。「潮待ち草」は「干潟の舟」以下四十八篇の隨筆を集めたもので、露伴全集第十一卷に收められてゐる。（露伴全集　全十二卷、岩波書店發行）

二　作者

幸田露伴。小說家・文學者。本名は成行。幼名を鐵四郎といつた。慶應三年七月幕臣幸田成延の子として、江戸神田俗稱新屋敷に生まれた。東京女子師範學校（東京女子高等師範學校の前身）附屬小學校を歷て、東京府立中學校に進み、轉じて菊池松軒の漢學塾に程朱の學を學び、傍ら老莊を愛讀し、佛書に親しみ、支那小說に興味を持ち、江戸時代の戲作・稗史類をほゞ涉獵した。明治十七年電信技學校を卒業、翌年北海道後志國余市驛（現余市郡）に電信技手として赴任したが、二十年官を棄てて出京した爲父の怒に觸れ、その憂悶を遣る爲に試みに小說の筆を執り、二十二年一月雜誌「都の花」に處女作「露團々」を發表、橫溢せる奇才と異彩ある筆致とによつて文名を認められ、九月出世作「風流佛」を發表して新興文壇に確乎たる位置を獲得した。以後常に理想主義的態度を持して創作に精進し、主觀的・瞑想的な作風を洗練し、明治後期まで絕えず作品を發表して文壇に重きをなし、殊に一時は尾崎紅葉と竝んで所謂紅露の對立時代を現出し、却つて硯友社を壓倒するの概があつた。この間、二十二年には紅葉と共に讀賣新聞社に入社し、二十九年には春陽堂と圖つて「新小說」を再刊し、四十一年から翌年にかけて京都帝國大學に支那文學を講じ、四十四年には文學博士の學位を得た。大正年代に入つてからは、何時となく創作の筆を執ることが少くなり、釣魚・菊作り・將棋等の趣味生活に耽り、史傳・隨筆・考證・修養等の文章を公にすることが多くなつた。著作には、小說に「露團々」「風流佛」「一口劍」「いさなとり」「五重塔」「血紅星」「ひげ男」「二日物語」「天うつ浪」、隨筆に「讕言」「長語」「洗心錄」「努力論」「修省論」「潮待ち草」等があり、その他史傳・新體詩・戲曲・紀行等にも勝れたものが多い。

三　採擇の趣旨

前課が一種の生活哲學に觸れた點のある詩であつたのを承けて、本課は人生に於ける體驗の深さから見出された生活哲學を主題として隨筆を揭げた。

實踐を通して練り上げられた思想、作家生活に於て洗練せられた文體、古典研究で熟達してゐる措辭の的確、何れに於ても傑出した文藝的教材であり、文化的教材である。

二　教材としての研究

一　註解

【潮待つ間】　シホマつマ

【舟を行る】　舟を進ませる。舟を操縱する。

〔行る〕　ヤる　「遣る」とも書く。（一）行ふ。爲す。（二）操縱する。進ませる。行かせる。（三）（文を）綴り作る。

【間切る】　マギる　（一）波間を切つて舟を進める。（二）側へ　潮待つ間

面から來る風を斜に帆に受けて舟をやる。逆風の時、眞直に進まず、帆を適當に操り、時宜によつては迂曲轉回しながら舟を進める。こゝは（二）。

【工夫】　クフウ　（一）手段方法を求め計ること。思ひめぐらすこと。くめん。さんだん。思案。心匠。（二）轉じて、精神の修養に心を用ゐること。修養。鍛錬。こゝは（一）。

【押切る】　オシキる　（一）押して物を斷ち切る。（二）困難を排して目的を果す。押しとほす。（三）絶えず櫓を押しつゝ波を切つて舟を進める。こゝは（三）。

【意地】　イヂ　（一）佛語。意とは六識（對象認識の主體としての眼・耳・鼻・舌・身・意）の第六、卽ち意識で、一身を支配するもの。地は能生の義で、一切を生ずる故にいふ。（二）こゝろね。根性。（三）思ひこんだことをどこまでも通さうとする心。人に逆らはうとする心。いきぢ。氣概。こゝは（三）。

【底りて】　ソコりて

〔底る〕　潮がひいて海底が現れる。ひかたとなる。

【遠淺】　トホアサ　海又は川の岸より遠方まで水の淺いこと。又、その所。とあさ。

【干潟】　ヒカタ　潮の干た潟。斥鹵。

〔潟〕　（一）海の一部が砂洲・砂嘴等の爲に大海と絶緣されて出來た湖沼。狹い水路によつて外海に連なることが多い。潟湖。（二）環礁によつて取圍まれ、外海との交通を絶たれて淡水性になつた湖水。環礁湖。

【舟を操らん道】　舟を操縱すべきてだて。

〔操る〕　アヤツる　（一）絲を附け物陰から引いてさまざまに動かす。（二）裏にかくれてゐて事件を巧みに變化させる。（三）巧みにあつかふ。程よくあしらふ。操縱する。こゝは（三）。

〔道〕　こゝでは、てだて、方法、手段、の意。

【あだに】　空しく。徒らに。

〔あだ〕　（一）むなしいこと。實のないこと。むだ。（二）はかないこと。かりそめなこと。（三）いたづらなこと。浮いてゐること。

【心の煎らるゝ】　心がいらだつ。心がいら〳〵する。

〔煎らる〕　イらる　「焦らる」「苛らる」とも書く。いらだつ。いら〳〵する。じり〳〵する。

【纜】　トモヅナ　艫（とも）の方にあつて舟をつなぎとめる綱。

【舟を繫ぐべし】　舟を繫ぐがよい。

〔べし〕　推量の助動詞。こゝでは、適當・當然の意を表す。

【こゝを以て】　かやうなわけで。この故に。それ故。

【あせる】　（卷一、一五三頁「焦つて」の項を見よ）

【居坐りたる舟】　キスワりたるフネ　居すわつて動きのとれなくなつた舟。

〔居坐る〕　「居据る」とも書く。（一）一所にゐて進まず、退かない。坐つたまゝ、その場所から動かない。（二）そのまゝで變らない。動搖しない。

【心長閑に】　ココロノドカに　心しづかに。ゆつくりおちついて。

【足もつれ】　足の運びのはか〴〵しくないこと。

〔もつれ〕　縺（もつれ）　（一）結ぼれて解けぬこと。入り雜つて亂れること。（二）どた〳〵。葛藤。紛糾。

【舟道具】　フナダウグ　船舶の用具。舵・帆・櫓・錨等の類。船具（せんぐ）。

【檢め】　アラタめ

【愚し】　オロカし　おろかである。愚鈍である。ばからしい。

【爲さでかなはぬ】　どうしても、しなくてはならない。

〔で〕　「ずて」（「ず」は打消の助動詞、「て」は助詞）の約。動詞・助動詞に添へて打消の意を表し、上下を接續するに用ゐる。

〔かなはぬ〕　（一）力の及ばない。なし得ない。（二）なさねばならない。やむをえない。よんどころのない。

【心のあせらるゝ】　氣のいらだつて來る。

〔る〕　可能の助動詞。こゝでは、動作の自然に起る意（自發）を表す。

【あるべくもなし】　ある筈もない。

〔べし〕　こゝでは、當然の意を表す。

〔も〕　（助）　こゝでは、强めを表す。

二　解釋

1　主題　干潟の舟について老巧な舟人が語つた、暗示に富んだ言葉。

2　構想

(1)　干潟の舟は操る道なく、あだに心の煎られるものだ（初―六三ノ六）。

(2)　それについての老舟人の訓言（六三ノ六―終）。

イ　事前の用意。

ロ　事後の處置。

(イ)　時を待つこと。

(ロ)　待つ間を利用すること。

3　敍述

〔間切るといふ工夫〕――自然力と戰ふ舟人の戰術であり、術語である。一語によりその體驗の深さが響き出てゐる。

〔押切るといふ意地〕――これ亦自然との奮鬪が生んだ陰影を有つた術語である。特に前者を「工夫」といひ、後者を「意地」といつてゐる上にも、それ〴〵の語感が生かされてゐることが感じわけられる。

〔遠淺の海のことごとく干潟となりたる時のみは、意地にも工夫にも舟を操らん道なく、あだに心の煎らるゝものなり〕――今度は「間切る」わけにも行かず、「押切る」すべもない、絶體絶命の境に措かれた焦心を問題として提出したのである。勿論それは舟のことであると共に、人生一般のことでもある。舟のことに卽して人生のことが暗示せられてゐるのである。

〔老いて物事に巧者なる舟人に問ひけるに〕――さういふ根本問題を問はれるにはそれだけの資格を具へた舟人でなくてはならぬ筈である。それをかう書いてゐる所に、實踐から來る智慧を尋ね、體驗によつて自證せられた判斷を求めてゐることがわかる。

〔舟人打笑ひて〕――「あゝあのことか、それならば」といふやうな問題の理解と、それに對する解決の自信から發する笑である。

〔我等は繫ぐ時に解くことを思ひて繫ぎ、解く時に繫ぐことを思ひて解く〕――眞理は平凡な所にある。眞理は公開せられてある。併しその平凡なことを、公開せられてゐるものを、見出すことが容易でない。さういふ困難や焦慮は陷つてから脫しようとするよりも、陷る前に避けよといふ。いはれてみれば平凡である。わかりきつてゐる。併しそれを見出すのは體驗でなければならぬ。

〔……、時と潮とを待つべし。潮を待つは愚しけれども、待たぬよりは賢きわざなり〕――人力で出來ないことは自然に待つ外はない。「待たば必ず來べき潮」であるから、それを待つのが最善の道である。そこに、焦慮は化して餘裕となる。

〔潮待つ間に爲すべきことあるを見出して之を爲せば、たゞ時の足らざるを覺ゆるのみにて、更に心のあせらるゝことなどあるべくもなし〕――「あだに心の煎らるゝ」代りに、「必ず來べき潮を待つ」餘裕を見出せば、待つ間に爲すべきことはいくらも見出される。しかも自然隨順の活作用は、單なる餘裕の發見に止らないで、あらゆる時を生かす眞の生活に徹しさせる根柢を成すものであることを示してゐる。「若し既に干潟に居坐りたる舟となりたらんには、我等なりとて、其の場に臨みて何の手段のあるべき」といひながら、なほかつこれだけの驚くべき働が現れるのである。

これをこそ眞に自在力といふべきではあるまいか。

「おもしろき言葉なりと思ひしかば今に忘れず」――老舟人の訓言に深い眞理を見出していつてゐるのである。感傷せず、教訓せず、「今に忘れず」とだけいつてゐる所に、作者の力が籠つてゐる。「おもしろき言葉なり」の「おもしろき」は單なる「興味」ではない。關心を惹かれた意であり、含蓄の深い意であることといふまでもない。

三　批評

一技一能の極意に達するといふことは、やがてあらゆる技能の極意に通達し、人間生活の普遍的な原理を把握するものであるといふ體驗を披瀝した事例である。東洋的な、特に中世的な生活哲學の新しい自覺を表現したものである。

三　備考

一　指導の問題

「潮待つ間」の論者は一介の老舟人に過ぎない。徒然草の作者ならば「あやしき下萬なれども聖人のいましめにかなへり」と讃歎する所である。それに對して本文の作者は、「おもしろき言葉なりと思ひしかば今に忘れず」といつてゐる。讀者たる生徒は何をいはうとするか。これが學習の究極である。併し、そこまで達するには辿らなくてはならない過程がある。

學習過程としては、讀みと註解の先行しなくてはならないことはこゝにいふまでもない。そしてかういふ文體には、恐らく多くの生徒が親しみを感じにくいであらうから――のみならず、やゝもすればこの落著きぶりに反撥心をさへ起しかねないであらうから、それが取去られて、虚心に讀め、文體にも熟して來るまでの讀みを行はせることが、指導の力を用ゐるべき基礎的な學習である。

解釋の順路は、まづ構想を見させることに始るべきであらう。そして敍述の問題に進み、一語一句の有する陰影を見究めさせ、明確に理解させた上に、主題を考へさせるのがこの教材に適した方法かと思はれる。

教訓を教訓として抽象し、これを知識として注入する如きは、學習指導の最も拙なるものといふべきであらう。

二　參考資料

同じ「潮待ち草」の三十四にある「鋸」といふ一篇は、或工人との雜談に取材したもので、その問題としてゐる所は別であるけれども、取材の方向もそれを發展させる仕方も、著しく本課を思はせるものがある。今、左に引用する。

予年ゆかぬ頃、鋸を使ひけるに、鋸しば〳〵截き割らんとする材に咬はれて前へも後へも動かずなる事の有るをいと悶かしく口惜しく思ひければ、或る時工人と雜談しける因に、鋸といふものは其の齒もて材を截るなり、長ければ齒を增す故に長さは如何ほども長かるべし、幅は用無きに近し、幅闊きがためには摩擦もおのづから多く力も空に費すべく、かつ又材に咬まれて困ずる事おほし、幅狹く造りたらば宜かるべきを、と云ひければ、工人腹をかゝへて大に笑ひ、鋸の材を截るは如何にも齒の働きなり、されど其の幅もまたいと大切なり、漸く截り込むに及びて幅といふものの有りて鋸を右にも傾かしめず左にも傾かしめざればこそ眞直に深く截り込むことの易きなり、さればいよ〳〵深く切る事を主とする鋸はいよ〳〵幅闊く造るなり、木挽の用ふるものを見て知り玉へ、鋸のみにはあらず、凡そ刃物は皆其の刃にて物を截るには遊無けれども特に幅闊く造れるものは、皆其の幅の助けをもて歪まず深く切り込む事を得る也、疊庖丁・煙草庖丁・豆腐庖丁皆同じ、之と反對に鋸の中にても丸き孔などを截き明くるに用ふる引廻しといふは、右にも左にも自由自在に屈曲して截り込み得る爲に其の幅いと狹く造りあるなり、木に咬はれて困ずると云はるゝは、持つ手の力の入れやう右の方に過ぎ左の方に過ぎて、千鳥の歩む樣に切り込みたまふが爲にて、手の惡きなり、鋸の幅あるが爲にあらず、曲りて截り込まぬやうにと造りある闊幅の鋸を手にしてさへ其のやうに曲りて切り込みたまふ方の、曲りて截り込み易きやうにと造れる幅狹き鋸を手にしたまはゞ、

如何ばかり捩れ歪みて切り込みたまふべきや測り知るべからず、且幅は長さを支ふ、幅無ければ長き能はず、それのみならず幅あればいつまでも目の磨り込みに堪へて自づから永く用に立つべし、此等の利皆いづれも輕からぬを知りたまはで、鋸の形の論など仕玉ふは苦だ所以無しと論し異れたりき。其後ひそかに考ふるに、實に何事にも一わたりの論より云へば用無きがごとくにして、其の實大なる功をなすことあるもの少からぬを覺え、鋸の齒のみを大切なるものと思ふやうなる考へは年々に薄らぎ薄らぎぬ。

九　父の物語

新井白石

一　解題

一　本文

「折たく柴の記」三卷のうちの上卷から採つた。「折たく柴の記」は作者が享保元年に致仕し、寵遇を蒙つた將軍家宣の五回忌に當る同年十月十四日に筆を起し、父母の事から始めて、家宣を輔佐して幕政に參した一代の事歴をのべた國文體の自敍傳である。尙、題號は後鳥羽院の御製「思ひ出づる折りたく柴の夕煙むせぶもうれしわすれがたみに」から出てゐる。作者自筆本、新井太吉氏藏。新井白石全集第三卷所收。（新井白石全集　全六卷、國書刊行會發行）

二　作者

新井白石。儒者。本名君美、初名璵。字は在中・濟美。通稱與五郎・傳藏・勘解由。別號紫陽・錦屏山人・天爵堂。明暦三年（一三一七）二月、江戸柳原の藩邸に生まれた。父は正濟、上總國久留里（現千葉縣君津郡久留里町）の城主土屋利直の臣で、母は坂井氏の女であつた。白石は幼にして穎悟、神童を以て稱せられた。延寶三年（十九歳）父が土屋家を辭して浪居し、彼も窮乏の裡に勉學した。天和二年の春、大老堀田正俊に仕へ、貞享元年（二十八歳）木下順庵の門に入つた。元祿四年（三十五歳）の秋、堀田家を辭し、淺草に書を講じて、口に糊すること二年餘、同六年の暮、師順庵の推擧によつて甲府侯徳川綱豐（後の六代將軍家宣）の儒官となり、眷遇極めて厚かつた。寶永六年（五十三歳）家宣が宗家を嗣ぐや、政務に參與し

て獻替頗る多く、正德元年一介の儒生を以て從五位下筑後守に敍任し、權勢一時朝野を壓した。翌二年家宣が薨じた後も、幼將軍家繼を輔けて更新・釐革の政を施した。朝鮮使節接待の改正、長崎貿易の制限、貨幣の改鑄等はその主なる功績である。享保元年吉宗が將軍職を繼ぐに及んで、意を失つて退隱し、讀書・著述に晩年を送つた。彼の學問は、歷史・地理・言語・故實、その他各方面に亙つて至らざるなく、一面詩に長じ、また國文に秀で、「藩翰譜」「折たく柴の記」などは、獨自の妙趣を具へて他の企及を許さない。その他國語學方面に於ても、語原・綴字法などの上に於て甚大な貢獻をなすところがあつた。享保十年（二三八五）五月、江戸千駄ヶ谷に歿した。享年六十九。明治四十年正四位を贈られた。著書には「折たく柴の記」の外「藩翰譜」「古史通」「讀史餘論」「東雅」「東音譜」「同文通考」「西洋紀聞」「采覽異言」「白石遺文」等があり、すべて新井白石全集に收められてゐる。

三　採擇の趣旨

前課を承けて、深く確な生活哲學の體現者の言行を敍した文を掲げた。文藝的教材であり、國民的教材である。

二　教材としての研究

一　註解

【父】　白石の父、新井與次右衞門正濟（まさなり）。慶長六年（二二六一）に新居勘解由の子として生まれ、四歲で母を失ひ、九歲で父に死別して、兄のはからひで人に養はれたが、十三歲の時單身江戸に出で、三十一歲の時久留里の土屋利直に仕へ、後には司察（當時目附の職といふ）となつて江戸にゐた。延寶三年利直が歿して致仕するまで重用せられ、利直が駿府城・大阪城の加番に命ぜられた時にはこれに從ひ、よく大任を果さしめた。利直の歿した翌年七十六歲で致仕したが、その後も祿を給せられ、剃髮して淺草の報恩寺に庵を結んで住んだ。後、主家の後嗣の問題で厄に遭ひ祿をとめられ、父子共に禁錮せられた。天保二年（二三四三）、白石が古河の堀田正俊に出仕することとなつて間もなく歿した。享年八十二歲。身を持すること嚴格で、白石の大成はこの父による所が多かつた。

【物語】　モノガタリ　こゝでは、ものがたること、話すこと、はなし、談話、の意。

【致仕】　チシ・チジ　(一)任官をやめること。官職をしりぞくこと。辭職。(二)「致事」に同じ。七十歲の異稱。禮記、曲禮に「大夫七十而致事（ニシテスヲ）」とある。こゝは(一)。

〔致〕　こゝでは、歸還する、納める、の意。

【事にふれて】　事にあたつて。事に際して。こゝでは、ある時に、といふほどの意。

【のたまひたりしには】　おつしやつたことには。

〔のたまふ〕（卷一・二九二頁「またのたまふこともなし」の項を見よ）

〔たりき〕　完了の助動詞「たり」に過去の助動詞「き」の重つたもので、過去に完了したことを表す。

【蘆澤】　アシザハ　傳未詳。

原文には、本文につゞいて「今は戶部もうせ給ひぬれど、はじめ、我申せしことばの、むなしからざるやうに、つかへまゐらせよと思ふなりと、のたまひたりき、これは、かの人久しくして、また酬酒の事ありしが故なり」とある。

【父におくれしを】　父に死に別れたが。

〔おくる〕　後る　こゝでは、生き殘る、死に後れる、の意。

【遺領】　ヰリャウ　死後に遺つた所領。死後に遺した領地。

【近くめしつかはれしに】（戶部が）お側近く召使はれたが。

〔めしつかふ〕　めして身近く使役する。

〔めす〕　召す・徵す　(一)「呼び寄せる」「招く」の敬語。(二)「とり寄せる」の敬語。(三)召出して官職

を授け給ふ。

【それより】こゝでは、その後、の意。

【戸部】コホウ・コブ　民部省の唐名。こゝでは、民部少輔土屋利直をさす。

土屋利直は、通稱平八郎。上總の久留里城主、忠直の子。慶長十二年（一二六七）に生まれ、十七年遺領を繼ぎ、十一月始めて德川家康に見え、外山と號し、伽羅を賜はつた。元和元年大阪の陣には命を受けて小田原城及び箱根關を警衛し、七年には近習となり從五位下民部少輔に敍せられた。寛永二年十二月（將軍秀忠の時）封地の内新墾の田を合はせ二萬千餘石の朱印を授かり、正保三年には將軍家綱自筆の「水波」の二字を賜はつた。延寶三年（一三三五）閏四月歿。享年六十九。

「民部省」は、令制の官廳で「たみのつかさ」とも訓む。太政官八省（中務・式部・治部・民部・兵部・刑部・大藏・宮内）の一で、人口の調査、租庸調の受理、課役の免除、圖帳の作製等すべて民事に關する事を掌つた。官廳は大内裏太政官の南方美福門大路の西にあつた。職員は卿・大輔・權大輔・少輔・權少輔・大丞・少丞・大錄・少錄・史生・省掌・使部・直丁から成つた。

【打刀】ウチガタナ　戰場に於て敵と打ち合ふ料とした刀。刺刀（組打等の場合人を刺す料にしたもの）の對。こゝでは、所謂「大小」の大の方をさすと見てよからう。

古へは武士も專ら太刀を佩き、鎌倉時代には、太刀は從者に持たせて專ら刀のみを腰に差したが（この時代には太刀が卽ち打刀であつた）、後刀が發達して太刀は次第に廢れ、長さ一尺二三寸の刀に鍔をつけて隻手打の打刀に用ゐ、これを鍔刀又は打刀と稱し、別に組打用の刺刀として鍔のない短刀（五六寸乃至一尺位）を身に帶びて、これを鞘卷又は腰刀と稱した。然るに室町時代の末頃から、腰刀が次第に長くなり（一尺以上）且鍔を生じて事實上打刀の用をなし、刺刀としては別に馬手差が現れ、遂に織豐時代以後は、大小と稱して武士は必ず刀（二尺二三寸乃至二尺八九寸）と脇差（一尺二三寸乃至一尺八九寸）とを腰に差すに至り、德川時代に入つて全く服制化した。（隨つて後世打刀といへば刀、腰刀といへば脇差をさすと見てよい。）但し、屋内では脇差のみを帶して人と應對し、主君又は貴人の身邊に伺候する際は脇差をも脱する慣であつた。

【横たへて】

〔横たふ〕（一）横にする。横に置く。（二）横にして持つ。（三）横に帶に佩びる。こゝは（二）。

【おはします】（卷一、三八三頁を見よ）

【氣色】ケシキ　こゝでは、顏のやうす、かほいろ、顏色、の意。（卷一、二九三頁「驚くけしきもなし」の項參照）

【常にかはりぬ】いつもとちがつてゐる。

【腰刀】コシガタナ　こゝでは、脇差をさすのであらう。（前頁「打刀」の項參照）

【手づから】（一）わが手で。自分で手を下して。（二）みづから。自身で。自分で。こゝは（一）。

〔づから〕（接尾）名詞に添へてこれを副詞化し、そのもの自身、又はそのもの自身から、の意を表す。「心づから」「身づから」「己づから」

【誅すべし】成敗する積りだ。

〔誅す〕チュウす　（一）罪ある者を殺す。成敗する。仕置に行ふ。死刑に處する。（二）兵力を以て惡人を攻めうつ。

〔べし〕こゝでは、決意を表す。

【それにさぶらふべし】そこにゐなさい。

〔それ〕こゝでは、自分からやゝ離れた場所を表す代名詞。そのところ。そこ。「それなる人」

〔さぶらふ〕「さもらふ」の轉。（一）伺候する。はんべる。（二）「あり」の敬語。（三）助動詞の如く他の動詞に添へて尊敬の意を表す。

〔べし〕こゝでは、命令を表す。

【やゝありて】少しして。暫くして。

〔やゝ〕（一）徐にそろ〳〵といふ意。（二）次第に少しづつ進むにいふ語。だん〳〵。やう〳〵。（三）物事の程度をいふ語。いくらか。すこし。よほど。だいぶ。

【いらへ申す】返答していふ。
〔申す〕こゝでは「言ふ」又は「告ぐ」の敬語。
【思ふ所】考へてゐること。考へ。意見。
〔所〕こゝでは、指示する點又は物事、の意。
【仰せられしほどに】仰つしやつたので。
〔ほどに〕「ほど」に同じ。接續の助詞のやうに用ゐて、程度・時間・理由・原因を表す。「さぶらふほどに」（六八ノ七）・「のたまひしほどに」（六八ノ八）
【さん候】さんザフラフ　「さん」は「然に」の音便。應諾するに用ゐる敬語。さやうにて候。さうでございます。
【莫大】バクダイ　「これより大なるは莫し」の義。極めて大きいこと。
【主恩】シュオン　主君の恩。主人の恩惠。
【報いまゐらせぬこと】お報い申さないこと。
〔まゐらす〕（一）さしあげる。進上する。たてまつる。（二）動詞の下に重ねて助動詞のやうに用ゐ、尊敬を表す。こゝは（二）。

【世のつね】世の中につねにあること。世間なみ。普通。尋常。
【如くしては】如くあつては。如くでは。
【叶ふべからず】よくない。さういふことではいけない。
〔叶ふ〕カナフ　（一）善くあふ。ふさふ。つりあふ。あてはまる。適合する。相應する。（二）匹敵する。相及ぶ。（三）願ひが屆く。思を遂げる。思ふ通りになる。成就する。（四）成しうる。堪へる。よくする。
【天性不敵なるものの】（蘆澤は）天性不敵な者で、の意。
〔天性〕テンセイ　（卷一、三四四頁を見よ）
〔不敵〕フテキ　勢のあたりがたいこと。大膽で物に畏れないこと。
【をこ】烏滸・痴　笑ふべきほどに愚かなこと。たはけ。あはう。
【振舞】フルマヒ　（一）おこなひ。みもち。行狀。（二）もてなし。馳走。饗應。こゝは（一）。
【奇怪】キクワイ　（キックワイと讀む場合もある。）（一）圖りがたく怪しむべきこと。不思議。（二）法に外れたこと。不都合なこと。不埒。違法。こゝは（二）。
【仕出して候ひぬらん】しでかしたことでございませう。
〔仕出す〕シイダす　（一）し起す。なしはじめる。しいでる。（二）一事をなしとげる。しでかす。
〔らん（む）〕現在の推量を表す。
【年たけ】年をとり。
〔たく〕長く　こゝでは、盛りになる、十分になる、高くなる、の意。
【ものの用】事の用。何かの用。役。
〔ものの〕名詞の上に極めて輕く添へて用ゐる語。事の。「ものの譽」
【たたぬもの多く候か】たたないものが多いかと心得ます。
自己の判斷は決つてゐながら、婉曲にする爲に、斷定を避けて、疑問の形にしたもの。
〔たつ〕こゝでは、使用に堪へる、用をなす、の意。

【存じめぐらし】思ひめぐらし。あれこれと考へ。熟考いたし。
【恐れ思ふ所に候】恐縮に思ふ次第でございます。
〔恐る〕こゝでは、物體ないと思ふ、たふとく思ふ、はゞかる、いたみいる、の意。
【面】オモテ　（私の）顏。
【血に飽きて】血に飽滿して。思ふ存分血をすゝつて。
【胡頽子】グミ　茱萸とも書く。（卷一、一八九頁「茱萸」の項參照）
【袖にして】こゝでは、袖に入れて、袖に入れ持つて、の意。
【罷り歸りて】（家に）歸つて。
〔罷る〕マカる　（一）「退出する」の謙語。（參るの對。）（二）轉じて「參る」「行く」の謙語。（三）みまかる。死ぬ。死に失せる。（四）ある語の上に添へて謙遜又は強めを表す。
【かたらひて】相談して。

〔かたらふ〕　語らふ　（一）語り合ふ。互に話す。相談する。（二）親しく交る。交際する。（三）男女互にいひかはす。契る。約束する。（四）他を說いて仲間に引き入れる。（五）かけあつてたのむ。誂ふ。

【斷たしめて】　やめさせて。

〔斷つ〕　タつ　（一）切り離す。裁斷する。（二）とゞめる。やめる。つゞけない。（三）緣をきる。關係をやめる。（四）終らせる。亡す。つくす。（五）遮る。隔てる。

〔しむ〕　使役の助動詞。

【諫めし事どもおこたらず】　諫めることなどに於ておこたらなかつた。たゆまず諫めた。

【父の職】　蘆澤の父の職をさす。

いかなる職であつたかは未詳。

【仰せ蒙りたりき】　（襲げと）御命令を受けた。

〔仰せ〕　オホセ　（一）おほせること。おいひつけ。御命令。（二）おことば。おはなし。

白石朋ヲ薦ム　（漢文教材）

【朋】　トモ　同門のとも。

白虎通に「同門曰朋、同志曰友」とある。

【薦ム】　ススム　推薦する。推擧する。

【少クシテ】　ワカクシテ　（作者參照）

【木下順庵】　キノシタジュンアン　江戸初期の儒者。名は貞幹。字は直夫。通稱は平之允。錦里・敏慎齋・薔薇洞等と號した。私に諡して恭靖先生といふ。元和七年（二二八一）京都に生まれ、五六歲で書を讀み字を學び、神童の名があつた。十三歲の時太平頌を賦し、烏丸光廣に呈した。後、松永尺五の門に入つて性理の學を修め、長じて柳生宗矩に從つて江戸に遊んだが志を得ずして京都に歸り、爾來二十餘年東山に屏居して子弟を敎へた。その名天下に聞え、臺閣・公卿爭つてその門に學び、貝原益軒の如きも以て先達と稱した。寛文四年加賀侯に聘せられるや、師松永尺五の子永三を推し共に用ゐられた。天和二年（六十二歲）將軍綱吉に召されて幕府の儒官となり、國史を修し、將軍の周易の講筵に侍した。性至孝で父母の喪に當つては泣血三年、常に先塋を遠ざかるのを恨んだといふ。弟子を敎へて能くその器をなし、新井白石・室鳩巢・雨森芳洲・榊原篁洲・三宅觀瀾等所謂木門の十哲を出した。元祿十一年（二三五八）十二月歿。享年七十八。世に錦里先生といつた。詩文に長じ、その著に錦里文集・班荊集がある。明治四十二年九月正四位を追贈せられた。

【門ニ入ル】　モンニイル　弟子となる。入門する。

【學成リテ】　學問が成就して。

【志ヲ得ズ】　望み通りにならない。思ひ通りに官途につけない、の意。

〔志〕　ココロザシ　（一）心の向かふこと。心に定めた目的。心に立てた信念。（二）厚意。深切心。（三）志を表して物を贈り、又は事を爲すこと。（四）亡者の忌日の香奠返しとして物を贈ること。

【加賀】　カガ　こゝでは、加賀藩主、の意。

當時加賀藩は加賀・能登・越中百十九萬五千石の藩地で、藩治は金澤、藩主は前田綱紀（つなのり）であつた。

綱紀は、加賀藩第五代の藩主。四代光高の子。幼名犬千代、初名綱利、顧軒・梅墩・香雪・松雲軒等と號した。寛永二十年（二三〇三）生、正保二年襲封。左近衛權少將より中將に轉じ、參議に任じ從三位に陞つた。享保九年（二三八四）五月歿。享年八十二。木下順庵及び明儒朱舜水等を師とし、藩政を振興して明君の聞えが高かつたばかりでなく、最も典籍を愛して圖書の蒐集・類聚につとめ、又名分を正して南朝を表彰し、德川光圀と併び稱せられた。編著に桑華字苑・加越能名蹟記等がある。

【岡島仲通】　ヲカジマチュウツウ　本名は達。仲通は字。通稱を忠四郎といひ、石梁と號した。

【產】　サン　こゝでは、その地の出生、うまれ、の意。

【戚然】　セキゼン　憂ひ悲しむさま。

【笈ヲ負ヒテ】キフヲオヒテ
〔笈ヲ負フ〕郷里を出て遊學すること。
〔笈〕（一）背に負ふ本箱。（二）修驗者又は行脚僧などが、佛具・衣服・食物等を入れて背負ひ行く器。匣の如くにして、四脚があり、扉で開閉する。おひ。こゝは（一）。
【遊ブ】アソブ　こゝでは、遊學する、他郷に行つて學ぶ、の意。
【茲ニ】ココニ　これまでに。
【比】コノゴロ　この頃。
【家書】カショ　（一）わが家からの手紙。（二）自家の藏書。こゝは（一）。
【衰頽】スヰタイ　衰へすたれること。衰へよわること。
【逼リ】セマリ　ちかづき。
〔逼ル〕（一）狹くなる。せばまる。つまる。（二）ちかづく。ちかよる。（三）きはまる。くるしむ。窮迫する。（四）あぶなくなる。急になる。

【閭ニ倚リテ】リョニヨリテ　村里の入口にある門によりかゝつて。（母が異境にある子の歸りを待ちわびるさまにいふ。）
戰國策に「王孫賈年十五、事閔王、王出奔、失王之處、其母曰、女朝出而晚來、則吾倚門而望、女暮出而不還、則吾倚閭而望、女今事王、王出走、女不知其處、女尚何歸」とある。これから「倚閭望」「倚門望」などといふ。
〔閭〕（一）周の制度で、里卽ち二十五家をとりまいてゐる門。里門。（二）轉じて、二十五家の稱。むらざと。
〔倚ル〕よりかゝる。もたれる。
【一念】イチネン　こゝでは、ふと念ひ出すこと。
【百感】ヒャクカン　いろ〳〵のことを心に感ずること。
【先容】センヨウ　「先づこれが容を爲す」卽ち「前以て體裁をつくり飾る」義で、豫めその人を紹介して下地をつくつておくこと。人を取りもつ爲に、豫め譽め薦めること。

【褐ヲ本藩ニ釋ク】カツヲホンパンニトク　こゝでは、加賀藩に仕へる意。
〔褐〕粗服。賤者の著る服。
「褐ヲ釋ク」は、粗服をぬぎすてて官服を著る意で、野にゐたものが出でて仕へるにいふ。
〔本藩〕藩主又は藩士の、その藩をさしていふ語。
〔藩〕（卷一、三八〇「舊庄内藩士」の項を見よ）
【則チ】スナハチ　俗に「レバ則」といふ。上を承けて下を起す語。何々すれば、何々の時は、の義。そのときは。さうなれば。
【願足レリ】望が叶ふ。滿足である。
〔足ル〕タル　（一）十分である。缺けてゐない。たらふ。（二）滿ち足りる。安心する。（三）役に立つ。堪へる。「用ふるに足る」
〔リ〕完了の助動詞。こゝでは、未來に於ける完了を表す。
【卽チ】スナハチ　そのまゝ、の義。そこで。直ちに。とりもなほさず。
【仕】シ　官職につくこと。
【舍キテ】オキテ　さしおいて。
〔舍〕（一）いへ。（二）轉じて、休む。居る。止る。止める。置く。すてる。
【歎ジテ】タンジテ　歎賞して。
〔歎ズ〕（一）なげく。憂へてことばに表す。（二）憤慨する。いきどほる。（三）ほめる。感服する。歎賞する。
【世衰ヘ道微カニシテ】「世道衰微シテ」を二つに分けていつたもの。
「世道」は、世の中で人の守るべき道。世上の道德。社會道德。
「衰微」は、おとろへてかすかになること。衰退。
【儉薄】トウハク　人情の薄いこと。輕薄。浮薄。
【子】シ　第二人稱代名詞。あなた。きみ。
【絕エテ】タエテ　（一）すこしも。さらに。ちつとも。さつぱり。一向に。（二）すぐれて。まさつて。とびはなれ

て。こゝは（一）。

【僅カニ】　ワヅカニ　（一）すこしばかり。（二）かつ〳〵。やつと。こゝは（二）。

【乃チ】　スナハチ「迺チ」に同じ。上を承けて下を起す語。そこで。

【推セリ】　オセリ　推擧した。

【甲府侯】　カフフコウ　こゝでは、甲府城主德川綱豐。

德川綱豐は、初名虎松。甲府宰相綱重の長子。家光の孫。寛文二年（一六六二）生。延寶六年襲封して甲斐全州三十五萬石を領し、正三位權中納言に進んだが、寶永元年五代將軍綱吉の養子となり、世子として西丸に移り名を家宣と改めた。翌年從二位權大納言に敍任、六年（一七〇九）綱吉死去の後を承けて六代將軍となり、新井白石・間部詮房等を登用して著々前代の弊政を改革し、治績頗る見るべきものがあつた。正德二年（一七一二）十月歿。享年五十一。性學問を好み廣く經史に通じ、夙くより白石を重用して遺憾なくその手腕を揮はしめた。

〔甲府〕　甲斐の府城。現甲府市（山梨縣廳所在地）。

〔侯〕　（一）諸侯。大小名。（二）五等爵の第二位。侯爵。

【擧グ】　アグ　こゝでは、推擧する、の意。

〔原善〕　ハラゼン　江戸後期の儒者。字は公道、三右衞門と稱し、念齋と號した。敬仲の子、雙溪の孫。安永三年（一七七四）江戸に生まれ、少時父を喪ひ、母の嚴格な家庭教育を受けた。長じて山本北山に學び、夙夜、刻苦勵精、能くその分に安んじ、餘暇を以て徒を集め學を講じた。文化十三年先哲叢談を著して大いに世に行はれ、旨を受けてこれを幕府に獻じ、銀錠を賜はつた。林述齋その名を聞いてこれを召見し、また推薦して史事に與らしめた。文政三年（一八二〇）三月歿。享年四十七。

〔先哲叢談〕　センテツソウダン　原善著。八卷。江戸時代に於ける儒家の經歷・性行を列傳體に撮錄したもの。所載の先儒は藤原惺窩・林羅山等七十二人で、五百五十條に亙つてゐる。文化十三年の梓行で、佐藤一齋等の序文がある。

二　解釋

1　主題

白石の父が至誠・剛毅、以て家臣を手づから誅せんとした君侯を諫止した話。

2　構想

(1)　家臣蘆澤に對する君侯の激怒（初―六七ノ一）。

(2)　白石の父の動じない直諫（六七ノ二―六九ノ一）。

(3)　改心して亡父の職を仰せつけられるに至つた蘆澤（六九ノ二―終）。

3　敍述

〔我が父致仕の後、事にふれてのたまひたりしには〕――父の昔語であるが、父にとつても感慨の深い思出であり、白石にとつても印象の深い話であつたに違ひない。

〔戸部は物に腰かけて、打刀を横たへておはします〕――容易ならぬ場合であることが描かれてゐる。

〔「近くまゐれ」とありしかば、腰刀をとりて參らんとせしに、「そのまゝに參れ」とありしによりて、云々〕――腰刀のまゝにて參れといふのは、餘程な焦立ち方である。果して思ひきつた君言を耳にしなければならなかつたのである。

〔答へ申す事もなくてありしに〕――お答へすることがないのではない。あつてしかも容易に言へないことなのである。

「思ふ所やある」とのお尋ねを受けることによつてのみ口に爲し得ることなのである。お答へしないでゐたことが、最もはつきりお答へしてゐたことであつたのである。

〔天性不敵なるものの〕――これはよく蘆澤の人物を示してゐる一語である。そこが主君を激怒せしめた點であり、又白石の父をして命乞ひをさせた點であるのである。

〔但しわかく候時に、彼等がごとくなるものにあらずしては、年たけ候ひし後に、ものの用にはたたぬもの多く候か〕

――白石の父なる人の非凡な眼識をよく表してゐる言葉である。

〔これらの事を存じめぐらし候につきて、御答の遲く候ひしは、恐れ思ふ所に候〕――主君と家臣との分を嚴格に立てた一句である。主君に對する不遜を恐れながら、猶且所信を誠實に披瀝しつくさずにはをられぬ所に、その人の面目躍如たるものがある。

〔またのたまひ出す事もなく、我もまた申す事もなくしてさぶらふほどに〕――これだけいつて再びもとの沈默に歸つたのである。誠に身に迫るものがある。激怒に驅られてゐる主君を前に、直言して動かぬ家臣、一人の生命の爲に至誠を吐露して端坐してゐる家臣を前にして默した主君、何れも寸隙のない沈默である。力と力との格鬪である。

〔やゝありて、面に蚊の集りぬるに、「逐ふべし」とのたまひしほどに、顏を動かしければ、血に飽きて、胡頽子の如くになりし蚊の、六つ七つはら〳〵と地に墜ちしを、懷の紙をとり出して、つゝみて袖にしてさぶらふ〕――面に蚊が集つても逐はうともせぬ白石の父、それを見るに堪へかねて來た主君、沈默の勝敗は既に見えて來た。「逐ふべし」といはれてもたゞ顏を動かしただけであつたといふことも、徹底した覺悟を示して餘りあるものである。それによつて地に墜ちた蚊の處理もいかにも緊張してゐる。謹嚴・靜肅の極みである。長まつて主命を待つ謹嚴さと、氷の如く冴え返つた心境とに、我々は神の如き絶對の世界を感ずる。

三　批評

「事にふれてのたまひたりし」父の物語である、よほど深い感銘を胸中にきざみ込まれたものと見える。父を懷しみながら、敬仰の念をこめて書いたのであらう。感銘が深刻である爲に、行文に生氣があり、文氣が緊つてゐる。白石の印象に殘つてゐる父の人物が如何なる種類の存在であつたかは、「參考資料」引用の箇所と併せ讀むことによつて一層明らかにせられるであらう。

三　備考

一　指導の問題

一般の生徒には、文體が重々しく、緊縮してゐて、精力的に押し進めてゐるといつた調子が親しみにくい感じを與へるだらうと豫想せられる。興味の上からは、文體的に疎隔の情を催す教材であるかも知れない。併し學習の必要上からいへば、近世に出現した偉大な人物としての新井白石の文に親しませておくことは肝要であり、又「折たく柴の記」を讀む基礎を養つておくことも肝要である。のみならず、十分に讀みくだき得るに至れば、傑れた一篇であり、重要な一教材であることからいつて、全力を盡くして學習に向かはしめ、全文に漲る緊張味を作者その人と同じく身に感ずるまでに讀み到らしめることが大事な目標であらねばならぬ。文の構成上からいつて、書き出しの「我が父致仕の後、事にふれてのたまひたりしには」はこれを完結させるべき述語を缺いてゐるのであるが、多作の達文家らしい手落である。これは脚本に於けるト書のやうにして扱つておくことが必要であらう。又文中三度用ゐられてゐる「やゝありて」に注目して、時間的經過を、それも充實した沈默そのものの時間的經過を示す點を把握させれば、全文が醸し出してゐる緊張の空氣が感じられて來るであらう。そして、「たゞ今蘆澤を召出して、手づから誅すべし」といふ絶對の力を含んだともいふべき宣言から、遂に正濟の素直でしかも底力ある諫止に動かされて「逐ふべし」といふ餘裕を表すに至り、更に「罷り歸りて休み候へ」といふ承認に伴なふ好意の言葉を示すに至るまでの主君の心の動きが讀解せられるに至るであらう。

場面としては血でふくれて動けなくなつた蚊の點出が、そしてそれを中心にした二人の行動が、象徴的にその場の空氣を實感させるであらう。さうしたならば、それを手がかりとしてその基底を成してゐる沈默の具體的意味をはつきり把握させることが大事な指導でなくてはならぬ。「參考資料」引用の箇所と併せ考へる時、白石のやうな人材が出たのは偶然でないことが肯かれて來ることも、指導者の忘るべからざる用意と思はれる。

二　參考資料

同じ「折たく柴の記」の上卷に出てゐる父の印象記を左に引用する。

我物覺えしよりは、髮に黑きすぢはすくなかりき、面は方におはしまして、額上高く起り、眼大きく、鬚多く、たけは短かくおはせしかど、すべて骨ふとく、たくましく見え給ひたりき、天性喜怒の色あらはれ見えたまはず、笑ひ給ふにも、聲高くわらはせ給ひし事は覺えず、まして人を叱り給ふにも、あら〳〵しきことの給ひし事は聞かず、もの宣ふ事も、いかにもことばすくなくして、たち居かろがろしからず、驚き給ひ、さはぎ給ひ、事に堪かね給ひしなどいふ事は見し事あらず、たとへば灸治などし給ふにも灸小さきと數すくなきとは、無益の事なりと仰られて、大きなる灸を、其數少なからず、五所も七所も、一時にすゑさせて、いたみ給ふけしきも見え給はず、身靜なる時には、つねにおはします所を淨く掃ひて、壁上に古畫かけて、花瓶には、春秋の花を、すこしくさしはさみて、それに對して、默坐して、日を消し給ひ、又みづから繪かき給ふことなどもありき、それも色を設たることなどをばこのみ給はず、身の病み給ふ時より外は、人をめしてつかひ給ふといふことなく、何事も手づからのみなし給ひたりき、朝夕の物をめすことも、飯は二椀を過ず、手して椀をささぐるに、其輕重によりて、飯の多きすくなきはしれぬれば、其餘物は、飯の多少によりて、多くもすくなくもくらひて、常に我腹にみつる分量をすぐべからず、口にかなふ物なりとも、一色をのみ多く食ひぬれば、必ずその爲に傷らるゝ事あり、なに物をも撰ばずして皆々すこしづゝ食ふ時は、たがひに相制する所あるにや、食のために傷らるゝ事はすくなしと覺ゆるなりと仰られき、よのつねには、こなたよりまゐらする物をめして、なに物をまゐらせよとのたまひし事はあらず、たゞ四時の新味をば、その出來りし初に、なにものに限らず參らせよと仰られて、家人と共にきこしめしけり、酒はわづかに喉に下し給へば、大きは幣給ひしかばたゞ盃を把りて、歡を交給ふのみなりき、茶をばこのみてめしけり、身にめしける物も、家におはする時は、あらひすゝぎしものをもめしけれど、あかづきぬるをば、いね給ふ時もめす事なく、門を出給ふに至ては、かならずあたらしくあざやかなる物どもをめす、それも身におひ給はぬ品のもの用ひられし事はあらず、むかし人は、つねに身死しなん後の、見ぐるしからぬやうを、心にかけしなりなどの給ひたりき、扇などをも、人多き中に、とりも落し、わすれもする事あり、これらの物にても、たのぬしの心はおしはからるゝこと也と仰られし、むかし樣とかいひて、尺ばかりの、白骨なるに、紙は金銀の砂子地なるを用ひ給ひ、繪かきしも、しかるべき畫工のかきしにあらねば、用ひ給はず、まして刀わきざしの如き、武器の事はいふに及ばず。

一〇　親心

柳澤淇園

一　解題

一　本文

「雲萍雜志」の卷四から二篇、卷二から一篇を採錄したものである。「雲萍雜志」（四卷）は、その序によれば、著者の手澤本が大阪の名家木村孔恭（蒹葭堂）の有に歸し、その知人中井某（桃花園主）がこれを校訂し、書名を附して、天保十四年に刊行した隨筆である。多く志士・仁人の言行をあげ、俗談平語の裡に世のいましめ、人のをしへともなるべきことを說き、又は自己の經歷を語つてゐる。百家說林・有朋堂文庫・日本隨筆大成その他に所收。

二　作者

柳澤淇園。諱は里恭、字は公美、號は淇園・竹溪・玉桂、通稱は權大夫といつた。大和國郡山藩主柳澤家の重臣で文武二道に達し、わけても畫家として傑れ、客を愛して常に寄寓者が家に滿ちてゐたといふ。寶曆八年（一七四一八）九月、年五十三で歿した。著書には雲萍雜志の外、ひとりね・淇園先生一筆がある。

因みに、森銑三氏は雲萍雜志の著者が果して柳澤里恭かを疑つてゐる（「國語と國文學」昭和七年六月號）。

三　採擇の趣旨

前課・前々課と共に文語文に習熟させ、前課と併せて近世隨筆の讀解力を養ふに資すべき教材である。

前課で、新井白石のやうな傑出した人物は、さういふ父の子としてのみ存在し得るものであることを學習した後を承けて、至らざるなき親の眞情の表現を學ばせようとする。文藝的教材であると共に、賢哲の言行を敍した國民的教材である。

二　教材としての研究

一　註解

【親心】　オヤゴコロ　（一）子を思ふ親の慈悲心。（二）親になり代つて思ふこと。こゝは（一）。

【名和又太郎長年】　ナワマタタラウナガトシ　伯耆國名和の地頭。行高の子。村上天皇の皇子具平親王の裔たる故を以て村上氏とも稱した。初名は長高。又太郎はその通稱。爲人は勇健で射を善くし、資產饒富、宗族彊盛の故に國人に畏服せられた。元弘三年後醍醐天皇の隱岐を遁れて伯耆に渡らせ給ふや、一族と共に天皇を船上山に奉じて義兵を擧げ、佐々木清高の大軍を擊破した。天皇功を賞し、從四位下左衞門尉に任じ伯耆守を兼ねしめ、且その名を長年と稱せしめ給うた。天皇京都に還御遊ばされ建武の新政が布かれるに及んで、功によつて因幡・伯耆の守護となり、次いで記錄所の寄人となつた。建武二年足利尊氏鎌倉に據つて叛き新田義貞東征するや、楠木正成と共に留つて京都を守り、延元元年（一九九六）尊氏が京都を侵すに及んで諸將と戰つて一度これを西走せしめたが、再びその東上するに際し、車駕に從つて叡山に赴き、次いで義貞等と尊氏を京都に攻めて利あらず、六月戰死した。別格官幣社名和神社に祀られ、明治十六年八月從三位を贈られた。

【嚴】　ゲン　きびしいこと。おごそかなこと。いかめしいこと。嚴重。嚴格。

【教訓】　ケウクン　（一）をしへさとすこと。訓戒を加へること。教戒。（二）意見をすること。諫言。こゝは（一）。

〔訓〕（一）をしへる。みちびく。いましめる。（二）とく。よむ。

【屆きたる】こゝでは、行きとゞいた、の意。

【をさな遊】をさない兒の遊戯。兒戯。

【子等】コラ　こゝでは、我が子の遊び仲間の子供達。

【契約】ケイヤク（卷一、三二七頁を見よ）

【童】ワラハ　（一）十歳前後の子供。稚兒より年長で、まだ元服するに至らぬもの。わらはべ。わらべ。（二）召使の子供。童男。童女。（三）特に、五節の童の稱。（四）「稚兒」に同じ。（五）童女の髪を後へ撫で下げ、眉の通りで一所に結ぶこと。こゝは（一）で、子供、の意。

【川端】カハバタ　川ぶち。川べ。川のほとり。

【行けかし】行けよ。行つてくれ。

〔かし〕一旦いひ切つた文の後につけて、念を押し力を添へる助詞。

【うけがひ】承諾して。

〔うけがふ〕心に受けてゆるす。諾ふ。引受ける。がへんずる。きく。承知する。

【御身】オンミ　やゝ敬意を含んだ對稱代名詞。そなた。おまへ。おみ。

【行くべきが】行きませうが。行かうけれども。

〔べし〕こゝでは、決意を表す。「望に任すべし」（七一ノ九）

【たまはるぞ】下さいますか。

〔たまはる〕「たまふ」の未然形に、敬語の助動詞「る」がついて四段となつたもの。「受ける」「貰ふ」「さづかる」の敬語。

〔ぞ〕文中又は文末にあつて、その上の物事を強く指示する助詞。こゝでは、上の疑問の言葉「何をか」をうけて疑問の意を表してゐる。

【かへりみ】ふりかへつてみて。

〔かへりみる〕（一）ふりむいてうしろをみる。ふりかへつてみる。（二）往事をおもふ。既往を考へる。（三）心にかける。顧慮する。（四）自己を反省する。（五）世話をする。恩顧を加へる。よく目をかけて面倒を見てやる。

【その方】そのハウ　（一）その方向。（二）目下に用ゐる對稱代名詞。なんぢ。こゝは（二）。

【望に任すべし】望み通りにしよう。

〔任す〕マカす　（一）相手のなすがまゝにする。（二）他にゆだねる。委任する。委託する。（三）あるがまゝに使用する。

【とく〳〵】疾く疾く　はやく〳〵。いそいで。今すぐに。早速。

【やれ】（牛を）すゝめよ。

〔やる〕遣る　（一）前へ進める。進ませる。行かせる。（二）送る。つかはす。（三）與へる。とらせる。贈與する。（四）拂ひ除く。晴す。はらふ。（五）行ふ。する。（六）人の爲に勞をとる。してやる。つかはす。

【ほど】（一）ほどあひ。程度。分量。限度。（二）身のほど。分際。（三）場所又は時の廣さ・隔たり。（四）ころ。をり。とき。（五）きまり。かぎり。（六）樣子。調子。恰好。ことは（三）。

【幼心】ヲサナゴコロ　幼兒の心。こどもごころ。をさなどこち。

【はたる】責めうながす。うながしせまる。催促する。せがむ。とりたてる。

【いひ解きても】わけをいつても。

〔いひ解く〕辯解する。辯明する。說明する。いひ開く。

【いかゞ】「いかにか」が、音便で「いかんが」となり、更に「ん」が略されたもので、或は反語の意を表し、或は疑問の意を表す。

【聞くより】聞くとすぐに。聞くや否や。

〔より〕こゝでは、直ちに、すぐに、の意。

【さもありぬべし】さうもあるだらう。無理もないことだ。

〔ぬ〕完了の助動詞。こゝでは、單に意味を強めてゐる。

〔べし〕　こゝでは、當然を表す。

【せしにたがひなくば】　したのにちがひがなければ。たしかにしたのなら。

【伐らせて遣はすべし】　伐らせて與へよう。

〔遣はす〕　ツカはす　(一)やる。行かせる。(二)あたへる。贈る。(三)賜ふ。與れる。(四)送つてくる。よこす。

【杣】　ソマ　(一)樹木を植ゑつけて材木を採る山。杣山。(二)杣から伐り採つた材木。杣木。(三)杣木を伐り採ることを業とする人。杣人。きこり。そまどり。そまたくみ。こゝは(三)。

和名抄に「杣讀曾萬所出木詳」とあり、箋注に「今俗呼採材人爲曾麻轉訛也」とある。鹽尻には「杣の字は本朝の作字也、山田福吉所作也云江談抄」と見える。

【閑窓】　カンサウ　ものしづかな窓。幽窓。

〔窓〕「窗」の俗字。

【もと】　下　(一)根の際。した。下方。(二)あたり。かたはら。(三)從屬すること。配下。(四)のち。後世。「百世の下」　こゝは(二)。

【こつ〳〵】　固い物が觸れ合つて發する音を表す擬聲語。

【窺ふに】　のぞいてみると。

〔窺ふ〕　ウカガふ　(一)ひそかにみる。のぞく。樣子をみる。(二)ひそかに機會を待つ。(三)ひそかに得ようと望む。ねらふ。

【老いさらぼひし】　年をとつて痩せおとろへた。

〔さらぼふ〕　(一)死骸などの風雨にさらされて白骨だけとなる。(二)痩せおとろへる。姿がおとろへかける。憔悴する。

【眼鏡】　メガネ　視力を矯正する爲に用ゐる掛眼鏡と、光線を緩和し或は風塵を避ける爲に用ゐる保護眼鏡とがあり、前者には近視眼用・遠視眼用・亂視眼用等がある。我が國に始めて傳來した眼鏡は、天文の頃宣教師フランシスコ・ザヴィエルの齎したものであることが記錄に見えてゐる。後、寛永年間に南蠻及び支那から製法を傳へ、次いで京都・大阪・江戸等に眼鏡師が現れるやうになり、漸次普及されたものの如くである。

【石臼】　イシウス　石で作つた臼。專ら碾臼にいふ。

「碾臼」は、製粉機の一種で穀物や豆類を粉碎製粉する具。扁平な圓壔形の二箇の石臼から成り、突起のある方を雄臼、ない方を雌臼といふ。兩臼の接觸面には穀粒の粉碎と外周への送り出しに都合のよいやうに、中心から多數の放射狀の溝が刻まれてゐる。雄臼の中央の突起を雌臼の中央の孔に入れて重ね、上の方の臼の上面にある孔から穀粒を落下し、上の方の臼を把手によつて回轉して粉碎する。

〔臼〕　農家の日用器具の一。米・麥等を精白し、餅を搗くに用ゐられる搗臼(竪臼)と碾臼との二種がある。單に臼といへば普通搗臼をさす。

【目】　メ　こゝでは、碾臼の目、卽ち、碾臼の上下の臼の接觸面にある、中心から放射狀に作つた刻目。

【幾ばくぞ】　いくつか。

〔幾ばく〕　幾何・幾許　どれくらゐ。なにほど。

【壻】　ムコ　「婿」「聟」は俗字。娘の夫。

【せずともありなん】　「せずともよくありなん」の意。しなくてもいゝだらう。

〔なん〕　(卷一、二八七頁「移りなんも知れず」の項を見よ)

【すぎはひ】　世を渡る爲に營む職業。命をつなぐたよりとなる仕事。なりはひ。生計。活計。

【貪くる】　タスくる　活計をたすける、の意。

〔貪〕　たすける。あたへる。もとでとする。もとでを與へてたすける。

【輩】　ハイ　(一)なかま。ともがら。やから。(二)あひて。たぐひ。(三)なみ。つら。列。こゝは(一)。

【活計】　クヮツケイ　(一)生活のてだて。くらしむき。くらし。生計。糊口。生業。(二)裕な生活をすること。歡樂すること。奢侈。贅澤。こゝは(一)。

【資力】 シリョク (一)もととなる力。(二)もとで。資本。(三)資本の實力。財産の能力。こゝは(二)。

【欠伸】 アクビ　單に「欠」とも書く。異常呼吸運動の一。多く、血液中の酸素不足の狀態、炭酸瓦斯の增加、上位腦(大腦)の貧血等の刺激によつて反射的に起る。

【光陰】 クワウイン　ひま。とき。月日。年月。

〔光〕 こゝでは、日。

〔陰〕 こゝでは、夜。

【料】 レウ　(一)所有に供する物。しろ。用品。たね。材料。(二)代價。代金。(三)ため。分。こゝは(二)。

【たすけばや】 たすけたい。

〔ばや〕 希望の意を表す助詞。

【しつるなり】 してゐるのです。

【人の親】 ヒトのオヤ　「親」に同じ。

【めぐみ】 惠　なさけをかけること。あはれみ。いつくしみ。恩惠。恩澤。

【江戸】 エド　東京市の舊名。

江戸の地名は古くからあつたが、その漸く開け始めたのは、長祿元年(一四一七)太田道灌が居城を築いて以來で、しかもなほ村落の集團たるに過ぎなかつた。然るに天正十八年德川氏がこれに據るに及び、極力水路の治修、道路の開設、土木の施行、士民の移集を圖つた結果、忽ち面目を一新し、次第に發展して所謂八百八街の殷賑な大都市を現出するに至つた。明治元年東京と改稱、聖駕東幸して新日本の帝都となつて以後も、地域そのものは久しく舊の儘であり、大震災以前までは江戸の面影が隨處に殘つてゐた。

【下谷】 シタヤ　江戸の地名。上野の山及び湯島の高臺の下に當る一帶の卑濕地の汎稱で、上野に對する名であつた。その範圍は今の東京市下谷區(但し上野の山を除く)を中心に神田・本郷・淺草各區の一部に亙り、北は坂本・金杉・三輪、南は神田川に至り、東は淺草鳥越の平地、西は湯島・本郷の臺地下まで廣がつてゐた。(但し江戸開府當時は遙に狹小な地名であつたのが、市街の成長につれて次第に擴大したのである。)寺院の極めて多かつた地で、他は主として武家屋敷であつた。

【身持】 ミモチ　(一)身を保つこと。身の處置。身の所行。(二)おこなひ。ふるまひ。品行。行跡。(三)子を孕むこと。懷姙。姙娠。こゝは(一)。

【律義】 リチギ　「律儀」とも書く。固く禮儀・道理を守ること。義理堅いこと。

佛語「律儀(りつぎ)」から出た語。「律儀」は、法律・儀則の意。又戒體(「戒行」參照)は人をして自ら律儀に順ぜしめる功能がある故に、戒體を律儀といふこともある。

【なるべきこと】 なるにちがひないこと。

【戒行】 カイギャウ　佛語。受戒によつて、一旦戒體(受戒の作法によつて受者の身中に發現する非を防ぎ惡を止る功能)を發得した者に現れる、身・口・意の三業に於ける如法の所作。佛祖の定められた戒律にかなつた行。

【たもたで】 守らないで。

〔たもつ〕 保つ　(一)守つて失はない。永くもちこたへる。(二)つゞける。もつ。存續する。永續する。(三)もつ。所有する。所持する。(四)安んじまもる。保持する。

〔で〕 「すて」(「す」は打消の助動詞、「て」は助詞)の約。動詞・助動詞に添へて、打消の意を表す。

【いさかひ】 諍　(一)いさかふこと。口あらそひ。いひあひ。口論。(二)喧嘩。たゝかひ。爭鬪。こゝは(二)。

【私】 ワタクシ　こゝでは、自分のみの利益をはかること。勝手、ほしいまゝ、の意。

【什物】 ジフブツ・ジフモツ　(一)平常使用する多くの器具。うつは。道具。器物。(二)家の寶として祕藏する什物。寶物。什寶。こゝは(二)。

【諫を加へけれども】 諫言をしたけれども。

〔諫〕 イサメ　直言して人を悟らせること。忠告。意見。注意。

【由】 ヨシ　こゝでは、次第、事情、の意。

【住持】 ヂュウヂ　(卷一、一一七頁を見よ)

【一先】　ヒトマヅ　何れにしても。何はともあれ。とにかく。とまれかくまれ。一應。まづ。

【諭し見るべし】　言ひきかせてみよう。

〔諭す〕　サトす　言ひきかしてさとらせる。ことわりを說き聞かせる。會得させる。のみこませる。

〔見る〕　他の動詞について、試みる、ためす、の意を表す。

【佛具】　ブツグ　花瓶・香爐など佛壇を裝飾する具。佛事に用ゐる器具。佛器。

【惡僧】　アクソウ　(一)戒律を守らない僧。佛道にそむいて惡い行ひをする僧。(二)勇猛な僧。「三塔一の惡僧」こゝは(一)。

【われら】　(一)「我」の複數。(二)そなただち。汝等。わいら。(三)「我」に同じ。こゝは(三)。

【更に】　サラに　こゝでは、いさゝかも、一向に、絕えて、少しも、の意。

【用ふる所】　採用する點。ききいれること。

〔用ふ〕　こゝでは、可としてとりあげる、採用する、の意。

【ぜひに及ばず】　是非するまでもない。せんかたがない。已むを得ない。しかたがない。ぜひない。

【ゆく〳〵】　(一)行きながら。歩みながら。(二)後には。終には。やがて。行末。將來。こゝは(二)。

【禍】　ワザハヒ　疾病・天變地異・難儀などを蒙ること。不幸な出來事。まがごと。凶事。災害。禍難。災難。

【身にもかゝらんこと】　我が身にもふりかゝつて來ること。

〔かゝる〕　こゝでは、蒙る、でくはす、遇ふ、の意。

【暇】　イトマ・ヒマ　(一)用事のない時。ひま。(二)休み。(三)喪中に引きこもること。暇。(四)官職を辭すること。(五)臣下・徒弟・奉公人等を免じて去らせること。(六)離緣すること。(七)別れ去ること。(八)すきま。

【おひ〳〵】　追々　順を追つて。引續いて。次第々々に。漸次。

【おもふものから】　おもふのに。おもひはするが。

〔ものから〕(助)「ものながら」の略。ではあるが。けれども。ものの。

【それを】　さうだのに。然るに。

【近ごろ】　(一)近い頃。この頃。近來。(二)甚だ。頗る。大層。こゝは(二)。

【依怙】　エコ　一方に偏して肩をもつこと。愛する方へのみ私すること。片びいき。えこひいき。偏頗。

〔怙〕　たのむ。たよる。あてにする。

【はや】　(一)疾く。すみやかに。(二)既に。疾うに。もはや。こゝは(二)。

【なる】　こゝでは、することが出來る、なしうる、出來る、の意。

【離れなば】　離れてしまつたら。

〔な〕　完了の助動詞「ぬ」の未然形。未來に於ける完了を表す。

【はかり難し】　推量することがむづかしい。さういふことになるかもしれない。

〔はかる〕　こゝでは、物事の程度を知らうとする、推し量る、の意。

【さすれば】　さうなると。さういふことになれば。

【わが德もすたれて】　人として行はねばならぬ自分の道も衰へて。自分も道德にかけた點が生じて。

〔德〕　トク　(一)人の道にかなふこと。道德。(二)志行・學術等の勝れた所から起る名望。威德。(三)はたらき。いさを。功德。(四)めぐみ。恩德。(五)その物事の爲にさうなること。ため。おかげ。(六)富んでゐること。福分。福德。(七)まうけること。利德。

〔すたる〕　廢る　(一)行はれない。不用になる。(二)衰へる。(三)流行しない。はやらない。

【善心】　ゼンシン　(一)良心に恥ぢない心。道德にかなつた心。善良な心。(二)佛語。「菩提心」に同じ。正覺を求める心。正道に入らんとする心。ほとけごころ。こゝは(二)。

【立ち返る】　タちカへる　かへる。立ちもどる。もどる。

〔立ち〕　動詞に冠して、語勢を添へる。

〔傍をはなつ】　傍から追放する。身邊から追ひはらふ。

【高恩】　カウオン　高大な恩。厚恩。鴻恩。洪恩。

【ひるがへりしとぞ】　改心したとのことである。

〔ひるがへる〕　飜る・翻る　(一)ひらりとかへる。裏がへる。裏表になる。(二)反對になる。ひつくりかへる。(三)心が改る。(四)躍りとぶ。(五)ひらめく。

〔と〕　指定の助詞。

二　解釋

1　主題

人の親たるものの、無私で獻身的なめぐみ。

2　構想（各段の主題）

(1)　我が子に約言を果させる爲に大切な門前の松樹を伐つて與へた名和長年の父。

(2)　石臼の目を切つてせめては鼻紙の料なりともたすけようとした七十一の老翁。

(3)　惡行の弟子をあくまで保護して善心に立ちかへらせた師僧。

3　敍述

〔名和又太郎長年は、その父嚴にして教訓の屆きたる人なり。をさな遊の交にも、子等に契約せしことは、正しく守りて忘るゝことなし〕——長年といへば知らぬ人もないが、それは吉野朝の勤王家としてである。こゝでは、その長年が、約束を重んずる少年であつたことを、そしてそれは嚴にして教訓の屆きたる父の薫陶によつたものであることを言はうとする。「名和又太郎長年」といふ主格は「をさな遊の交にも……」へつゞき、「その父嚴にして……」は插入句のやうな關係に立つ。「嚴にして教訓の屆きたる人」こそ父として得難き人である。まづさういふ長年の父の姿が言表されてゐる。

〔何れの樹なりとも、その方が望に任すべし。とく〳〵やれ〕——明瞭に言ひ切つた言葉であるが、その場かぎりの氣分で、口から出まかせに吐いた言葉であるらしい。後に「幼心の戯なれども」といつてゐるのでもわかる。童は併しこの確言によろこび勇んでゐるのである。

〔約束をせしにたがひなくば、伐らせて遣はすべし〕——三年前の戯れの言葉ではあり、且門前の松の木といふ大事なものであるから、長年はこの約束をどうしたものかと困惑してゐる。父は怒ることもなく、直ちに約束に從はせた。由緒のある家の人らしい鷹揚な態度であり、しかも人間性に徹した所置である。長年にとつては百の訓言よりも終生に互つて深い戒となつたであらう。

〔予が閑窓のもとに、こつ〳〵と聞ゆる音、終日やまず〕——實感の濃く出てゐる一句である。「閑窓」といひ、「こつこつ」といひ、「終日やまず」といふ、以下の文はこゝから展開したものであることに注意しなくてはならぬ。

〔いかなるもののひゞきにやと、窓を押してこれを窺ふに、老いさらぼひし翁」が石臼の目を切つてゐるのが見出された。力仕事など思りてゐたり〕——意外にも、そこには「老いさらぼひし翁の、眼鏡をかけて、筵の上に石臼の目を切ひも寄らぬやうな老人が、眼鏡をかけて熱心に働いてゐるのを見ては驚かざるを得なかつたのである。

〔われ臼の目を切りたりとも、活計を補ふべき資力に足らずといへども、欠伸のみにて徒に光陰を送らんよりは、せめては鼻紙の料なりともたすけばやと、云々〕——この老人の生活哲學ともいふべき働くことを生きがひとしてゐる信念が出てゐて奥ゆかしい。

〔人の親の子をおもふめぐみ、高きも賤しきも異なることなき、いとありがたきものとは思ひぬ〕――働きたいが故に働くとはいひつゝも、やはり壻や孫の上を思ふに出づる眞實さに打たれたのである。「高きも賤しきも異なることなき」はこの時代らしい考へ方であるが、親の子を思ふみめぐみの絶對的なものであることは、この言葉によつても現されてゐる。

〔住持は「一先諭し見るべし」とて厳しく戒めたるまゝにて捨て置きぬ〕――眞に人の師たるべき大きさが出てゐる。ただ諭す位ではだめであることを承知して、「一先諭し見るべし」といつてゐるらしい。そして律義な僧の面目を立て、その場の應急措置をとつたのである。

〔われはゆく〳〵鵜の寺に及びて、身にもかゝらんことをおそれおもへり。もし彼を追ひ出し給はずば、われに暇を賜はるべし〕――眞面目に考へてゐる積りであるが、器量の乏しい悲しさには、いつのまにか寺よりも惡僧よりも自分ばかりを大事に思つてゐる。自分がさうまでいへば、惡僧を出すであらうといふ自信も手傳つてゐる。

〔住持涙をうかべ、「さあらば願ひのまゝにその方に暇をつかはすべし。云々」〕――これは律義な僧の意外とする所であつた。住持の立場の大きさが始めてこの律義な僧にも示される場合に立たされたのである。

〔今暫しは傍に置きて、彼が命をも延ばし、且は厳しく教誡をもせば、善心に立ち返ることもあるべし〕――これこそ誡の情愛である。子を思ふ親の心である。一人としてこの溫情に動かされないものはあり得ない。

三　批評

雲萍雜志の味はひには、近世に多くある勸善懲惡隨筆の一例としてしまへないものがある。飄逸でゐて眞實に徹する力があり、表現にも近世のものとしては生き〳〵とした明るさが感じられる。悟道から來た作者の生活の反映であらう。

三　備考

一　指導の問題

「折たく柴の記」の文體は重苦しい壓力を感じさせる。この文體は輕妙な明るさを覺えしめる。この方が一般の生徒には親しみやすいであらう。

本課に收めた三つの話は何れも「親心」といふものを主題にしたものであるが、三者それ〴〵獨得の味趣を持つてゐるのであるから、この點に注意を向けることによつて理解作用が活潑に働き出すであらう。

第一の文は、名和長年の逸話で、話題の人物が既知であり、話の内容が未知であることから生徒の心を自然に惹きつけるであらう。名前に親しみがあり、且尊敬してゐる人の話であれば、一層眞實性が深く感じられるわけである。こゝでは、約束を守らしめたことに親の愛が現れてゐるのである。道德を完くさせることに於て親心が發露したのである。

第二の文は、作者身邊の話題である。何でもなささうなことに、深い人間性を發見したのである。終日閑窓にきこえ來るこつ〳〵のひゞきが、老いさらぼひし翁の石臼を切る音であることを知つて、同情に堪へなかつたのである。早速その理由をきいて、深くして音き親のたさけに打たれたのである。併しそれは珍しい話ではない。いつの時代にも、又どこにもある普遍的な事實である。そしてそれ故に貴い話なのである。

第三の文は、師弟の間のことを言つたのであるが、弟子を思ふ師の情は子を思ふ親の心と別なものではない。改心するまでは惡僧を手許に置いてあくまで教導しようとする。惡いが故に手離しがたいといふ。そこに至つて始めて眞の愛がそ

の力を示して來るのである。

親心といふものは、身に近く我々を掩ふ所の無形のものである。隨つて日々その中に浴してゐながら無感覺に打過ぎ勝ちである。本課をしみ〴〵讀み味はふ者は、この無形のものをあり〳〵と感じるであらう。說明しないで學習させることが大事な指導と思はれる。

二　參考資料

雲萍雜志の卷二に見える親心に關する今一つの話を左に引用する。

予はいとけなき頃より、詩歌の道を好み、たま〳〵作文などせし折から、稿成りて父に見するに、一としてほめられたることなく、只「無益のことなり」とて、座右に投捨ておかれ、他の者のは見てほめられ給へば、然りとてはいかゞとのみおもひ過ししが、後に妻にむかへたる女の、物縫ふことの人にすぐれて、小袖など一日に一重づつ縫ひて、餘事までもことかゝねば、物縫ふ職人の見ては、驚くばかりに上手なりけり。予ある時もの縫ふをひたぶるに愛で賞しけるをり、妻の云ふ「三歲にして母に後れ、繼母に育てられ、いと嚴しき性質にて、五六歲より水仕のわざをつとめ、七歲より手習ひ物よみ裁ぬひを敎へられ、實の子ならねば、敎訓足らじと、末に至りてそしられんはくちをしとて、羽根つくあそびだにえせで、只物ぬふことなどのみにいとまなかりつれば、折からははげしき母よとおもひしかども、今となりては物縫ふわざを人にほめられ侍るは、偏に繼母のなさけ薄からざる慈愛なり」といへるを聞きて、予がいとけなきころの作文をほめられざるの、いとありがたきをおもひあはせぬ。

一一　カルサンと米

島木赤彥

一　解題

一　本文

「カルサンと米」の殆ど全文を揭出した。同篇は大正十四年六月十九日に稿せられ、七月二日の大阪朝日新聞に揭載せられたものである。赤彥全集第六卷所收。（赤彥全集　全八卷、岩波書店發行）

二　作者

島木赤彥。歌人。本名は久保田俊彥。前姓は塚原。二水軒・伏龍・山百合・柿人・柿の村人・柿蔭山房主人等と號した。明治九年十二月長野縣諏訪郡上諏訪町に生まれ、後、久保田家を嗣いだ。三十一年長野縣尋常師範學校を卒業し、大正三年（三十九歲）まで十六年間初等敎育に從つた。その間に新體詩を雜誌「文庫」に發表し、次いで正岡子規の提唱した根岸短歌會の歌風を慕ひ、後專ら伊藤左千夫に師事した。その作品は概ね「馬醉木（あしび）」「アカネ」「アララギ」等の諸雜誌に發表されたが、なほ信濃の友人と雜誌「比牟呂（ひむろ）」を發行したこともあつた。大正三年諏訪郡視學を辭して上京してからは、專ら萬葉風の和歌の創作と研究とに沒頭し、傍ら淑德女學校に國語を敎へた。「アララギ」の編輯をなし、多くの門人を養成して、長くアララギ派の重鎭となつてゐた。十五年三月、胃癌の爲、諏訪郡下諏訪町高木の自邸に歿した。享年五十一。著書には歌集に「山上湖上」（太田水穗と合著）・「馬鈴薯の花」（中村憲吉と合著）・「切火」「氷魚（ひを）」「太虛集」「柿蔭集」「島木赤彥選集」「十年」

等があり、評論に「歌道小見」「萬葉集の鑑賞及び其批評前編」があり、童謡集に「赤彦童謡集」「第二赤彦童謡集」「第三赤彦童謡集」等がある。總べて赤彦全集に收められてゐる。

三　採擇の趣旨

本課も前三課とともに、何等かの人間的な貴さに觸れ、それを感歎する所に成つた篇の一つである。しかもそれが極めてユーモラスな趣致の間に發揮せられてゐる所に、特殊な文藝的價値を形成してゐる。文藝的教材であり、國民的教材である。

二　教材としての研究

一　註解

【カルサン】　輕袗　ポルトガル語 Calção の轉訛といふ。股引のやうな形をした袴で、足利時代の末頃、南蠻人著用の寬闊なズボンが我が國風に化されたものかと見られる。初めは輕袗袴といつて、武士の旅行用として用ゐられたが、次第に勞働者に普及し、殊に元祿時代に流行した。現在では、多く野袴として、主に寒い地方で、老若男女共に用ゐる。男子用のは、膝から下がゆるやかであるが、婦人用のは、膝から下が細くなつてゐる。著物がばさつかず、立働きに便利であるから、勞働する時ばかりでなく、常に著用してゐるものも多く、又小學校の兒童が常用してゐる所もある。生地は木綿縞・瓦斯縞・絲入縞・紺木綿等であるが、ある地方では、外出著として、セル又は絹物で作つたものも穿く。地方によつて「もんぺい」「裁附（たつつけ）」「裾細」等ともいふ。

【先年】　センネン　大正十年四月。

【私の歌の友人】　結城哀草果氏をさす。

結城氏は、本名光三郎。前姓は黑沼。哀草果はその號。明治二十六年十月、山形市下條町に生まれ、山形縣南村山郡本澤村菅澤に居住。アララギ派の農村歌人で、歌集「山麓」「すだま」、隨筆集「村里生活記」等の著がある。

【億劫】　オックウ　「億劫（おくこう）」の轉訛。（一）佛語。一劫を億倍した時間。數へ盡くされぬ程の多くの劫。萬々劫。億萬劫。（二）轉じて、久しく暇のかゝること。容易くないこと。面倒なこと。手間のかゝることを豫想して、著手に氣の乘らぬこと。手おもいこと。こゝは（二）。

〔劫〕　梵語「劫簸」(Kalpa) の略。「分別時節」（通常の年月日時を以ては算し能はざる遠大の時節を分別すること）・「長時」「大時」等と譯す。智度論五に「佛、譬喩を以て劫の義を說く。四十里の石山を長壽の人ありて百歲ごとに一たび來りて細軟の衣を以て拂拭し、此の大石を盡くすも、劫は未だ盡きざるなり。また四十里の大城に芥子を滿たし、長壽の人ありて百歲に一たび來りて一の芥子を取り、芥子盡くるも劫はなほ盡きざるなり」とある。

【新調】　シンテウ　（一）新にとゝのへること。新規に作ること。又、その物。（二）新しい調子。新曲。こゝは（一）。

【耕作】　カウサク　田畑を耕して穀物・野菜を作ること。耕植。耕種。

【木樵】　キコリ　（卷一、一九二頁を見よ）

【紺無地】　コンムヂ

〔紺〕　藍の濃いもの。黑色に少し紫味又は青味を帶びた色。

〔無地〕　織物の縞・模樣などがなくて、全面同じ色であること。又、その織物。

【他出用】　タシュツヨウ　よそへ出掛ける時にのみ用ゐるもの。よそゆき。外出用。

【容易ならぬ】　（一）たやすくない。（二）尋常でない。こゝでは、貴重でおろそかに出來ない、といふほどの意。

【奥羽線】　アウウセン　こゝでは、奥羽本線をさす。（東北線に奥羽線といへば、奥羽本線及びその支線の總稱。）福島市から米澤・山形・秋田・弘前等の

諸市を經て青森市に至る國有鐵道。全長四八七・四粁。明治二十五年鐵道敷設法の公布と共に、その第一期線として計畫されたもので、これを南北の二線に分ち、北線は日本鐵道會社線（後の東北本線）の青森驛を起點として明治二十六年七月起工、南線は同會社線福島驛を起點として二十七年二月起工、前者は南進、後者は北進して秋田縣雄勝郡湯澤町に於て相合し、三十八年九月を以て全線の開通を見た。

【一山驛】　イチサンエキ　こゝでは、奥羽本線の上ノ山・山形兩驛の中間にある金井驛（山形驛の南五・三粁）をさしてゐるのであらう。

〔山驛〕　山路の宿場。山間の停車場。

【上野驛】　ウヘノエキ　東京市下谷區上野山下町に在る。東北本線・信越線・常磐線等の起點。明治十七年日本鐵道會社線（後の東北本線）の開通以來東京市の北玄關をなしてゐる。昭和七年新建築成り、省線電車山手線・京濱線の外、東京地下鐵道線・京成電車線等もこゝに連接されるに至つた。

【絶無】　ゼツム　絶對に無いこと。少しもないこと。皆無。

【衆人注視の的】　シュウジンチュウシのマト　多くの人々が注意して見つめる目標。

〔注視〕　視力を集中させること。目をつけて放さないこと。みつめること。凝視。

〔的〕　こゝでは、めあて、目標、目的、の意。

【敏感】　ビンカン　微細なこともよく感ずること。するどくさとい感じ。

【近代人】　キンダイジン　近代思想の感化を受けた人。

〔近代〕　(一)今の世。近世。(二)歴史上では、近世からこなた、即ち最も新しい時代。我が國では明治以後、西洋では十九世紀以後。

【農人】　ノウジン　農作を業とする人。農夫。百姓。農民。

【市内電車】　シナイデンシャ　こゝでは、專ら舊東京市内の交通に當つてゐる東京市營の路面電車を、鐵道省經營の省線電車（主として舊東京市とその郊外（新市域）とを連絡するもの）その他（私設の郊外電車及び地下鐵電車）に對して呼ぶ稱。

東京市内の電車運轉は、明治三十六年乃至三十八年の間に於て、三會社（東京市街鐵道・東京電車鐵道・東京電氣鐵道）の手によつて開始せられ、三十九年その三社が合同して東京鐵道株式會社となつたが、四十四年七月東京市に於てこれを引繼ぎ、同年八月から市營電車として全線の營業が行はれ、爾來逐年の擴張を經て今日に至つてゐる。全長約一六七、三五三粁（昭和十年九月現在）。

【麹町にある私の宅】　東京市麹町區下六番町二十七番地に在つた作者の居宅をさす。

作者は大正七年八月から十年六月までこゝに居住し、同月東京市外代々木山谷に移り住んだが、十三年四月以來再びこゝに居宅を定めて最後まで移らなかつた。こゝは最初の居住時代である。

〔麹町〕　カウヂマチ　東京市麹町區。舊東京市十五區の一（大東京三十五區の一）。市の中央部に位し、大體圓形。繞らすに外濠を以てし、内には内濠を隔てて宮城を擁し奉り、宮内省・内閣・樞密院（以上宮城内）、商工省を除く各省、貴衆兩議院・大審院・警視廳・參謀本部・近衞師團司令部・東京府廳・東京市廳その他樞要なる諸官衙を網羅して政治的中樞をなすと共に、東京驛を中心に多數のビルディングが整列して一流の銀行・會社・新聞社等がこれに據り、經濟的中心をも形づくつてゐる。靖國神社・日比谷公園・帝國ホテル等も區内にある。

【いきなり】　物事に出會つた時、よく考へもせず直ちに行爲するにいふ語。事のなりゆくにまかせて。ゆきあたりゞ次第に。準備もせずに。すぐに。やにはに。だしぬけに。突然。

【車掌】　シャシャウ　電車・汽車・乘合馬車・乘合自動車などの中で、車内一切の事務を扱ふ者。

【停留所】　テイリウジョ　電車・乘合自動車等の停留する一定の場所。

【緣】　エン　こゝでは、ゆかり、かゝはり、關係、等の意。